
METALMAX 《クロスストーリーズ》

X・オーバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスストーリーズ
METALMAX

【Nコード】

N0829X

【作者名】

X・オーバー

【あらすじ】

METALMAXのような世界に放り込まれた主人公・黒岩 悠介。いきなり手に入れたビッグモスを駆りこの世界を生きることとなった彼の明日はどっち？

注意

この作品にハーレムルートは存在しませんのでご了承下さい

思いつくままに書き連ねる小説です。世界観設定にMETALMAX

Xシリーズ。他にもダンクーガやクロノトリガー等の設定を混ぜ合わせた闇鍋な世界ですが、それでも宜しければ読んでみて下さい。

「ううはやう？」

目が覚めた時、そこは知らない場所だった。

「なんでやねん……」

眩きは広い空間に溶けて消え、俺は呆然と辺りを見回した。バスケットコートなら五面も六面もとれそうな広い空間には見たことのない機材が置かれ、その向こうの壁には一般住宅ならば三階ほど高さの通路が設けられており、そこから伸びるキャットウォークを目で追えば、そのさらに上には鎖などが垂れ下がった天井がある。

どこその工場か、漫画やアニメにありそうな格納庫然とした広い空間に呆然としていた俺は、ふと背後にも何かがあることに気づき振り返った。

「ああ、ビッグモス？」

そこに存在した巨大な戦車(?)に目を疑い、反応に困りながらそれを眺める。

ビッグモス。知る人ぞ知るロボットアニメ、『超獣機神ダンクーガ』に出てくるメインマシン『ダンクーガ』を構成するメカの一機。と
うか腕も脚も胴体も全部ビッグモス一機で事足りてることを考えるとダンクーガそのものと言っても過言じゃないと思うのは俺だけじゃないだろう。

さて、ビッグモスについての説明はそんなところで置いて。問題は今俺の目の前にあるビッグモス(?)についてだが、ノーマルモードで佇むこの戦車、俺の記憶にあるのと細部が異なるような。

正面に周りながらそれを見上げ、前に突き出された四つの銃身に注目する。記憶違いでなければここに装備されてるのはパルサーとかメーサーとか言うビーム砲だったと思うんだけど、目の前のそれはお世辞にもそうは見えない。どちらかというと機関銃とかのその様だ。他に戦車の上に装備されていた大砲も四つか五つはあったと思うんだけど、目の前のそれは大口径の砲が一門のみ。それ以外にもカラーリングが違うような気がする。まあ全体的なシルエットとかは記憶とあまり違わないんだけどなあ。

などと思いつつ、そこで思考を切って現実逃避を止めることとする。

目が覚めてみればどことも知れぬ兵器の格納庫らしき場所。辺りには俺以外に人もおらず、背後には巨大な戦車。取りあえず現実逃避してみたがそれで事態が解決する訳も無し。俺は諦めて現状把握のために役立ちすなものを求めて辺りを探し始めた。

さて、探索しながらで悪いけど、ここで一つ自己紹介を。

黒岩 悠介

マンガも読めばゲームもする二十歳。片田舎で車の整備の仕事をして生活する彼女いない歴〃のどこにも出もいるような男だ。それがなんでこんな事になっているのかはさっぱりわからない。昨晚部屋でゲームをした後、布団に潜った所までは覚えてるんだけど……。

取りあえず機材の間を歩いて回ったが、見覚えのある機械や見覚えのない機械があるだけで、これと言って現状がわかりそうなものは見つからなかった。まあここは格納庫みたいだから仕方ないのかも知れないけど。ビッグモス（？）のところまで戻った俺は、ビッグモスの後ろに隠れるようにあつた扉へと向かう。探索を始めてすぐに見つけてはいたんだけど、ここの探索を先に終えようと後回しにしていたものだ。扉の前で一つ深呼吸をしてドアノブを掴む。鍵はかかっておらずすんなりと扉は開かれ、俺は首だけを入れて中を見回した。

そこは整備員の休憩室なのか部屋の中央に置かれたテーブルを囲むように四つの長いすが配置された小さな部屋だった。その部屋もやはり無人であることを確認し俺は室内へと入る。俺が入った扉の正面にはさらに奥へと続く扉があり、部屋の奥には低い機動音を立てる自販機が一つ置かれていた。

「『おい 茶』『B S S』『カルピス オーター』……………」
「一応日本って事なのか？」

TVの向こうにしか存在しないようなものがあつたことはこの際無視し、やっと経た情報に安堵のため息を吐く。休憩室らしい狭い室内を軽く見回すだけで終わらせ、俺は次の扉を開いた。
次には言った部屋はロッカールームだった。教室二つ分はありそうな部屋に列を作るロッカー達。無駄だろうと思いつつその一つに手を伸ばしてあげようと試みると、想像に反しあっさりと開いた。

「不用心だなあ……………」

ぼやきながら吊してある作業着を掻き分け中を漁ると変色しボロボロになった新聞を見つけそれを引っ張り出す。ボロボロの新聞を広

げ、載っている記事を読み進めるが、全く持って理解ができなかった。いや書いてある言葉の意味はわかる、わかるけれど………機械の暴走？ノア？バイオ兵器？これじゃまるでメタルマックスじゃないか……。

「ふあ〜」

大きな欠伸とともに目を覚まし、そこが自分の部屋でないことを確認した俺は、昨晚の出来事が夢ではなかった事に肩を落とした。ロツカールームで見つけた新聞を読んだ俺は、開けるロツカーを片っ端から開き、鍵のかかったロツカーはこじ開けてでも他の情報誌を探し出した。そして得られた情報は、差異はあれどもかの《大破壊》により荒廃した世界、METLMAXシリーズの世界であることを差すようなものばかりだった。とはいえ実際に目にしたのは情報媒体を介した情報のみだと、俺は自分の目で見るまでは信じるものかとロツカールームを飛び出し、建物内を走り回った末にようやく屋外へと出ることになった。屋上の端へと駆けより、俺は見ることなった。目の前に広がる、『砂の大海原』、すなわち砂漠を。その光景に呆然と尻餅をついた俺の視界の先には、とどめとばかりに姿を現す巨大な鯨。

METLMAX2最初の難関スナザメだった。屋上から見渡す限り、この建物は砂漠に囲まれており、その砂漠の中を悠然と泳ぐスナザ

メが複数。戦車も無しに出歩ける状態じゃないのは明らか。建物の中に戻った俺は思考を停止しようとする頭を無理やり働かせてこの建物内の探索を再開させた。

それでわかったことは、(うすうすそうかとは思っていたが)この建物が軍事基地だったという事。お偉いさんのオフィスをらしき場所で例のビッグモス(?)についての書類を見つけ、それを読んでみたところあれは量産型ビッグモスと言うらしい。某博士が作った初代ダンクーガのような野生云々のシステムをオミットしたデチューン機でその他にも色々と改良を重ねたものらしい。まあ確かに操縦するのに野生云々素質云々なんて軍用兵器としては最大の欠点だよなあ。ダンクーガ本編見たいな状況でもって無い限り?あれ?地球各地が制圧されたのって第 次SRWの設定か?ダンクーガ本編もそうだったよな?

まあいいか。取りあえずこの書類の他にも整備、操縦マニュアルが手には入ったのは本当に良かった。基地内探索中に食料は見つけたけど、いつかはそれも尽きる訳だし、そのとき戦車無しでスナザメが居る砂漠を宛もなく歩くなんて洒落にならない。他にもシミュレーションルームを見つけ、それがまだ生きていたので、しばらくはここでビッグモスの操縦訓練をするべきだろう。

軍事基地なだけあって武器もたくさん見つかった。ハンドガン、マシンガン、グレネードランチャーetc。シミュレーションで訓練する傍らこれらの方も訓練しなくちゃなあ。

基地のすべてを探索した訳じゃないけど、とりあずこの世界はダンクーガのような歴史を経た後『大破壊』に見舞われたのだろう、というのが俺の予想だ。

多分それで間違っていないと思うが、間違ってもそれを調べる方法は無いんだろうなあ。あったとしてもそう簡単には調べられないだろう。

さて、いつまでもこうしてるわけにも行かないだし、さっさと起きてまずい飯でも食うか。ほんと、軍用食ってまずいのね……………。

探索とか訓練とか整備をして過ごすこと約一月。あれからこれといった情報を得ることもなく時間は過ぎていった。基地内で見つけた食料も早くも半分を切り、そろそろここを離れるべきだろう。大破壊以後のこの世界、人の居る町を見つけるのにどれくらいかかるかわかったもんじゃない。

故に俺は今、基地内で見つけた食料、銃火器、弾薬をビッグモスに積み込んでいるところだ。オリジナルのビッグモスと同じく兵員輸送能力を持つこの機体のコクピットは非常に広く、見つけた火器を片っ端から積んでいって尚余裕があるほど。もしここに残っていたのが他の機体だったらこうはいかなかっただろうな。

朝早くから始めた出立の準備は太陽が中天を越え西へと向けて傾き始める頃になって、ようやく終わりを迎えた。

基地内で見つけた銃火器に食料、弾薬そして衣類。その他にも戦車用（ここがMETLMAXの世界ならクルマ用と言うべきか）の装備等も詰め込み終えてようやく一息着くことができた。

ビッグモスの兵装格納コンテナの半分を占領する浄水装置と浄水タンクから喉を湿らす程度僅かな水を汲んで口に含む。

元世界でプレイしたゲーム知識と、この基地で得た情報。この二つ

から考えられるこの世界の水事情。おそらくこの世界の水もほとんど汚染されてるんだろっなあ。

そう考えると水を一杯飲むだけでも気を使ってしまう。結構な量積んだつもりだけど節約しなくちゃな。浄水機があるとはいえ一度に浄水できる量には限りがある。元の世界のように使えばすぐに底をついてしまうはずだ。

「さて、せっかく準備も終わったんだ。行くか」

ビッグモスのコクピットに乗り込みエンジンに火を灯す。フットペダルを踏み込むのに併せてビッグモスがゆっくりと動き出す。格納庫を横切り遠隔操作で開いたシャッターを潜り抜け、俺はついにこの世界に第一歩を踏み出した。

「……………短い時間だったけど、世話になったな」

後部カメラからの映像を映すディスプレイの向こう、シャッターが閉じてゆく基地を見ながら自然とそんな言葉がこぼれ出る。

俺がこの世界に来てしまった理由はわからない。とりあえずの目標として元の世界へ帰還する方法を探すこととしているが、その手ばかりは外の世界ではなくあの基地にこそある可能性もある。となればいつかはここに戻ってくることもあるだろう。だからそのときまでさよならだ……………。

レーダーマップの端に何かが映った。一瞬映って消えていった何かの影に興味が湧いた俺はレーダーの索敵範囲を広げてみることにした。それに影が映ったのは北の方角、つまり俺の進路方向だ。早めに調べておいて間違いはないはずだ。

レーダーマップの倍率が下がりさらに広範囲の索敵情報が表示され、今し方俺が見た影が表示される。

「モンスター、だよな？」

レーダーの操作をしながらも走らせていたビッグモスを止め、脇から引つ張り出したマニュアルを手にコンソールを叩く。

ディスプレイに映し出されていた外の映像とレーダーマップが入れ替わり、俺の操作に従って影の索敵が行われてゆく。

まず手始めにレーダーの索敵を広範囲モードから範囲は狭いが寄り精密な索敵を行える精密モードに切り替え、映った影を拡大し精査する。

ディスプレイ内で拡大されるに従って影は分裂し、それが十数この群れとなる。

さらにその中の一つに絞って精査を行うと、さらにその影のみを拡大し格子状の立体がディスプレイに映し出され、ただの丸い影だったそれを立体シルエットとして描き出し、それを元にビッグモスのデータバンクから情報が検索されシルエットに色が付き、立体映像として映し出される。

「ロードガンナーの群れか」

表示されるデータからサイズが人とあまり変わらないことに気づき、まわりつかれると面倒だなと眉をしかめる。

とはいえロードガンナーなら機銃で相手を出来る相手、射程に入っ

たら近づかれる前に前部に搭載した四門のガトリングで一掃すればいい。

再びビッグモスを走らせようと座席に座り直した直後、ディスプレイにさらなる情報が映し出される。レーダーに映るロードガンナーの群れの中央の影が拡大され、先ほどと同じ手順で立体化されてゆく。そして映し出されるシルエットはどこからどう見ても人間の物だった。レーダー内の影が色分けされ、それによれば人らしき影が一つに対して残る十を超える影はすべてロードガンナーだと言うのだ。

「な、もしかして一人でこの群と戦ってるのかよ！」

コンソールを乱暴に脇に寄せ、レーダーマップと外の映像が入れ替わるのも待たずに俺はビッグモスを急発進させる。

「間に合ってくれよ……………」

フットペダルを全開まで踏み込み、ビッグモスは先ほどまでのゆっくりとしたスピード嘘のように、砂煙を立てながら全速力で走り出した。

「よし、見えた！って、あれ？」

砂漠を全速力で走らせ十分とかならず目的の物が見えてきた。見えてきたんだけど……。俺はディスプレイに映る光景に間の抜けた声を上げてしまった。ディスプレイに映るロードガンナーと、それと戦う人間。人間の方は未だ健在で周囲には幾つものロードガンナーの死体が転がっている。それは別におかしくはない。ロードガンナーはMETLMAX2では序盤に出てくる雑魚敵なのだ、倒すことが出来るといのは別におかしい話ではない。ではなぜ俺が間抜けな声を上げたのかというと、それはロードガンナーと戦う人間の姿だった。

望遠レンズで映されたその人物は、後頭部で一つにまとめられた金色の髪をなびかせながら、まるで獣の様な動きでロードガンナーと戦っていたのだ。

しかも着ている物は灰色の毛皮のパンツと、同じような毛皮を胸元に巻いてるだけのまるで原始人のようなそれ。

何のアクセサリーかネコの尻尾の様な物まで付けてるし、髪型を除けばまるでクロノトリガーのエイラだ。よく見ると女性だし。

時に四つ足、また時には腕だけで縦横無尽に動き回り、ロードガンナーに噛みつき引つ掻いて戦う彼女に見とれていたが、彼女の背後に回ったロードガンナーの銃撃を避け損ね片腕に傷を負ったのを見て俺は我に返った。

「……………見ほれてる場合じゃないな。すぐに助けないと」

目を見張るような強さだが流石に多勢に無勢であるようで、よく見れば体中に細かい傷を負っているのを確認し、ロードガンナー達が射程内に入った所で機体を停めて基地で装備させた100ミリロングレンジキャノンを作動させる。オリジナルのビッグモスとは違い、この量産型ビッグモスは武装を自由に変更することができるようになっていた。さすがにいつでもどこでもというわけではないが、用

途に合わせて変えられるのはうれしい話だ。ビッグモス上部に装備された五つの砲の内折り畳まれていた真ん中の砲が音を立てて発射体制に入る。動き回る彼女に当たらぬようターゲットに群れの外縁部を走るロードガンナーを選ぶ。

大きく円を描いて彼女に銃口を向けようとして速度が落ちたところを、狙い撃った！

轟音とともにシミュレーターでは味わったことのない衝撃がコクピット襲い、前後に揺れた俺の体はシートベルトに抑えつけられた。

放たれた砲弾は運悪く射線上に飛び込んできた個体諸共違うことな
くターゲットのロードガンナーを吹き飛ばした。想定外だろう攻撃
にロードガンナーと彼女の動きが止まり、一斉にこちらに振り返る。
俺は外部スピーカーのスイッチをオンにする。

「こっちだ！急げ！」

俺の声が聞こえたのだろう、彼女はまるで豹の様に（この場合は女豹か？）四つ足で此方へと駆け出し、ロードガンナーの群の中から脱出する。それに気付いたロードガンナー達もまた此方に向けて走り出す。ビッグモスのミサイルポッドから放たれたナパーム弾が、彼女に追いつがるロードガンナー達の先頭に降り注ぎ、砂の大地に炎が燃え盛る。後続のロードガンナー達は突然の火柱に急停止する事もできず為すすべもなくその中に飛び込んでゆく。バーベキューになることを免れたのは先頭を走っていた一体と、最後尾を走っていた二体のみ。それを見た彼女は体を反転させ、砂の上に跡を付けてスピードを殺し、すぐ背後にまで迫っていたロードガンナーに跳びかかった。体を丸めて空中で回転し、体のすべてぶつけるような跳び蹴りがロードガンナーの首を一撃でへし折り、とどめとばかりに放たれた拳が胴体にめり込んだ。

それを見ながらビッグモスを前進させ、残る二体のロードガンナーがガトリングの射程に入った瞬間、俺はトリガーを引き絞り二体のモンスターを蜂の巣にしてやり、レーダーで敵が残っていないことを確認したところで俺の初めての戦闘は幕を閉じた。

戦闘が終了し、俺は医療キットを手に取り急いでハッチを開いて外に飛び出した。警戒した様子でビッグモスを見上げていた彼女は、出てきた俺に対しても警戒心も露わに身構える。

しかし、こうやってみると画面越しに見るよりも美人だな。顔も整ってるし、背も高くプロポーションもいい。さっきは豹を例に挙げたけど、まさしく豹などの野生動物に通じる美しさを持った女性だ。

「敵じゃない、君の傷を手当てしてただけだ。……………ああ、言うてることわかるか？」

「……………さきの声 同じ。さきの火 お前やらせたか？」

ビッグモスを指差し尋ねる彼女に頷くと、警戒心はそのままに一応構えを解いてくれたため俺はホッと息をついた。

「……………やっぱりエイラに似てるな」

構えを解いた彼女を見た俺は、ゲームの画面越しに見たゲームのキャラクターに容姿が似ていることに自然とそうこぼしていた。そして小さく呟いたその言葉が聞こえたのか彼女の表情驚きに次いで険しい物に変わり、後方に飛び退き距離を取りながら身構える。

「お前 なに！？ なんてかかさま 知ってる！？」

「は？かかさま？」

「エイラ それ かかさま。 かかさま 名前 エイラ いう！」

すごい形相で睨みつけてくる彼女だが、それで美人が台無しになることはなく、ある意味いつそう美しさが際立っている。

とそんなことを考えてる場合じゃないな。俺は手にしていた医療キットを手放し、敵意が無いことを示すように手のひらを見せるように両手を上げる。

「ストップ、ストップ！」

今まで気配とかそういう物をついぞ感じたことのなかった俺だが、今彼女から向けられ肌で感じている物がいったい何なのか簡単に想像がつく。多分これが殺気とかそういうものなのだろう。肌がぴりぴりと泡立つ感じがする。

これは下手なことは言えないよなあ。出来ればすぐに手当するか後ろに振り返ってダッシュで逃げたいところだけど、どっちを選択してもなんの抵抗もできないままねじ伏せられるのが簡単に想像できる。

とりあえずは……………。

「も、もしかしてお父さんの名前はキーノと、か……………」

正解のようです。彼女から感じる殺気がより強くなりました。つまり彼女はあのクロノトリガーのキャラクターのエイラとキーノの間に産まれた子供というわけか。うる覚えだけどエンディングで何人かの子供に囲まれてたっけ？あれ？違ったっけ？

「えっと、二人のことは知人に聞いて多少知ってる程度だよ。ああ、クロノって……………」

そうクロノ。クロノ、クロノ、クロノトリガーなんちゃって……………。伝達方法はともかく他者から聞いたことには違いない。多分、きっと……………だといいなあ。

「クロノ？ クロノ………… クロ……………!？」

クロ！ それ クロのことか！？ 知ってる かかさま 仲間 クロいってた!？」

驚きを全身で表現するかのよう飛び上がると同時に俺に向けられていたさつきは霧散し、知らぬ内にかいていた汗に盛大にため息をついた。

「とりあえず、手当したいからこっち来てくれるか？」

ここは砂漠なだけあって日差しが強く、日に当たっているだけでも肌が焼けるように暑い。黙ってこちらの言うことを聞いてくれた彼女をビッグモスでできた日陰に連れ込み傷の手当てを始める。一応彼女の傷の具合を記しておく。全身に傷を負っているとはいえその大半がかすり傷程度の物で、薬を塗っておけば特に問題の無いものばかりだ。例外は俺が到着したときに負った右腕の傷と、それよりも前に受けたいらしい左足の傷だ。これはちゃんと手当しないと破傷

風とかになりかねない。

「傷口を消毒するから沁みても我慢してくれよ」

無言で頷くのを確認し傷口に医療用のアルコールをかけた。

「~~~~~」

そんなに沁みたのか、歯を食いしばりながらも声無き悲鳴をあげ、尻尾が地面を叩くが先に言ったとおり我慢してもらおうことにして治療を続ける。というかその尻尾ってアクセサリーだよな？

「……………アイラ アイラいう。お前 なにいう？」

沁みるのを我慢しているのだろう、歯を食いしばりながらの言葉に俺は考える。名前かぁ。ここでフルネームを教えたら俺の呼び名もくろになっちゃうのかなぁ？被るしペットみたいな名前だし、それは流石になぁ。

「悠介だよ、悠介。よろしくなアイラ」

「悠介 ユウスケ…………… ユウ…………… ユウ！ そうか ユウか！ お前 ユウいうか！」

やっぱりそうなるかぁ、と苦笑しつつ傷の手当てを終わらせる。

「さてと、なあアイラ。此処がどこかわかるか？
俺気がついたらこの近くに倒れててさ、此処がどこなのかかわからな
いんだよ」

性格にはこの近くの基地の中だがそのことはあえて割愛する。この質問の意図は彼女の現状を知るためだ。明らかにMETLMAXな世界にクロノトリガーの、それも恐竜人なんてのがいるような時代のアイラがいるのはどう考えてもおかしい。俺のように気がついてたら此処にいたのか、それともゲートのようなものを使って集落とここを行き来しているのかもしれないし、はたまた俺やモンスターの方が彼女達の時代にとばされてきたのかもしれない。

「わからない アイラ 不思議山で かり してた。でっかい恐竜 戦ってた。 それ倒して 村 帰るとき 変な音 聞いた。 アイラ 振り返ったら 変な黒いのあった。それ 触ったら 引っ張られた。 気付いたら ここ いた」

つまりアイラも俺と似たような状態ってことが……。

「ユウ コイツ お前 仲間か？」

そうやってアイラが指差すのはもちろんビッグモス。戦車なんて見たこと無いだろうし、そう思うのも仕方ないんだろうな。エイラもロボを見て変な奴とか言ってたし。

「ああ、そんなものさ。

なあ、アイラ。俺は元居たところに戻る方法を探そうと思ってるんだけど、アイラも一緒にくるか？」

「いく！ アイラ 村帰りたい。 かかさま ととさま あねさま みんな みんな心配！」

「それじゃ、今から俺たちは仲間だ。改めてよろしくな」

立ち上がったって右手を差し出すと、意味が分からなかったのか、キョトンと首を傾げるも、アイラはすぐに笑みを浮かべて俺の手を取ってくれた。

こうして俺の旅は始まり、初めての仲間ができた。この先何があるのか、本当に元の場所に戻る方法があるのか。それはまだ何もわからない。

「JJJはJJJ?」(後書き)

黒岩 悠介

本作の主人公。多作品設定のない完全なオリジナルキャラクター。車の整備の仕事をしていた20歳。ゲームや漫画は人並みに好き。

アイラ

《クロノトリガー》のメインキャラクターの一人エイラとサブキャラクター、キーノとの間の子供。そんな設定を持つオリジナルキャラクター。作者はクロノクロスをプレイしていないので、そちらにもし同様の設定、または同じ名前のキャラがいたとしてもいっさいの関係はございませんのであしからず。

量産型ビッグモスN

《超獣機神ダンクーガ》に登場するメインメカの一機、ビッグモスの量産型という設定を持つ重戦車。野生云々の機能はオミットされている。合体・変形機能は健在なため、ヒューマノイドモード、アニマルモードへの変形は可能。現在他のマシンがないため合体は不可能。

アイラを仲間に加えた俺はひとまず最初の目的通り北へと向かっている。基地にあったマップが正しければ、この砂漠の北には大きな町があったらしい。今ではどうなっているかはわからないが、地図上ではなかなかの規模の町だったらしく、それならば規模は小さくあれども今でも人が住んでいる可能性があると考えたのだ。ビッグモスの操縦をしながら夕飯となったロードガンナーの肉をかじり、チラリと後部の座席を覗いてみれば俺と同じようにロードガンナーの肉をかじるアイラが居る。ちなみにこのロードガンナーは先の戦闘で倒した奴だ。最後にアイラが倒した奴を彼女が解体し、その場で焼いて見たのだ。細かく切って串に刺し、後は焼き残しが無いようにまんべんなく焼くだけ。そんなシンプルな調理法だったが、期待薄だった味が存外まともだったは幸이었다。ちなみに毒の有無は医療キットの中にあつた試験紙で簡単に調べることができた。ロードガンナーの味は独特なものだった。牛肉のような味の濃さはなく、鳥のように淡泊でもない。あえて何が近いかと問われると枝豆だろうか？

なぜに枝豆？

枝豆の味を薄めたような肉の味に塩がほしいと思うが、基地で得られたら食料の中にあつた香辛料は少なくそう簡単に使うべきではないだろう。

今はとにかく節約するべきだ。補充のめどがたつまでの間は。

「ユウ これ なんだ？」

食べ終えた串を空のコップに放り込み、操縦に集中しようとしたところアイラに声をかけられる。

首だけを後ろに向けると、アイラはまるで木から降りようとする猫のような格好で座席の下に置かれた箱の中をのぞき込んでいた。

首を傾げながら箱の中から取り出されたもの、それを見た瞬間大きな声を挙げそうになるのを抑えて唾を飲み込んだ。

「アイラ、そいつを元の場所に戻してくれ。そいつは通称『アップル』って言うて敵に投げつけて使うものだ。このコクピット内で爆発したら、俺も、お前も………死にかねないからな」

「ん わかった」

アップルを箱に戻し、その箱を元の座席の下に戻すのを見届け、俺は大きく大きく息を吐いた。よかった、爆発しないで。『アップル』というのは形がリングに似た手榴弾の通称で、確かアメリカ軍が正式採用してるんだっけか？同じく通称を『パイナップル』とする手榴弾とならび、そういった方面に詳しい人にはメジャーな代物だろう。

ちなみに俺は銃火器については元の世界でちよくちよくウィキペディアで調べただけなので広く浅く知ってる程度の知識だ。

「ユウ これは？」

どうやらコクピット内にあるものはえらくアイラの好奇心を刺激する物ばかりらしい。再び後ろを振り返り、彼女がトリガーに指をかけた状態で銃口をのぞき込んでいるのを見たときには本気で血の気が引きました。

その後似たようなハプニングを繰り返し、精神的に疲労を重ねることにはなったが、その甲斐あってアイラは満足そうに座席に座っている。ときおりチラリチラリとコクピット内を見回したりしているが、もう銃口を覗き込んだりと言ったこともせず一安心といったところか。

……………それはともかくアイラのあの座り方はどうにかならないのかな？あの猫とか犬みたいな座り方。あなた女の子でしょ？普段から水着みたいな格好とはいえそれはまずいでしょう？大事なところ見せつけてるみたいではしたくないですよ……っ！

とはいえそれを指摘するのも俺がそれを見ていたようで非常に恥ずかしい。いや、見ちゃってましたよ！？だって僕も健康的な成人男子ですから！

なんてバカなことをしていたからか、それとも全くと言っていいほど敵が現れなかったから油断していたのか、理由はその両方なのだろう。急にアイラが表情を険しくしたことに首を傾げた直後、コクピット内に鳴り響いた警報に慌てて視線を戻した。

「なんだなんだいったい！？」

「敵 くるー！」

アイラの叫びとともにレーダーに敵影が映った。それもビッグモスの左方数十メートルのところに……………！

「のあああっ！」

俺の悲鳴じみた叫び声に反応するようにビッグモスは加速する。砂

塵を巻き上げて駆け抜けたそこにスナザメがあの鋭い牙光らせながら飛び込んできたのだ。

「クソツ！レーダーには映ってなかったぞ！」

現在レーダーの索敵範囲半径5km。即座に襲いかかられるような位置にいたのなら、もっと前からレーダーに映っていてもおかしくないというのに。

いや、理由はすでにわかっている。俺は奴が砂の中に潜行する事ができることをすっかり失念していたのだ。

「くそつたれが！」

スピードのついたビッグモスを砂の上でドリフトさせて背後に振り返る。再び砂の中に消えようとするスナザメに対し今から主砲を用意するのでは遅すぎる。トリガーを引き絞り前部四門のガトリングが火を吐きスナザメの背を叩くが、奴は気にした素振りも見せず、砂中へと潜ってしまった。舌打ちをついてコンソールを叩き、ビッグモスの主砲、四門の100ミリキャノンを起動させそれぞれに初弾を装填する。レーダーに視線を映すも砂中を移動するスナザメの影をレーダーが映すことはなく、俺は舌打ちをしながらビッグモスのマニュアルを引っ張り出した。

戦闘中にする事じゃないのは確かだが、頭の中で考えたところで事態を解決など出来そうに無い。

「ある程度でもいいから奴の居場所がわかれば……………」

乱暴にマニュアルを開きつつ再度右側から姿を現すスナザメに、再びビッグモスを加速させる。しかしスピードを出した状態の機体を片手で制御できるはずもなく、まずい角度にまで傾いた機体を立て

直すためにマニュアルを放り出して操縦桿にしがみつくことになる。

「くっそ！」

悪態をつくのと同時に大きな衝撃とともになんとか機体を立て直し、スナザメに振り返るが、奴は既に潜行した後だった。

こうなったらとにかく走り回って、的を絞らせないようにするしかないか……………。

唇を噛んでそう結論付け、それを実行に移そうとしたとき背後から扉のスライドする音が聞こえそれに振り返ると、コクピットを出ようとするアイラの姿があった。

「おい、どこに行くつもりだ!？」

「アイラ 外 戦う！」

俺の声に振り返ったとき彼女は不適な笑みを浮かべてそう言ったのけた。

その笑みに一瞬見ほれそうになるが、頭を振って振りほどく。

「無理だ!お前も見ただろあの大きさを!お前がいくら強かったって生身でどうこうなる相手じゃないだろう!？」

「ユウ かかさま 知ってる。 かかさま ラヴオス 倒した」

「それは知ってる!だがお前はエイラじゃない！」

「アイラ かかさま 違う。 それ 当たり前。 アイラ まだ弱い
かかさま とても強い。 でも それ 最初違う。 かかさま 戦
った。 戦って 力得た。 だから アイラ 戦う。 戦って 力

付ける。アイラ　かかさまみたい　強くなる！」

そう言つてアイラはコクピットから駆けだしていった。それを止めようとした瞬間、空気を読まずにスナザメが砂中からとびかかってきたため、俺は操縦に集中させられることになった。

そうこうしている間にハッチが開かれた事を示すランプが点滅し、アイラは外へと飛び出していった。

砂の中に潜つたスナザメがすぐさま旋回して襲いかかってくるのを間一髪回避する。このタイミングでは照準を合わせる隙は無い。何度目になるかわからぬ舌打ちを打とうとした瞬間、ビッグモスを踏み台にアイラがスナザメに跳びかかるのがディスプレイに映つた。丸めた体を空中で回転させながら全体重を乗せて放つ蹴り。ロードガンナーをしとめたときは気付かなかつたが、あれはアルマジロキツクか？

アイラの渾身の蹴りがスナザメの目に突き刺さる。外皮に守られていない部分に受けた不意の一撃にスナザメは悶え、砂の上で暴れまわる。潜ることなく痛みに暴れたおかげで機体を振り替えさせるのが間に合い、アイラがすでに離れているのを横目に確認してトリガーを引き絞つた。

放たれた四つの砲弾は一発も外れることなくスナザメの横っ腹に突き刺さり、砂漠に苦しい悲鳴が響き渡る。

「やったか？」

スナザメって悲鳴を上げるんだ……。などとアホなことを頭の隅で思いつつ、キャノンに次弾を装填させながら画面の中のスナザメを睨みつける。しかしやはりこれだけでは致命傷にはならないのか、傷口から血を流しながら砂中へと潜り始めるが、キャノンの装填はまだ終わっていない。

ビッグモスの機銃が火を噴き、スナザメに銃弾の雨を浴びせかけるが怒りに痛みを感じてないのか動きを鈍らせることもなく砂の中へと消えてゆく。アイラが軽い身のこなしでビッグモスによじ登ってくる。キャノピーのそばまでよじ登った彼女はガラスを叩きながら大声で呼びかけてきた。

「ユウ 敵 後ろ いる！」

ビッグモスの後方を指差して言う彼女に従ってビッグモスを反転させる。それと同時にリーダーにスナザメの影が映り、振り向いた先の砂を押しつけてスナザメが宙に舞う。巨大な口を開き、その巨体でのし掛かるように降ってくるスナザメにキャノンの砲口が向けられ、四つの轟音と大きな衝撃がコクピットを襲う。

口内に四つの砲弾を受けたスナザメの巨体が宙で弾け、しかしそのままビッグモスの上へのしかかってくる。このままのしかかられたとしてもビッグモスが破壊されることはないだろう。しかし今ビッグモスの外装にはアイラがしがみついている。下手をするとスナザメとビッグモスの間に押しつぶされることになる。

とっさにコンソールに打ち込んだコードに従ってビッグモスは動く。折り畳まれていた機構が稼働し、前後のキャタピラ四肢へと。アイラがしがみつくキャノピー部が胸部へと。頭部がせり上がりキャノンを装備した上部が背部となり、ビッグモスはノーマルモードからヒューマノイドモードへと変形しを完了させ、アイラを抱えるように守りながら、落ちてくるスナザメに肩部を叩きつけるような体当たりを放ち弾き飛ばした。

「……っ！大丈夫か、アイラ！？」

今までに体験したことのないヒューマノイドモードの強烈な衝撃に歯を食いしばりながら、ビッグモスの手の中で目を丸くするアイラ

に問いかける。

「お おお！ すごい！ 強い！ これがビッグか!？」

ビッグモスの名前も縮められたようで、エイラがシルバードに乗ったときのようにはしゃいでいた。エイラの無事を確認した俺は砂の上に投げ出されたスナザメに向けてヒューマノイドモードとなったビッグモスを走らせる。暴れることで砂の中へと潜ろうとするスナザメに掴みかかり、ビッグモスと同等の大きさを持つ敵を丸太を引っこ抜くかのように持ち上げ、そのまま砂の上に叩きつけ押さえつける。背部からせり上がり、肩ごしに砲口を前に向けた100ミリキャノンのスナザメに押し付け、拘束から脱しようとする敵にゼロ距離から砲弾を撃ち込んでゆく。一心不乱にトリガーを引き続けた俺は、外部マイクが拾った何かを叩く音で我に返った。メイン画面に開かれたウィンドウはビッグモスの頭部を映したものだ。そこで真剣な表情でビッグモスの頬(?)を叩くエイラの声が聞こえてきた。

「ユウ 敵 死んだ。 ユウ 落ち着け」

再び移したメイン画面にはピクリとも動かなくなったスナザメの姿後ずさるようにビッグモスを後退させ、エイラはスナザメの死骸へと飛び降りる。ビッグモスをノーマルモードへと変形させ、俺は急いでハッチへと駆け出した。

ノーマルモードへと戻ったビッグモスから降りると、スナザメの上かどうか飛び降りたエイラが駆けよってきた。

「ユウ！ やったぞ 敵 倒した！」

そう言っただけ抱きついてくるアイラを、俺は受け止めることもできずにそのまま砂漠の大地へと押し倒される。

「おぐうっ！」

それが致命傷だった。じゃれつくアイラを突き飛ばし、彼女から数歩離れたところで膝を突く。

「う……………、うう……………グエエエエツ……………」

酔った。

完膚無く酔った。ヒューマノイドモードでかかるG、振動はシミュレーションの比ではなく、機体を固定して乱射した100ミリキャノンの振動は三半規管をこれでもかと揺さぶってくれた。外の空気を吸おうと外に出た瞬間、飛びついてきたアイラが正しい具合に腹部に入り、俺は砂漠に腹の中身を盛大にまき散らすのだった。

「ユウ 大丈夫か？」

「……………なんとか」

胃の中身をすべて吐き出した俺は、星空の下で横になっていた。ビッグモスの横で固定燃料を燃やし、それでスナザメのヒレを入れたスープを作っている。スープと言っても多少塩を使っただけで、

後はヒレだけ入れて煮ているだけの代物だが。

時折体を起こしてはスープの様子を見て横になる。

アイラにはああ言ったが、実際のところ寝転がってないとちとぎっかつたり。

肉の焼ける匂いがするのはスナザメとの戦闘の前に食べていたのと同じロードガンナーの肉を焼いているからだ。焼けた肉にかぶりつくアイラを見ながら俺は大きく息をすった。大破壊だ汚染だなんだと言っている割には、こここの空気はきれいだった。ここが砂漠だから。

ただそれだけの理由かもしれないが、今の酔った俺にとってはありがたい話だ。

「今後、滅多なことではヒューマノイドモードはやらねえぞ」

ぼそりと呟いた言葉にアイラは首を傾げるが、気にするなと手振るとアイラは再び食べることに集中する。

腕を組んで枕にして再び空を見上げる。この世界に来て既に一月は経つがこうやって空を見上げるのは初めてだな。

夜もネオンやらなんやらで明るい日本の町ではまずお目にかかれないう星空。以前に見たのは十年以上前に家族でキャンプに行ったときだっただろうか？

これだけ星があれば星座も見つけ放題なのかもしれないが、生憎と正座の知識に乏しい俺ではそれは叶わないか。星座がわかれば季節くらいはわかったのかもしれないんだけどなあ。

「ユウ これ まだだめか？」

ロードガンナーの肉はすでに食べ終えたのか、アイラが待ちきれな

といった様子で鍋の中をのぞき込んでいた。

「そうだな、そろあおる大丈夫かもな」

アイラにせかされつつスープを器によそい、俺も食事を開始した。ちなみに味は可もなく不可もなく。昔食べたフカヒレのスープを思いだしてみるも味は大分違うような気がする。やっぱり海の物と砂の物じゃ味も違うか。

U・シャークなら美味いフカヒレがとれるのだろうか？

その後ビッグモスの中で一夜を明かした俺たちは、朝日が昇るよりも早くに出発し日が中天にさしかかる頃に砂漠を抜け、なんのトラブルもなく夕暮れには目的地の街へとたどり着いた。かつての面影を廃墟に残す街へと。

「やっとついたな」

街の外れにビッグモスを止め、座り続けで堅くなった筋を伸ばし、解しながら席を立つ。

「ん ユウ こどこだ？」

座席の上で丸くなっていたアイラが、寝起きの猫よろしく顔を擦りながら起き上がり、ディスプレイに映る光景に首を傾げる。

「さあ、俺もここがどこか分かって来たわけじゃないからな。ここがどこかってことも含めて情報を集めるぞ」

こっちの世界に来たときから着ているTシャツとデニムのズボン。その上から基地で見つけた防弾ジャケットを羽織り、中のホルスターに銃をしまう。

基地で見つけたハンドガンの内の一つで『FN Five-seven』

確かベルギーの銃製造会社FN社製のハンドガンで、5.7mm弾を使用する唯一のハンドガン。他にこの口径の玉を使うのは同じFN社製サブマシンガンのP90ぐらいのはずだ。正確にはサブマシンガンではないらしいんだけど、今は割愛しておく。

でこの『FN Five-seven』の使用する5.7mm弾は殆どの防弾チョッキを貫く貫通力と高いマンストッピングパワーを兼ね揃えた高性能故に、貫通力を抑えた弾を造らされたという逸話を持っている。さらにはどこぞの州警察か何かが正式採用しようとしたという話まである優秀な銃なのだ。

うん、元の世界のとあるゲームで使って以来お気に入りだったり。

でもこの銃、弾に互換性が無いため基地で予備弾が見つからなかったからあまり無駄遣い出来ないんだよね。ここで売ってたら嬉しいんだけど、望み薄かなあやっぱり。

腰のホルスターにはスタンロッドを下げて準備は完了。ロープでひとまとめにした銃火器を手にビッグモスを降りる。この銃火器は基

地で見つけた物の中で三丁以上あった物だ。戦車を持っていても無一文の俺が金を手に入れるための苦肉の策だ。さすがにモンスターを狩ったところで金が手にはいるとは思えないしな。

一応ビッグモスの中には同じ銃が予備と含めて二丁ずつとっておいてある。いつどれが必要になるかもわからないからだ。

「それ どうする？」

「売れるようなら売っぱらってお金に換えちまおうと思ってね。ほら、俺たち無一文だし」

銃の束を見て首を傾げるアイラにそう説明すると、彼女はよけいに首を傾げて眉間に皺を寄せる。

「金 なに？」

そっか、未来とかに行ったことのあるエイラならともかく原始時代で暮らしてたアイラにはお金の概念はないのか。

勝手に商品に手を出したりしないように言いくるめておかなきゃまずいな。

街に入る前に気付いて良かったと思いながらアイラにお金の説明をする。できうる限りかみ砕いて説明したのだが、やはり時代の壁は厚いのか首を傾げてばかりのアイラ。結局彼女には「俺に聞かずに物にさわらないこと」「ほしい物があってもまずは俺に尋ねること」この二つを約束させて街へと入ることとなった。

酒場から漏れる喧騒を聞きながら、建物から零れるわずかな灯りを

頼りに道を歩く。街に入つてすぐのところまで人間用装備屋の場所を聞いた俺たちは、街の東側へと向かつていた。道を進む度に喧騒が遠ざかり、建物から零れる光も減つてゆく。そして明らかに人が住んでいない建物ばかりが並ぶ区画に出たところで俺たちは足を止めた。

「……………騙されたかな、これは」

多分騙されたんだろうなあ。いくらなんでもこんなところに店を構える必要性が思い浮かばん。

さて、それじゃあ彼が何で俺たちを騙したか考えてみるか。

- 1、ただのいたずら
- 2、ここらに彼の仲間達が隠れてる
- 3、俺に恨みがある

1 だったら楽だけど、今は他の可能性を考えるべきだよなあ。でなきや考える意味ないし。3も除外していいだろう。なんせ初めてあつた相手だ。この世界に来てから今までアイラ以外の人間にあつたこともなかつたんだ、恨まれることどころか好かれる様なこともしてないのだ。まあ他人に顔が似ててそいつの恨みを変わりに受けてつて可能性もあるけど、そんなこと言つてたら話が終わらないから3についてはここまです。じゃあ残る2だけど、これが一番ありそうだよな。何せ俺が持つてるのは武器の山。売れば金になるし、こんな大量の武器が手にはいるんだからな。

「アイラ、隠れてる人っている？」

「いる。あつち こつち」

わお、囲まれてら。こりゃ2で決定だな。しかしそうするとどうやってこの状態を脱出するか。ここできびすを返せばすぐに出てくるだろうし、このまま進んでもそのうち姿を現すはずだ。つまりどう行動しても早いか遅いかの違いだけで結果は変わらないってわけだ。なら、あいつ等にとつて都合のいい場所まで待つよりもここいらで動かした方が得策かな？大して変わらないような気もするけど。

「ユウ どうした？」

「うん、アイラの言った隠れてる連中だけど、多分敵だ」

細かいことはぬき。単刀直入にそう告げると、彼女は獲物を前にした獣を思わせる笑みを浮かべる。周りに見えないようにFive-sevenを抜き、銃を持った手をジャケットの袖の中に引つ込めて隠す。そしてアイラに目で合図をして元来た道へと振り返る。それと同時に左右の廃屋の、申し訳程度に残っていた扉が中から蹴破られ、数人の男達が飛び出してきた。

数は前に四人、後ろに三人か。実は世界の荒廃は大破壊ではなく核ミサイルですとでも言いたくなるような揃いのモヒカンヘッド。ドクロのシャツに锚付きベストを羽織った男たちは、それぞれがチェインやら鉄パイプで武装し小物臭溢れるにやけ面を並べている。数の優位に酔ってるのだろうか？こちらが二人なうえに、その片方がかよわい（相手主観）女なのが原因か？

顔を巡らせて確認すると、銃を構えている奴が前後に一人ずつ。他の奴らは銃火器を所持してないのか手にしてるのは鉄パイプとかのみだ。さて、どうするべきか……………。

「兄ちゃんよお、こんな時間にこんな場所で何やってんだい？」

銃を持った男が一步前へ出ると、手にした銃を見せびらかすように構え直しながら口を開く。

「いらぬ物の処分にね。人間用装備屋がこっちにあるって聞いたんだけど、どうやら道を間違えたみたいでね」

あいつが構えてるのはAK-47か……。脅しのつもりか銃身の下に付けられたレーザーサイトの光がまるで嘗め回すかのよう
に防弾ジャケットの上を這いずり回っている。

「別に間違つてないぜ？俺たちが人間用装備屋さ。無料買い取り専門だけなあ」

何がおかしいのか周りの連中とともに馬鹿笑い。笑う度に銃身が揺れて狙いが俺からそれる。たまに左右の連中にもレーザーサイトの光点が映るのは後ろで構えてる奴も同じってことか。

「一つ言っておくけど、それを言うなら無料引き取りだ。金を払わないなら買い取りとは言わない」

間違いは正しておかないとね。

「な、うるせえっ！てめえは黙って持つてるもん置いて失せればいいんだよ！」

「あと女もなあ！」

冗談ではなく本気でそうだと思っていたのか、モヒカンAは俺の指摘に顔を真っ赤にして怒鳴る。周りの連中から追加注文を受けた気もするが、そんな物に従うつもりは毛頭無い。とはいえ俺のジャケ

ツツで防げるかなあ？あれってアサルトライフルだし、ライフルって言うからには弾種もライフル弾か？

背中に冷たい汗が流れるのを感じながら唇を舐め、俺の横でやる気満々なアイラの様子を窺う。今にも飛び出しそうな彼女に苦笑し、男の胸元に赤い光点が現れるのを見た。さっき背後を確認したときの配置上狙うことのできない位置にだ。再びそつと背後を確認するが、アサルトライフルを構えた男は位置を動いておらず、他に銃を構えている奴もいない。

正面の男を再び見ると、胸元に現れた光点は腕を伝って男の持つアサルトライフルへと至りそこで消える。消えた光点が続けて足下に現れると、それは素早く俺の足下を背後へと抜けていった。これつてつまり、誰かが助けてくれるってことか？三度背後を確認すれば、後ろの男の持つアサルトライフルに光点が灯る。この謎の光点の主が何者かはわからないけど、とりあえず今は信用させてもらうか。

「おい！さつさとそいつを置けって言ってるだろうが！無視してんじゃねえぞ！」

男の方も色々限界のようだ。俺に指摘されたことがよっぽど恥ずかしかつたらしい。

「わかったよ、こいつを置けばいいんだろ？」

左手に提げていた銃の束を無造作に振り、放物線を描いて地面に投げ出されたそれに、男達の視線が集中する。

廃屋の中から銃声が響く。背後から男のくぐもった悲鳴と重い物が落とされた音が響く。銃声と共にアイラが豹のごとく正面の男目掛けて駆け出し、俺は袖の中に隠していたFive-sevenを銃

を持つモヒカン男へと向ける。突然のことに対処することができない男に向けて発砲。吐き出された二発の銃弾は男の左肩と右腕に命中し、AK-47の照準が大きくそれる。銃撃を受けてのけぞる男に近づき上段回し蹴りで蹴り飛ばし、左手で逆手で引き抜いたスタンロッドのスイッチを押す。ロッドに電流が流れる空気の焼ける音を聞きながら、男の鳩尾に突き立てる。声にならない悲鳴を上げて男は痙攣し気を失った。

アイラの方を見れば、見事なフランケンシュタイナーで男を一人を沈めるところで、大地に沈んだ男の表情がどこか満足気だったのをここに記しておく。きつとこいつが追加注文の主だったんだろうなあ。

「あああああああああああああつ！」

背後から鎖のこすれるジャラリという音が響き、俺は慌てて背後に振り返ろうとする。奇声を上げて鎖を振るうモヒカンの方が早かった。例え防弾ジャケットとはいえ所詮はジャケットということか。背中を襲った痛み息を呑み、それをこらえて闇雲に振るったスタンロッドに鎖が絡みつく。スイッチを入れたままだったロッドから電流が流れ、鎖を伝って流れた電流に男は硬直する。俺がロッドを振るうことで鎖は男の手を離れ廃屋に残っていた窓ガラスを割って建物の中に消えていった。

男に振り返り、体に電流が走ったショックから立ち直っていないモヒカンに改めてロッドを振るい、それを受け白眼を向いて気を失った。

次の相手はと当たりを見回した俺の横を、モヒカン達の中でも一番大柄だった男が地面と平行に飛翔し、廃屋の壁に頭から突き刺さる。

飛んできた方を見れば投げの姿勢のアイラが楽しそうに笑いながら視線を向けてくる。それに苦笑しながら正面にいた四人を片付けたことを確認し、背後の三人を相手してくれているだろっ謎の人物の援護に向かおうと其方に振り向いた。

「へえ、まだ荒いが結構やるじゃないか」

そこには武器も何も構えず地面に倒れる三人のモヒカン達の真ん中に立つ、どこか庸平を思わせる雰囲気漂わせる男。

「対バイオテロ部隊（B・S・A・A）南米支部所属のクリム・ウインタースだ」

男・クリム・ウインタースはそう言って手を差し出した。

襲撃（後書き）

クリム・ウィンターズ

b i o h a z a r dのクリス・レッドフィールドがモデル。本当はクリス本人を出したかったのだが、作者がb i o 1をプレイしたのは年単位で昔な上、5は途中までプレイした後手放したりとクリスのキャラクターをつかめておらず、名前だけの中途半端なオリキャラになるくらいなら、作者の中のクリス像をモデルにしたオリキャラとして登場させることになった。クリスと同じB・S・A・Aの南米支部隊員。

ちなみに名前のクリムは赤系の色クリムゾンからで、クリム「クリムゾン」レッド「レッドフィールド」。ウィンターズは、ウィンター「ス」ウィンター「冬」一月二月「クリ」スマス「クリスとなっていない。ただの語呂とかで決めた物なのあしからず

黒岩 悠介の世界

「対バイオテロ部隊（B・S・A・A）南米支部所属のクリム・ウインターだ」

「あ、俺、黒岩 悠介って言います。助けてもらってありがとうございます」

対バイオテロ部隊って、確かバイオハザード5とかでクリスが所属してる組織だよな。まあバイオモンスターが山ほどいるMETLM AXなこの世界にはぴったしかもしれないけど……………。

「南米支部ってことは、ここってアメリカ大陸？」

クリムさんの手を握り返しながら自己紹介をした俺は、彼の言葉の中から知れたかった現在の情報を引っ出し目を丸くする。いや、世界を越えちゃったんだし日本から遠く離れた場所においても不思議はないんだけどさ。

しかし驚く俺に対してクリムさんは、バツが悪そうに苦笑しながら首を振った。

「いや、悪いが俺もここがどこなのかわからなくてな。

だがその様子からすると君もどこからか跳ばされてきたくちらしいな」

「ということとはクリムさんも？」

「ああ、気がついたら東の森の中にいてな。それが二月ほど前の話だ。

とりあえずそこらへんの話は後にしよう。さすがにこんな所で立ち話つてのもあれだしな。それと、そちらのワイルドなお嬢さんのことも紹介してくれると嬉しいんだが？」

モヒカン達の使っていた鎖を弄くっていたアイラが、自分に話題が及んだことに気付いたのか手にしていた錆だらけの鎖を放り捨てて近寄ってくる。

「アイラ。 アイラ アイラ言う」

「そうか、アイラってのか。俺はクリム・ウィンターズだ、よろしく」

流石に二度目なら意味も分かったのだろう。俺の時とは違いすぐに差し出された手を握り返し、上下に大きく振るう。

アイラの握力が強いのか、表情が痛みに歪みそうになるのを我慢して努めて笑顔を作ろうとするクリムさんに俺は心の中で合掌していた。

その後クリムさんに案内されたのは、俺たちがビッグモスを隠した場所からそう遠くない位置にある倉庫だった。戦車なら楽々入りそうなサイズでもビッグモスだ少々窮屈そうだな。

「ここだ。この街はかつては栄えてたんだろうが今はこの有様だ。持ち主もわからないけどような建物ばかりなんでな、俺達で勝手に使わせてもらってるのさ」

「俺達」？クリムさんの他に一緒にとばされてきた人がいるんですか？」

俺やアイラは一人でこの世界にとばされてきたため、クリムさんもそうなのかと思ってたんだけど違ったのか？

「ああ言い忘れてたな。俺はこの世界に一人でとばされてきたんだが、さつきも言ったがそれが二月ほど前の話だ。他のはそれぞれ一月半ほど前と半月前にこの付近にとばされてきてな。俺が狩りに出た時に見つけてに保護したんだ。

境遇は誰も同じだからな、今では協力して生活してるのさ」

つまり俺とアイラみたいな関係か。こういう人たちと合流できたのは運が良かったな。

「二人がどんな奴かは会ってからのお楽しみだ。
おい、戻ったぞ」

新しく付けなおしたらしい、他の建物と違って綺麗な鉄製の扉が音を立てて開かれる。中から蛍光灯の光が漏れ、外の暗闇に目が慣れていたためその眩しさに手をかざした。

「おおクリムはん、おつかれさん。ちょうどクルマの整備が終わったとこや。頼まれたもん設置し終わったんやけど、後で確認しといてくれます？」

倉庫の中から聞こえてきた聞き覚えのある声に、俺は驚いてそつちに視線を送る。軍用らしいジープのそばでオイルで汚れた手をタオルで拭いている整備服姿の女性。丸いメガネに三つ編みおさげ、そ

してどこか奇妙な関西弁。

そこにいたのはサクラ大戦のメインヒロインの一人、帝都靈的防衛部隊帝國華撃団花組隊員『李 紅蘭』だった。

おいおいおい、今まではゲームとかで知ってる人から微妙にずれた人ばかりだったのにここで直球御本人かよ。

「ん？クリムはん、そちらのお二人はどうしたん？」

「さつきそこだな。俺たちと同じだ」

「ああ、やっぱり他にもおったんやな。ここにとばされてきてもうた人。

うちは李 紅蘭います。気軽に紅蘭て呼んだってや。

見たとおり機械いじりが好きでな、ジープとかの整備を引き受けとるんや。よろしゅうな」

「黒岩 洋介です、よろしく」

「アイラ アイラいう。よろしく コウラン」

まさかここで紅蘭とは、サクラ大戦シリーズをプレイしたとき最初にクリアしたのが彼女なだけに、ちよつと緊張する……………。

「おいおい、紅蘭が美人だから緊張するのはわかるが、今からそれだと身が持たないぞ」

「いややなあクリムはん、お世辞いうても何も出えへんで」

紅蘭が美人なのは認めるけど緊張してる理由は違うんですけど。

まあそれはともかく、身が持たないって……。こういう場合お決まりは、残る人も美人ってパターンだけど……。

「また転移者を拾ってきたのか。しかも今度は二人か」

声がした方、ロフトに続く階段を見上げると、そこにはメロンを二つ抱えた……、失敬。

翠のかかった銀髪のクールビューティーが立っていた。晒した肩に奇妙な紋様のタトゥーを刻み、膝上まであるロングブーツに、胸元のベルトで吊すという奇妙な着方のジャケット。今やスーパーロボット大戦シリーズでお馴染みの『ラミア・ラヴレス』だ。

今度はスパロボシリーズで初めてクリアできたAの主人公様ですか。なに、今日は俺の『初めて』に遭遇する日ですか？

「私は地球連邦軍戦技教導隊所属のラミア・ラヴレスだ。とはいえ、ここではそんなものなのに役にも立たないのだがな」

あ、OCGの方のラミアさんでした。

「黒岩 悠介です」

「アイラ いう。よろしく」

階段を降りて近寄ってきたラミアさんと握手をし、立ち話も何だからとロフトへと案内された。結局武器屋に持って行き損ねた武器は倉庫の方に置かせてもらい、およそ一月ぶりにまともな味のコーヒーを貰って一息つき、元いた世界についてとこっちにとばされてからの一月の説明をする。説明と言ってもその大半はシミュレーション

ンでの訓練しかしてなかったから、話すのはビッグモスのことと、基地を出てこの街にたどり着くまでのことだけなんだけどね。ちなみにアイラは、こっちにとばされてきたその日の内に俺と合流しているの、この世界に来てからまだ一日しか経っていない。

「悠介のいた世界は、クリムのいた世界に近いみたいだな。最もバイオテロなんてものは無かったようだが」

「はい、バイオハザードって言われるとインフルエンザぐらいしか思い浮かびませんね。ゾンビだクリーチャーだのとなると、それこそマンガやゲームの世界の話ですね」

いや実際バイオハザードで思い浮かぶのはゾンビだけどね、あのゲームは超ヒット作だし。

「こつやって話を聞くと、やっぱりラミアはんの世界が一番科学技術が進んどるんやね。うちの世界やと、光武みたいな霊子甲冑が精々やし、ウン十メートルの人型ロボットなんて夢のまた夢やわ」

「あの、蒸気機関であれだけの物を作れるだけでも十分凄いですけど……………」

ロフトから下を覗き込めば、さつきは何故気付かなかったのかジープのそばに緑色の光武が鎮座していた。あの形状は光武二式だよな？紅蘭機ってホバー移動もできたと思うんだけど？

太正ってこつちでいう大正に相当する時代なのにあれだけの物があるんですよ？他にもミカサとかつてハガネとかクロガネよりもでかいんじゃないのかな？そんな物が80年前に作られてるんですよ？蒸気機関が主流の世界で。

「生体科学についてはクリムの世界が抜きんでているような気がするがな」

「おいおい止めてくれ、俺達はそれで苦勞してるんだぜ？第一、この世界のモンスターと比べればまだマシだ。俺たちの世界の奴らはウイルスをばらまきさえしなければ自然発生する事はないんだからな」

ウエスカーがそのウイルスを全世界にばらまくことを計画してるって知ったらどうするんだらう？

なんとなくウロボロスウイルスのことを思い出しながらコーヒーをすすり、いつの間にかソファの上で丸くなって眠っているアイラに視線を落とす。それぞれの世界について説明して貰ってる間に眠っちゃったんだよなあ。きつと難しい話を聞いてると眠っちゃうタイプなんだらうな。

「それで、悠介はこれからどうするつもりだったんだ？」

「一応この街で情報を集めてから元の世界に戻る方法を見つける為に、世界中を回るつもりでした。まああるかどうかかわからないのがネックですけど」

「目的は一緒うちゅうわけやな。うちらもこの街でできる限りの準備をしてからここを発つつもりやったんよ。そなら悠介はん達もうちらと一緒に行動すればええんちゃうか？」

「そうだな、一応ジープに機銃と大砲を積めるよう紅蘭に改造して貰っているところなんだが、お前たちが一緒に来てくれるなら俺達にしてみても非常に心強い」

紅蘭の言葉にクリームさんが頷き、ラミアさんもコーヒーを飲みながら小さくうなずいた。

「願ってもないですね。ビッグモスを持つてるっていったって俺なんて素人だし、アイラは強いけどスナザメみたいな大型が相手だとさすがに無茶が過ぎますし」

昨日のスナザメ戦を思い出し、ブルリと体が震える。下手をするとアイラはあそこで死んでいたのかもしれないのだ、ということをもっと更になつて思い出したのだ。

「それじゃ、これからよろしくお願いします」

翌日、俺とアイラクリームさんと一緒にハンターオフィスへと向かっていた。やっぱりハンターオフィスの方に登録しておかないと、いくらモンスターを狩ったところでお金にはならないらしい。

スナザメなんかはかなりの額の賞金が出るらしいのだが、仕方がないとはいえ少しもつたないような気もする。

珍しいものに引かれてはぐれそうになるアイラを引っ張ってようやくハンターオフィスへとたどり着く。オフィスの中はクーラーがあるらしく、入った瞬間クーラー独特のあの冷気が俺たちを出迎えてくれた。

「いらっしやいませ、ハンターオフィスにどんな御用ですか？」

「新しいハンターの登録だ。こっちの二人がそうだ」

クリムさんに促されてカウンターの前に出ると、見事な営業スマイルのお姉さんが俺たちの前に機械の端末を差し出した。

「こちらの方にお名前と性別、年齢などをご入力してください」

うわあ、こりゃアイラは無理なんじゃ？

チラリと横のアイラを見ると、案の定使い方がわからないらしく端末を掲げてみたり、上下に振ってみたりしている。それを見かねたクリムさんが苦笑しながらアイラの代わりに記入をし始めるのを見て、俺も自分の端末に記入し始めた。

名前 / 黒岩 悠介

年齢 / 20

性別 / 男 女 | オカマ |

職業 / メカニック兼ハンター

以上でよろしいでしょうか？——YES / - -

これでよし。ていうか性別のところのオカマって何だよ。いるのか？オカマで登録する奴。

アイラの方も終わったようで、一緒に端末を返す。端末はカウンターに備え付けられたら機械にセットされ、カウンターのお姉さんがなにやら操作した後、返した物とは別の機械端末を差し出された。

なんでもこれを持っていけば倒したモンスターと賞金首が記録されるらしい。それを元にハンターオフィスで賞金を受け取るんだとか。持つてるだけ記録されるってどんな仕組みになってるんだ？登録を終えた俺たちは、その足でビッグモスを隠している街の外れへと向かった。

ビッグモスは街はずれにある中程からポツキリと折れた高層ビルの影に隠してある。基地で見つけた光学迷彩シートをかぶせてあるのだが、ビッグモス程のサイズになると全て隠すことができず、下の方のキャタピラ部分だけ丸見えになっている。シートを止めている杭を引き抜き、巨大なシートを引き吊りおろして現れた巨体にクリムさんが口笛を鳴らす。

「こいつは凄いな、確かにこいつならスナザメみたいな大型モンス

ターともやりあえるな」

「まあ、パイロットが素人なんて苦戦しましたけど」

「シミュレーターで一カ月、一昨日が初実戦だったか？それで勝てたんならたいしたもんだよ。どんなに性能が良くても使うのは結局人なんだからな」

ビッグモスに乗り込みエンジンに火を入れる。腹に響くような重い起動音を聞きながら、俺はビッグモスをクリムさん達の倉庫へと向けた。

「それにしてもここってどんな街だったんでしょね。高層ビルがあるかと思えばすぐそばには倉庫街。昨日のあの場所は住居区画ですよね」

「ああ、もしかしたら港町だったの可能性があるな」

はい、なんですと？こんな大地の真ん中に港町？

「お前はまだ見てないだろうが、西の方に港跡があるんだ。波除けのテトラポットに防波堤、今では人の住居になってる壊れたクルーザーとかがいくつか。ここいらにいるモンスターもスナザメにクルマカリ、テロ貝、地雷ヒトデ。海洋生物がモンスター化したような奴らが多い」

「……………それはこいらへんが海だったから、ってわけですか」

「可能性があるだけだけどな。だが疑問もある。ここまで地形が変わってしまうような年月が過ぎているにしては街の建物が綺麗に残

りすぎている」

「そうですね、特に木造の建物なんかは倒壊しててもおかしくはない」

「それは鉄筋コンクリートの建物もただけだな。かといって短い期間で地形が変わるような異常気象なりがここいらを襲ったとしたら、それこそ街がここまでの形で残っているのもおかしいと思わないか？」

「ええ、本当に一体何があったんでしようかね……………」

さすがにノアが暴走した程度でここまでなりそうにないしなあ。あだこうだ議論を続けているうちに倉庫街に着いてしまい、その話はおひらきとなった。クリムさん達の倉庫すぐそばに一回り大きな倉庫があったため、そこにビッグモスを格納する。車庫入れの際に倉庫の入り口を機体で削ってしまったがそこは気にしない。その程度でビッグモスの装甲に傷は付かないから。

「くあゝ ついたか？」

いつの間にか席で眠っていたアイラが目を覚まし、真っ先に降りていった。アイラって戦闘がある時以外ってだいたい眠ってるような……………。

彼女はその後紅蘭とラミアさんと一緒に買い物に行くことになっている。さすがにいつまでもあの格好でいるのもまずいからなあ。防御力的にも見た目的にも。

ビッグモスから降りた俺たちは、倉庫の方です俺が持ってきた武器の整理をする事になっている。やっぱりこういうのは本業の人がい

た方がいからね。案の定、俺が売ろうとしてた分の大半が予備及びパーツ取り用として残されることになった。

「よし、いくぞ」

装備を整え終え、クリムさんの言葉に頷きジープの荷台に登る。荷台には簡易銃座が設けられ、そこにFN社製軍用機関銃『FN MAG』が設置されている。このジープにゆくゆくは大砲を搭載するつもりだっていうんだからすごい話だ。その場合助手席を取り外し、そこから砲身を伸ばすつもりらしい。でもそれってどう考えても一人では装填できないし、相方は常に荷台の方で座らずに立ってなきやいけなくなるような……。そんな改造するくらいならクルマを探しにいった方が早いと思うんだけど……。

さて、俺たちがジープに乗ってどこに行くのかというと、これから東の森へ狩りに行くのだ。旅支度の資金と生活費を稼ぐため、一日おきに森へ行くらしい。今まではクリムさんとラミアさんが出ていたらいいんだけど、今回は俺とクリムさんで狩りに行くこととなった。これは俺の訓練も兼ねているそうで、クリムさんは今回ジープの運転に従事することになっている。森の入り口に差し掛かったところで一旦ジープを止め、俺は教わったとおりにMAGに弾を装填し、荷台から延びるベルトで身体を固定する。

「準備OKです」

「よし、いくぞ。今回行くところは雑魚ばかりだが油断はするなよ」

忠告の言葉とともにジープが発進し、MAGを持つ手に力がこもる。

森に入って最初に遭遇したのはカニランチャーだった。ミサイルを放とうと口が開いたところに7.62NATO弾を叩き込む。口の

中のミサイルを貫いたか、口部から起こる爆発に巻き込まれカニランチャーは木っ端みじんとなった。その後も千葉なのに東京を冠する夢の国のアトラクションのごとく現れるモンスター達に銃弾を撃ち込んでゆく。

ビームハチドリ、トーストラプトル、イモバルカン。
森の中ということなだけあって、ミュータント系のモンスターが大半のようだ。

道に沿って移動するだけでこれだけのモンスターが出るって、本格的に中に入ったらどうなるんだよ……………。

「ちっ、やっかいなのが出てきたな」

クリムさんのぼやくような声に前を見ると、森の中から行くてを阻むかのように現れる影。いや違う、あれは……………

「黒い絨毯……………」

「ああそうだ、よく知ってたな。あいつに銃弾は効きづらい。他のハンターに聞いたところ、砲弾みたいに周りを巻き込めるなら話は別だが……………」

ジープに積まれているのはFN MAGのみ。大砲は積んでいない。しかし今もこちらに近づいてくる奴らに対してこれでは効果は薄い。ならば……………

「……………良くわかってるじゃないか」

ジャケットから取り出し黒い絨毯び投げられた焼夷手榴弾がモンスターの真ん中に落ち、一瞬で炎上する。続けて一つ二つと放った焼

夷手榴弾によつて大した時間をかけることなく黒い絨毯の殲滅は終了する。

火が収まるを確認してジープを走らせる。その後も現れるモンスターを順調に排除しながら俺たちは森を抜けていった。

森の中を通つてたどり着いた北の丘。見晴らしのいい丘の上にジープを止め俺たちは一服していた。
こんな世界でも手にはいるのか、煙草を吸っているクリムさんの横で持参した水を飲みながら雲を眺める。

そういえば3にはクラウドゴンとかいたよなあ。

「なあ悠介、聞きたいことがあるんだがいいか？」

「聞きたいことですか？」

「お前俺たちに何か隠してないか？」

「え？」

「スナザメしかり、ロードガンナーしかり。さっきの黒い絨毯、そしてその対処方法にしてもそうだ。元いた世界から来て一カ月、どこぞの基地跡に籠もっていたにしてはモンスターについて詳しくすぎると思つてな。基地にデータがあったのかとも思ったが、そんな詳細なデータが集められるくらいなら基地が無人で放棄されてるわけがないだろうしな。それも武器やビッグモスみたいな兵器を残したままで」

そこで一度言葉を切ると、煙草の灰を落として俺の方を見た。

「他にもだ、昨日光武を見て言っただよな？『蒸気機関で』ってな。紅蘭は気付いてなかったが、昨日あいつが自分の世界についての説明をしたときもあいつは一言も蒸気機関については一言も言っただよな。もう一度聞くぞ？お前は一体、なにを隠している？」

……参ったな。

ばれるにしたってこうも早くばれるなんて思ってもみなかった。

「人間誰だって人にいえないことの二つや三つは持っている。俺だってそうだからな。だから本当ならこんなまねはしたくはない。だが、察してくれ。俺も、ラミアも紅蘭もこの状況をどうにかしようと必死なんだ。そこに何かを知っているらしいお前が現れたんだ」

視線を上に向け、灰がフィルターにまで達した煙草を灰皿に捨てる。どちらも口を開くことなく、ただ静かに吹いた風邪が俺たちの間を通り過ぎてゆく。

しらはつくれることはできる。けどそれをした瞬間、俺とクリムさん達との間に溝ができることになる。最初は小さな溝はその内修復不能なほどに大きな亀裂になること必須だろうな。しかも俺が隠している秘密なんて、クリムさんが言うようなものじゃない。いや、たしかに役に立つ情報もあるのかもしれないけど、現状をどうにかできる情報を持っているわけじゃない。そんなくだらないことでの人たちの信頼を失っていいのか？

一分かいや十分か？クリムさんがため息とともにクルマのキーに手を伸ばした。

「……………ラミアさん達には黙っていてもらえますか？」

「……………内容によるな。ラミアも紅蘭も色々鋭い。お前が何か隠していることくらい感じてるだろうしな」

まあ、話しても害があるわけじゃないしな。

「クロノトリガー、biohazard、サクラ大戦、スーパーロボット大戦、METLMAXシリーズ……………。俺の世界にあるゲームソフトの名前です」

「ああ、日本の娯楽は俺の世界でもたくさん出回ってる」

「クロノトリガーは星を喰らう者ラヴオスを倒すために、少年少女が時を超えて戦う物語。このゲームの登場人物の中にエイラとキノという名前の二人がいます。この二人がアイラのご両親です」

「……………なに？」

空を見上げていた視線を俺に向けるが、かまわずに話を続けてゆく。

「biohazardシリーズはラクーンシティでアンブレラ社が起こした洋館事件が始まりだった」

クリムさんが息を呑み、座席から身を起こし俺のことを睨みつけるように凝視している。

「洋館事件の生存者、クリス・レッドフィールドとジル・バレンタインはその後、対バイオテロ部隊（B・S・A・A）の創立メンバーとなる。そしてもう一人、ウェスカーという全ての黒幕ともいえる男は世界に暗躍しバイオテロを繰り返している。あってますか？」

「……………ゲームの話じゃなかったのか？」

「ゲームの話ですよ、僕の世界の。biohazardシリーズはナンバリングタイトルだけで5つ。その他にもいくつもの作品が販売されてて、俺も何本かプレイしてます」

大きなため息をついて背もたれに身体を預け、彼はもう一本煙草を取り出した。クリムさんがライターに手を伸ばす前に拾い上げ、火を差し出すと無言で火をつけて紫煙を吐き出した。

「サクラ大戦は太正時代を部隊にした物語」

「……………紅蘭か」

「彼女、帝国歌劇団の女優なんですよね。表向き」

「つまりその裏側つてのが俺たちに話した特殊部隊の一員って身分か」

「はい。その部隊にはいるには霊力という特殊な力が必要で、帝都東京、パリ、ニューヨークに同様の部隊がありますけど、三つの実働部隊でも男の隊員は二人のみ。

正確には帝都東京、パリの両華撃団花組の隊長を勤めた大神一郎とニューヨーク華撃団の隊員で先の大神一郎の甥、大河新次郎の二人のみで、後は全員女性のみで構成された部隊です。

華撃団のメンバーは非常時以外は舞台女優として生活しているんです。紅蘭がこの話をしなかったのは光武の事もあったからだと思います」

「まああんな物と一緒にいて女優ですって言われても信憑性ゼロだしな」

「スーパーロボット大戦シリーズは俺の世界にあるいろんなロボットアニメを一つの世界、一つのストーリーの中で共に戦わせるゲームです。その中のさらに二シリーズ、スーパーロボット大戦A、オリジナルジェネレーション。Aでは選択次第ですがラミアさんが主人公で、OGでは登場キャラクターの一人でした。AとOGでは世界が違うんですけど、この世界にとばされてきたラミアさんはOGの世界から来たんだと思います」

「理由は？」

「戦技教導隊があるのはOGの方ですから」

「最後にMETLMAXシリーズ。大破壊が起き荒廃した世界を、一人のハンターが戦車を駆り、仲間と犬と共に旅する物語です」

「犬？」

「はい、犬です」

「なんで犬なんだ？」

「シリーズ恒例なんです。たぶんこの世界にもいると思います。スナザメもロードガンナーも黒い絨毯もすべてそのゲームに出てくるモンスターですから。」

この世界はMETLMAXの世界のようにかつて起きた大破壊によってこうなってしまった世界。どこまで一緒かはわかりませんが、非常に似通った世界何だと思います」

「……………たしかに言いにくいな。今まで会ったこともない奴に、あなたのことはゲームで知っています。なんて言われてもな。分かった、あいつ等には俺の方から適当に言っておく。話してくれて、ありがとうな」

「いえ、俺の方もちょっと楽になりましたから。聞いてくれてありがとうございました」

日が大分傾いてきていた。話をしているうちに大分時間が経っていたようだ。

エンジンがかかる音が静かな丘に響き、ジープは静かに走り出した。

黒岩 悠介の世界（後書き）

李紅蘭

サクラ大戦1、2、4のメインヒロインの一人。作者が初めてプレイしたサクラ大戦作品、サクラ大戦GB激・花組入隊で一番最初にクリアしたキャラ。ちなみに偶然でした。

時間軸は4の後。大神はさくらさんとくつついた世界。光武二式とともにこの世界に転移。現在光武二式は中破状態。蒸気機関はお陀仏担ったが霊子機関は無事だったため、現在修理改造中。

ラミア・ラヴレス

今やおなじみスパロボOGのクールビューティー。あの胸に目がいく人は多いことでしょう。延期になった第二次OGが待ち遠しい限りです。

この世界には単身とばされてきたためアンジュルグもヴァイサーガもありません。ラミアさんがクルマを駆りマシンガンを振り回す姿をお楽しみください。

千鳥かなめ&相良宗介

フルメタルパニツクのメインカップル。メカニックを誰にするかで悩んだ人その1。彼女に決まっていたら彼も、もしかしたらアルも飛ばされてきていたかもしれない。しかしすでにウイスポードじゃなくなっているため没に。

エド・サックス

フルメタルパニツクの名メカニツク。メカニツクにするかで悩んだ人その2。キャラを掴みきれなかったために没に。

テレサ・テストロツサ

フルメタルパニツクの迷艦長。メカニツクにするかで悩んだ人その3。かなめと同じ理由で没になった人。

イサラ・ギユンター

戦場のヴァルキュリアの主人公『ウエルキン・ギユンター』の妹で戦車操縦士兼整備士。メカニツクにするかで悩んだ人その4。戦場ヴァルキュリアをいまだにクリアしておらず、どういう運命を辿るかわからなかったために没。戦車操縦士兼整備士と、ある意味紅蘭よりも相応しかっただけにちよつと残念。

アストナージ・メドツソ

スーパーロボット大戦シリーズにおいてどんな機体も整備してのける最強メカニツク。しかしそれはスパロボ内ではなしであり、逆シヤアでは死亡してしまう人。キャラがいると一人歩きしているので没になったメカニツクにするかで悩んだ人その5。

緑の賞金首

「ユウ 帰ったか！」

倉庫にジープが停車し、いざ降りようとしたところで頭上から声がかけられる。その声に上を見上げれば、案の定ロフトから身を乗り出すアイラの姿があった。

「ただいま、アイラ」

そう返してクルマを降りようとすると、俺の周囲に影が差した。

「あ、アイラはん！？」

紅蘭の焦ったような声にいやな予感を感じて再び上を見上げると、そこにはすでにすぐそばまで迫ったアイラのすがた……………。

「へぐうっ！」

ロフトから飛び降りたアイラに飛びつかれ、俺は無様にジープのシートに押し倒された。

「こいつは熱烈なお出迎えだな」

「クリーム おかえり！」

「おう、ただいま」

どこか他人ごとなクリムの言葉にアイラが顔を向ける。俺も押し倒

されたままそちらを見れば、クリムさんは明らかに笑いをこらえていた。腹の上で猫の様な格好で座るアイラをどけて今度こそジープから降りる。これから今日使った武器の整備をすることになっている。ハンターオフィスに賞金を受け取りに行くのは狩りに行った次の日と決めているそうだ。賞金を受け取った足で買い物に行くらしい。

「……………それはともかく、アイラその格好」

「ん ラミア コウラン 着ろ 言った。変か？」

首を傾げながら自分の身体を見下ろすアイラ。

「いや、似合ってるよ？」

そう言って改めてアイラの格好を見る。

赤い水着でした。

いや、そうとしか表現できないんだけど？今までの格好がすでに水着みたいだったのだが、今着ている物はそれ以外に表現できません。

「もつとちゃんとした防具で身を固めてほしかったんやけどな、アイラはん動き辛いつちゆうて嫌がってなあ。やからと言ってあの格好のままではいさすのも危ないし、これを着せるのも苦労したんやで？」

ジープの整備に降りてきた紅蘭が苦笑いしながら近づいてくる。その後ろではクリムさんがラミアさんに何かを話していた。時折こっちを見ているのは丘での話についてだろうか？

「さ、今日もがんばってくれたこの子らの整備。ちやちやっと終わらせよか？」

「了解」

紅蘭の言葉に短く答え、作業台に並べられたら工具を手にとった。

「そう、最後にスライドを嵌めて終了だ」

「ふう……………」

組立終わったワルサーP99を作業台に戻し、俺は大きく息を吐き出した。紅蘭を手伝ってジープの整備を終え、続いてクリムさんの指導の下拳銃の分解整備を行っていた。FN Five-sevenの銃弾である5.7mm弾はやはり手には入りづららしく、今日のモンスター相手にはもつたないと、入手の容易い9mmパラベラム弾を使用するこの銃を渡されたのだ。

このワルサーP99、あのルパン三世の愛銃ワルサーP38の後継モデルであり、007のジェームズ・ポンドも使用していた拳銃である。ちなみに山上正月版の『ルパン三世Y』においてはルパンもこの銃を愛銃としている。

「それじゃ、次からはもつと早く組み立てられるようにな」

「はい。やつぱクリムさん達と合流できてよかったですよ。おれじや分解整備なんてやり方わかりませんでしたから」

「こいつらを扱うなら、分解整備が必須だからな。銃って物は一つの精密機械だ、整備一つまともになきゃいつ不具合が起こってもおかしくはない。どんなに整備していても起きるときには起きるものだからな。整備してなければ尚更だ。」

よし次はお前のFive-sevenも整備しておこう。できるときにやっておかなきゃな」

「はい」

「ああ、盛り上がつてるところに水を差すようで悪いが、夕食の準備ができた二人とも上がってこい」

Five-sevenを作業台に置いたところで、ロフトから降りてきたラミアさんにそう告げられ、整備は後回しとなった。

ロフトに上がった俺たちを待っていたのは、下にいたときから食欲を誘う匂いをさせていた中華料理達だった。

「材料も思うように集まんからこんな物になってもうたけど腕によりをかけて作ったさかい、みんな遠慮せんと食べてな」

洗った中華鍋を壁に掛けつつ、紅蘭が謙遜するようにそう言った。

いや、材料も調味料もなかなか手には入らないこの世界でこれだけ作れるのはすごいと思いますよ？

元の世界でやったゲームを思い出せば、彼女はメカニクとして一流、中華料理も上手なんだっけ。そういえば初代花組のメンバーって半分以上料理できたっけ？さくらは和食、マリアはロシア料理、カンナは沖縄料理。隊長の大神も腕はわからないけど料理は出来たはずだ。

すみれさん？さあ、あの人が料理する描写はとんと見た覚えがあり

ませんが？

アイリスはまだ子供だしね。

食べるのが待ち遠しいといった様子のアイラに苦笑しつつ、全員が席に着いたところで食事が始まった。

「それでクリーム。悠介はどうだった？」

料理が半分ほどがみんなの胃袋に納められた頃、黙々と箸を動かしていたラミアさんが口を開いた。

「そうだな、一応状況判断能力はいい物を持っているようだ。まだまだ荒いが動きもそこまで悪くはない。そこところは俺たちでカバーすれば問題はないだろう。」

それに飲み込みもいいし、ここをたつ準備ができる頃にはそれもマシになつてははずだ」

問われたクリームは一度箸を置いて考えると、今日のことを思い返しているのか顎に手を当てつつそう答えた。

「そうか。」

本格的に森の中へ入れるレベルまではどれくらいかかりそうだ？」

「あつちはジープじゃ入れねえからな。そうだな、おそらく三週間もあれば。それくらいあればそこまでのレベルには達せるとはだろ
うな」

「三週間か。紅蘭ジープの改造と光武の修理はどれくらいかかりそうだ？」

「ん〜、ジープの方は祐介はんが手伝おてくれるから、予定よりも早く仕上がりそうやな。多分、二週間もあれば何とかなるやろ。」

問題は光武の方や。やられてもうた蒸気機関の方は、こっちのエン

ジンを積んでなんとかなるんやけど……。ちょいと必要な部品が手には入りそうにないんや。あればかりは自分で作るってわけにもいかんしなあ」

「そうか、実はここを発つ前に周辺の本格的な調査をしておきたいと思っっている。

私やクリム、紅蘭はこの街の周辺に転移してきていて、祐介達にしても地図上ではそう離れた場所ではない」

「この土地に何かあるかもしれない、そう言うことですか？」

「さあな。だが可能性はある。そしてもしそれを行う場合森の奥に入ることになるが、森の中でジープは使えん。生身で戦えることが前提となる」

「一カ所の調査にあまり時間はかけたくないな。悠介、悪いが明後日からペースをあげるぞ。少しでも身体に異変を感じたら直ぐに報告しろ、いいな」

「わかった」

確かに、一カ所に時間かけたり同じところに何度も来るのは面倒だもんな。

「あれ？でも明後日からって……………」

「明日はお前の防具を揃える。防弾ジャケットはいいが、他の装備は論外だ」

まあ、もともと普段着だしな。

「接近戦用の武器も用意しておいた方がいいだろう。悠介が持ってきた武器は銃火器ばかりだからな」

「ついでに回復用のアイテムも補充しておくか。明後日からお世話になることが増えそうだからな」

クリムさんとラムリアさんの間で明日の予定がとんとん拍子に決まってゆく。テーブルの向かいでは目のあった紅蘭が肩をすくめて苦笑している。きつといつもこんな感じだったんだろっな。

ちなみに例のごとく会話に一切参加しないアイラはというと。いつの間にかに食事を終え、自分の寝床であるロフトの隅で丸くなっていた。

初めて会ったときは豹を例えに出したけど、こうしてるとむしろ猫だよなあ。

翌日。

ハンターオフィスに賞金を受け取りに来た俺は、計算が済むまでの間壁に貼られた賞金首の手配書を眺めていた。

『カミカゼキング』 『カミカゼクイーン』 『カミカゼプリンス』 『カミカゼプリンセス』 『カミカゼペアレンツ』 『カミカゼブラザーズ』 『カミカゼシスターズ』…………… どんだけカミカゼが多いんだよ。なになに、神出鬼没のカミカゼキングダム？ここいら周辺だと西の荒野と北の丘の向こうに出現することあり、か。ただ世界規模で出現は確認されていると。あのどや顔がどこに

でも現れるってのはある意味悪夢だな。

『飲兵衛サイクロン』出現場所は、ここらじゃないのか。どこからどう見ても掃除機だな。

こっちは『テキサスカウタンク』西の荒野のさらに西の方に出現、時たまこちらにも顔出すか。

こいつは丘の方に出るのか、しかし『サイゴン』とは懐かしい。M E T L M A X 2の賞金首じゃねえか。

『人狩り部隊』？出現場所はカルロアってここじゃないか。半年おきに姿を現しては成人男性を十人ほど捕まえては去ってゆく、か。前回現れたのが三ヶ月前。さすがにそれまでにはここも出られるだろうけど、注意はしておいた方がいいな。

ん？賞金額二千って、やけに少ないのが『メタボイノシシ』被害は畑荒し。農家の方々が困ってますと。なんで誰も退治しないんですかこれ？

こっちは『ヘドロニアン』出現場所は旧下水道と。ほかに情報は無し

『恐怖の カちゃん人形』って怪談話だろ、これは……。えっと、呪いのケータイと戦闘した日の晩に現れる、と……。次いこ、次。

『超流動デカプリン』これは3の賞金首だな。……。どんなやつだっけ？出現場所は、『桃色の園』うわぁ、名前に超いきたくねえ。

『サルモネラス』 荒野に出没する大型車両型モンスターか。

『タートルフォートレス』 うわ、なにこの賞金額！一、十、百、千
……………、三百万？

うわ、こっちは五百万？ 『基地区戦車ヲオシヤンタンク』 全長50
0m？いや、これって直接戦って勝てるのかよ。それこそガンバス
ターとかでもないが無理だろこれ。
で、これが最後か。え、と……………

……………
……………
……………
…………… 『ハク』？

…………… 見なかったことにしよう。

壁に貼られた手配書から離れ、目頭を軽く揉んでカウンターを見る。
ちよつと良くグリムが賞金を受け取るところで、一足早く出口へと
向かう。出口で合流した俺たちは、そのまま一路人間用装備屋へと
向かった。

元は倉庫だったらしい建物の中に並んだ服や武器。都市迷彩にジヤ
ングル迷彩と明らかに戦闘用の物から、ジラの着ぐるみなど意味
の不明な物まで多種多様。でも大半が俺の普段着と耐久度がさして
変わらないと思うんだけど。

ハンガーに吊された服をかき分け探していると、アイラが来ていた
のと同じ赤いレオタードを見つけ。汚い字で書かれた名札を見ると
バトルレオタードと書かれている。

「ああ、確かにそいつは防刃防弾に優れてるらしいが、男が着るのはどうかと思うぞ?」

「着ませんよ!」

後ろから覗き込んできたクリムさんのどこかひいた声に、一瞬自分がそれを着ている姿を想像してしまい、その気色の悪さに気分が悪くなる。

少々乱暴にかき分けていた服を戻し、店主に直接聞こうとその場を離れようとする。

「あれを着るとか言い出さなくて良かったよ」

まだ言うかと睨みつけようと背後を振り返ると、クリムさんの手には何枚かのつなぎのスーツがかけられていた。

「ここで防刃防弾、耐久度に優れてるのはこのライダースーツだ。何着かあるからサイズの合う奴を探せ」

「あ、ありがとうございます」

手渡されたライダースーツを持って更衣室へと入り、ライダースーツに着替える。ピッタリと身体にフィットするスーツの胸元には強化プラスチックらしいプロテクター、肘や膝にも金属製のガードが付けられ戦闘用に改造してあるのがわかった。黒地のスーツの脇に入る銀色のライン、これでプロテクターの色が黒に近い紫ではなく銀色だったら、どこの仮面ライダーのスーツかとツツコミを入れていたところだ。ライダースーツの上から基地で見つけたジャケットを羽織るが、プロテクターも特に邪魔になることもなかった。

その後、靴底に鉄板を仕込んだブーツと、指の第二関節までを保護

するナツクルガードの付いた指ぬきグローブを購入し、接近された時用に超振動ナイフをスタンロッツドの代わりに装備する。

「ここで用意できる分ではこれが限界か」

「そういえば、クリムさん達はどうしてるんですか？」

「ん？俺の場合はB・S・A・Aの制服がある。あれは下手な防護服に変えるよりもよっぽど丈夫だからな。紅蘭も華撃団とやらの制服がな。どこぞ舞台衣装かって格好だがあれで対G性能が最新鋭のパイロットスーツよりも高いつてんだから恐れ入るよ。でラミアなんだがな。昨日も着てたあの服あるだろ？」

「あの水商売一歩手前ですよね？」

思い出すのはゲーム中カットインで出てくるあの姿。あの格好で巨大人型兵器を操るて言うんだから凄いよな。

「あれで防刃性能も防弾性能も、果ては対G性能も俺たちの中で一番高いんだ。未来のテクノロジーってやつは凄いよ、本当に」

どこか疲れたように肩を落とす姿がどこかたびれて見えたのは、見間違いないじゃないだろうと俺は思った。

人間用装備屋を後にした俺たちは街の外れにあるジャンク屋を訪れた。幾つものダンボールに詰め込まれたジャンク品の中から紅蘭に渡されたメモに書かれた物を探し出す。狩りに行かない日の大半はこのジャンク漁りでつぶれるとか。

「あつたか？」

「あるにはありましたけど、明らかにぶっこわれてる物とかありませんけど大丈夫なんですか」

真つ二つになったエンジンを台車に乗せながら尋ねるが、クリームさんは大きいため息をついて首を振った。

「俺も前にそう思ってたな、まだ動きそうな大きな冷蔵庫と半壊した小さな冷蔵庫を見つけたとき、大きい方を持って帰ったんだが……。使用したのは冷蔵庫の中のわずかな部品のみで後はジャンク屋行きなんてことがあった。壊れてない物が必要ならそう言うてくるはずだから、何もいわれてないものに関してはパーツ取りが目的だろう。壊れてても問題ない」

うわ、その時の徒労感がよくわかりそうなくらい肩を落としてるよ。それじゃ、俺もそこまでは気にせずに集めるか。

その後二人で黙々とジャンクを漁り続け、台車が一杯になった頃は日はどっぴりと暮れていた。

「そう言えば、これくらいの時間だったな。一昨日お前と会ったのも」

「そつえばそつですね」

一昨日モヒカンに囲まれたときのことを思い出して辺りを見回した。

素人目で見れば後をつけられているということも無さそうなのだが……。

「あまりよそ見をするな。気付いてることに気付かれる」

「あ、わかりました」

………？

「何ですと？」

「なんだ、気付いてなかったのか？」

思わず間の抜けた声で聞き返してしまった俺に、クリムさんは意外そうに目を丸くしていた。

「一昨日の戦い方を見て、場数は踏んでるものだと思ったんだが……、違ったか？」

「喧嘩の場数なら少し。昔は不良グループともいくらかの繋がりがあったてそれで。でも人の気配とかそんなのは全くわからないんですけど？」

「ふむ、まあそれについてはこのまま実践を積みば自ずとわかるようにになるだろ。」

「そうか、まだわからないか」

「それより、このまま帰ってもいいんですか？」

このまま倉庫間で戻れば連中を倉庫まで案内することになるのは言

うまでもないことなのだが。

「かまわない。詳しい数まではわからないが、一昨日よりも人数を揃えてきてるはずだ。流石に今の装備でやるのは手間だ」

今の装備か。俺の手元はワルサーが一丁にその予備マガジンが三つで、合計65発分。さっき買った超振動ナイフが一本にスタンロッドが一本。

「ちなみにクリムさんの手持ちは？」

「PC356とマチエツトだ」

「PC356って……………、それってS&W PC356のことですか？それって俺のFive-sevenよりも弾が手には入りにくくないですか？」

「……………以外と詳しいな」

「銃とかは元の世界でよく調べてたんですよ、興味があつて」

正式名称S&W PC356。確か9mmパラベラムと同口径で、357マグナム弾と同威力を叩き出せる競技兼実戦用拳銃で、俺が調べた時点でこれ用の拳銃弾『356TSW』はどこも会社も製造してなかったはずだ。

「こつちでそんなもの手にはいるんですか？」

「やっぱり無理かな？」

「こんな荒れ果てた世界で手に入ったら奇跡だと思いますよ？」

「残弾もマガジン2つ分しかないからな。自宅ならまだ予備もあつたつてのによ」

いざというとき以外使えないだろうなあ。

「確かにこんな状態でやるのは面倒ですね。というか前より多い人数をたつた二人つて、勝てる気がしないんですけど?」

「そうか?俺はやってできないことはないと思うぞ?」

だからと言ってここでやり合うこともないけどな。倉庫に戻れば武器も豊富にあるし、何よりバギーと光武もある。二人で相手をするよりもよっぽど安全だ」

「あれ?光武つて今壊れてるんじゃない?」

「こつちのエンジンも積み込んである程度の修理はできてるそうだがただ足まわりに問題があるらしくてな。」

そんなわけだから腕は使える。あの光武の腕は改造済みだから戦うことぐらいはできる」

「ところでこんなにペラペラと喋っちゃっていいんですか?連中がいるのに」

一応声は落としているけど、さすがにまずいんじゃない?」

「大丈夫だろ。俺たちの声が聞こえるほど近くまで近寄ってきてはいないからな」

と、他愛もなくて話をしているうちに倉庫にたどり着き、シャッターを必要以上開けずに潜るように入った。

「あ、おかえり」

オイルで顔を化粧した紅蘭がジープの下から顔を出す。俺は台車を倉庫の奥に置きに行き、クリムさんがロフトからラミアさん達に呼びかけ、ことの次第を説明し始めた。

「なるほどな。では今後の憂いを断つ為にも徹底的にやっておくか」

「はあ、光武は人を助けるための物やさかい。できるならそないな使い方しとうないんやけどな……………」

ラミアさんはいつも通り淡々とした様子で、紅蘭は渋りながらも襲撃に備えて準備を始める。ライアは楽しそうに身体をほぐし始める。

「クリムさん、拳銃はどうするんですか？」

「HK45Cをとってくれ」

H&K HK45C。ソーコムピストルの名前で知られるH&K mk23の後継機。デザートイーグルに匹敵した重量や、マガジンを交換する際に起こりやすかった欠点などを改善した・45ACP弾を使用するマンストップピングパワーに優れた拳銃である。

予備マガジンと一緒にクリムさんに渡した俺は、AUGを持ってジープの影に移動する。

AUGは5・56NATO弾を使用するシュタイアー・マンリヒャー社製のアサルトライフルで、7つに分けられたパーツを交換することによって、サブマシンガンや軽機関銃としても扱える少々特殊

な銃だ。

ちなみに俺が持っているのは、どこのパーツも交換していない普通のAUGだ。

階段を見るとラミアさんが降りてくるところだった。手にしているのはベビーイーグルことジェリコ941。

マガジンとバレルを変更することで実に4種類もの口径の弾を使用できるIWI社製ハンドガンだ。使える4種類の弾丸も、互換性の高い9mmパラベラムに・40S&W弾、・41AE弾。さらには・45ACP弾と非常に威力が高いラインナップ。で、ベビーイーグルの他にも腰には……………鞭？

「ラミアさん、その鞭って？」

「ん、これか？店の店主に是非にと勧められてな。思いの外使い易かったから使っている」

きつとその店主はマゾだったんだろうな。

何となくそんなことを考えていると、光武の縦に並んだデュアルアイに灯がともり、右腕に直接装着された戦車砲が倉庫の入り口へと向けられる。クリムさんもジープのFN MAGを同じように入り口へと銃口を向ける。身体を解していたアイラが顔を上げ、倉庫の柱を上つてゆき、梁をつたって入り口の上へと移動する。

この時には俺にも連中が倉庫の前へと集まっていること気づくことができた。まあ、あれだけ大きな声で殺せだなんだと怒鳴ってれば気づかない方がどうかしてる。

ラミアさんが入り口近くにある電気のスイッチを切り、辺りは闇に包まれた……………。

緑の賞金首（後書き）

ハク

言わずとしれたマーブルヒーローの一人。本編に実際にでるかどうかは不明。

工場

倉庫内が暗やみに包まれ、俺は息を潜めた。みんなも同様に息を潜め、倉庫内には光武が発する静かなエンジン音以外が消えた。光武のデュアルアイが発する赤い光。当たりを確認するようにスライドする音が静かに響く。

そつと自分の胸に手を当てて見ると、自分で思っていた以上に激しく鼓動する心臓に苦笑する。

考えてみればこんなことは初めての経験だし、緊張するのも仕方がないことだ。でも、足を引つ張るようなことはしない。大きく深呼吸をして持ち直したAUGに視線を落とす。例えこれを使う機会がなくてもだ。その気持ちだけはしっかりと持っておく。

外のざわめきが大きくなった。あいつら俺達に気取られないようにするつもりなんてないだろ？

幾度か銃声が響き、ドアノブがある辺りで火花が舞う。あいつら鍵壊しやがったな、わざわざ鍵をあけておいてやったのに。ドアが蹴破られた音が響き、大勢がなだれ込んでくる足音、一体何人用意しやがったんだ？

「誰か電気をつける！いいか、一人も逃がすんじゃないぞぐべえ…

……」

あ。

鈍い打撃音と共に声がつぶれ、人が倒れる音が響く。さらに打撃音が追加されると、連中がパニックを起こし何を言っているのかが分からないほど何かをわめき散らし始める。

「悠介、伏せてろ」

ジープの上にはいたはずのクリムさんの声がすぐそばから聞こえ、それに従いジープの影に顔を引っ込める。

「アイラ、ですよね？」

「だろうな。さすがというかなんというか、彼女にはこれくらいの闇はどうってことないんだろうな」

そっと倉庫の入り口を見れば、暗闇になれてきた俺の目にも、人影が床に倒れてゆく姿がわずかなりとも確認できた。

とはいえ敵も黙ってやられるつもりはないらしく、リーダー格らしい男の撃てという言葉に従い、いくつものマズルフラッシュが倉庫内を照らし出す。

いや、でもね、ド素人の俺でも分かるよ？こんな状況で銃なんて撃とうものなら、起こるのは同士討ちでしょ？

「うぎゃー！」「ぐぶぶっ……！」

そんな言葉を吐きながら倒れてゆく影達。これくらい予想しようよと思うのは間違っていないと思う。

「う、撃つなあー！お、俺に当たる！撃つな、撃つのを止めるおー！」

いや、撃てって言ったのあんただろ？銃声が止み、痛みを訴える声が辺りを支配した。そこで倉庫の明かりがつけられ、その惨状が光の中へと晒された。ジープ越しにAUGを構えながら見ることとな

つたその光景に、俺は呆れるしかできなかった。突入してきた色とりどりのモヒカン達の半数以上が床に倒れ、立っている連中も突然の明かりに顔を隠しながら、しかし自分たちに向けられた銃口に身を強ばらせている。

「人の家でお祭りをするのは止めてほしいものだな。銃を捨てな」

クリムさんの言葉にモヒカン達が銃を捨てる。いや、一人だけ肩を震わせてる奴がいるな。あれって一昨日の奴じゃないか？

「ふざけるなあ！貴様が、貴様があのとき現れなけりゃ！」

モヒカンが怒りも露わに拳銃をクリムさんに向ける。あれって黒星か？

黒星というのは中国でコピー生産されたソ連製軍用拳銃トカレフの別名で、軍用の中古品、または密造された粗悪品であることの多い代物で、日本では主にやくざの間に流通している拳銃である。うん、こいつらチンピラが持つのにぴったりの代物だよな。

モヒカンがトリガー引くよりも早く銃声が響き、モヒカンの手の中から黒星が弾き飛ばされる。銃声のした方を見れば硝煙が登るベビーイーグルを手にしたラミアさんが、右手で持った鞭を振るうところだった。

モヒカン達はラミアさんのことには気付いていなかったらしく、驚きに目を見開き、直後には黒星を弾かれたモヒカンの首に鞭が巻きつき、地面に引き吊り倒した。

引き吊り倒されたモヒカンは、そのままラミアさんの足元まで引きずられ、腕について立ち上がるうとする彼の背を踏みつけ、顔の横に容赦なく銃弾が打ち込まれる。

銃声が9パラの物より大きい気がする。てことは・40S&W弾か・45ACP弾かな？・41AE弾はあまり製造されてないはずだし。

「まだ足りないと言つならば、次は貴様の頭を撃ち抜くがどうしてほしい？」

撃った直後で熱を持ったベビーイーグルの銃口がモヒカンの後頭部に押し付けられる。その熱さのためかモヒカンがうめき声を上げるが、ラミアさんは容赦なく銃口を押し付け、モヒカンに床とキスをさせて再度問う。

「どうしてほしい？」

その問いは足蹴にしているモヒカンだけでなく、銃を捨てたモヒカン達にもかけられたもので、鋭く睨みつけられたモヒカン達は、そろって情けない声を上げて両手をあげる。まあその気持ちは分からなくもないんだけどね。

足蹴にされているモヒカンも諦めたのか、手を頭の横へと起いて悪態をついた。

こうして俺の出番がくることもなくその戦闘は終わった。モヒカン達の武器を取り上げ、同士討ちをしたモヒカン達を手当（奇跡的に死者は0）した上でふんじばり、倉庫の隅に転がし、俺達はようやく夕飯にありつくことができた。

あ、そうそう。暗闇の中モヒカン達をしばき倒したアイラは、けが一つ負うことなく気づいたら俺の横にいた。奴らが同士討ちを始める直前に隠れたらしい。

「あいつら 弱い。 アイラ 物足りない。 早く 狩り 行きたい」
口を尖らせて文句を言うアイラを明日は連れて行くからと宥め、俺達は食卓を囲んで奴らの処遇について話し合った。

ハンターオフィスに突き出すのかと思っていたら、ハンターオフィスはあくまで賞金の受け渡しや、情報交換の場であり警察としての能は無いらしい。場所によってはそういうところもあるらしいが、少なくともこの街は違ふとのこと。で、結局あいつらはパシラセることに決まり、明日の狩りは要訓練対象の俺と監督役にラミアさん、狩りに行きたくてしょうがないアイラの三人で行くことに決まり、クリムさんはモヒカン達の監督役として残ることになった。

そんなこんなでジャンク漁りをモヒカン達の人海戦術で行わせつつ、俺は狩りとジープの改造、光武の修理手伝いをしながら過ごすこと二週間。戦いにもなれてきた頃、クリムさん、アイラと共に森の奥へと足を踏み入れた俺たちは、この森で初めて見るモンスターに遭遇することになった……。

「なんだあいつは？」

クリムさんの疑問の声にそちらを見ると、脚を生やしたポリタンクがフラフラと木々の間を縫って姿を現すところだった。

「うるつきポリタン？なんでこんな森の中に？」

ポリタン系のモンスターは炎をまき散らしたはず。こんな森の中でそんなことをされてはたまらないとワルサーP99を打ち込み、うるつきポリタンを仕留める。倒したポリタンの残骸から入手したガソリンに頬をひきつらせつつ、クリムさんとこいつについて話した。

「で、こいつも例のゲームに？」

「出るのは工場のダンジョンやそのダンジョンの周辺でしたけどね。クリムさんこちら辺には以前も？」

「いや、あまり来てないな。あまり深入りしないようにしてたからな」

「たぶん森の奥に何かの廃工場があるんだと思います。もしかしたら、そこなら光武の修理に必要なパーツが手には入る可能性もあるんじゃないかな？」

「そいつは朗報だな。どこら辺か検討はつくか？」

広げられたら周辺の地図と、ハンターオフィスで貰ったら端末に映された踏破エリアを重ね合わせる。

「ん〜うるつきポリタンの行動範囲が分からないんで何とも言えないですね。もう少しここいらを探索してポリタンの行動範囲を調べればなんとか検討もつけられると思うんですけど」

「それもそうだな。とりあえず今は一度戻って二人にもこのことを

報告しよう。工場については街でも情報がないか調べてからでも遅くはないだろ」

二人うなずきあい、アイラを連れて急ぎ街へ戻った俺は、気になることがあるからと一人ハンターオフィスへと向かった。

「ハンターオフィスへようこそ」

ハンター登録をしたときに対応していたお姉さんが営業スマイル全開訪ねてくる。

「ちょっと聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「賞金首の情報ですか？」

「『人狩り部隊』について」

「『人狩り部隊』ですね。人狩り部隊は写真にあるとおり重武装のロボット兵士六体からなるロボット部隊です。

人狩り部隊が出没するようになったのは今から十年前この時は一機のみで出沒。当時は『人狩りアンドロイド』の名前で指名手配されていたようです。最初の四年間は一月に一度の割合でここカルロアを襲撃。出現から四年後、つまり今から六年前にあるハンターの手によって討伐されたと思われていましたが、翌月再度カルロアを襲撃。これを討伐するもさらに翌月カルロアを襲撃。討伐することに武装などが強化され、四年前にロボットの数が三体になって以降襲撃は半年に一度となり、三年前にロボットの数が六体になって以降『人狩り部隊』の名称で再度指名手配され直され、討伐条件が人狩り部隊の壊滅に変更されました。

ですので、この賞金首を狙われる場合、以降人狩り部隊が出没することがないと明確な証拠を提示されない限り討伐完了となりませ

「なのでご注意ください」

聞く限り相当めんどくさそうな連中だな。十年前の手配書を見せてもらい、現在の手配書と見比べるとその違いは一目瞭然だった。十年前の人狩りアンドロイドはどこことなく『C-3PO』を思わせるすらりとした外見で右腕の先に装着されたナイフと、左手の先に装着されたボウガンが唯一の武装だったのに対し、『人狩り部隊』は『MS-05 ザク?』のような頑丈そうな外見に、両腕の先にガトリング、右肩には迫撃砲、両足にはミサイルポッドを装着ともはや原型を留めていない。二枚の手配書をなんの説明も無し見せられたばあい、同じ賞金首とは分からないだろう。

「これの襲撃時以外の目撃情報とかは無いんですか？」

「襲撃時以外の目撃情報ですか？少々お待ち下さい。」

そうですね、未確認情報ではありますが、六年前に東の森の奥にて人狩りアンドロイドの目撃情報がございます。襲撃時以外の目撃情報はこれ一見のみでございます。他に質問は？」

「人狩り部隊が襲撃してくるときはどっちの方角から？」

カウンターのお姉さんは質問の意図が分からないのか、首を傾げながらもコンピューターを操作し過去十年間の情報をチェックし、先ほどまで俺が聞いた情報を含めて端末の方へダウンロードしてもらい、俺はハンターオフィスを後にした。

俺の予想が正しければおそらく連中は……………。

翌日。

俺とアイラ、ラミアさんの三人で森の奥へと入り、昨日うるつきポリタンと戦闘を行ったところまでやってきていた。

「ここでそのうるつきポリタンというモンスターと戦ったのか？」

「はい、あっちの方からフラフラ〜と」

鞭をベルトのフックに引つ掛けたラミアさんに頷き、うるつきポリタンが現れた方を指差した。

「とりあえず、まずはそちらから調べるべきか。アイラ、すまないが木の上から先行して斥候を頼めるか？」

「せっこう？　なんだ　アイラ　それ　知らない」

「む……」

現代人と原始人の言葉の壁。同説明すべきかとラミアさんが考え込むのを見ながら、俺は苦笑を漏らした。

「アイラ、木の上から俺たちよりもちよつと先に行つて、敵かなにかを見つけたら教えてくれ」

「せっこう　そういうものか？　アイラ　わかった　せっこう　行つてくる」

アイラはスルスルと木を上つて行くと、猫か猿かといった身軽さで枝と枝を伝つて森の中へと消えていった。

「はあ、すまん。ああいった場合どのように説明すべきかわからなくてな」

うん、アイラに説明するのって時に子供に物事を教えるのにも似たところがあるからなあ。一応工作兵として『造られた』ラミアさんだと勝手がわからないんだろ。頭を抱えるようにため息をつく姿を見ると本気でそう思う。

「まあ、そのところは適材適所で。それよりアイラの後を追いましょう。このままじゃ彼女を見失いますから」

「そうだな、急ぐぞ」

それからしばらく奥へと進んだ俺達は、アイラに呼ばれるままに木を上り、他の木々よりも高い場所に出たところでアイラが見つけた物を目にすることとなった。

「思った通り、工場発見だな」

「それもただの工場じゃなさそうだな。悠介、昨日お前がハンターオフィスに行った理由はこいつらか？」

手渡された双眼鏡から工場の敷地内を覗き込むと、いるわいるわ、六体どころかひ、ふ、み……………の八体のロボット、人狩り部隊の姿が確認できた。

「どうやら『人狩り部隊』の基地のようだな」

「近くに工場があるかもしれないと思ったとき、もしかしたらって

思っただんですよ。定期的に襲ってくるってことは近くに連中の拠点があるんじゃないかって」

「ふ、見事に正解だったというわけか。

アイラ、よく見つけたな。お手柄だ」

「アイラ せっこう しただけ。 せっこう しる 言ったのラミア。 これ ラミア アイラ 二人の手柄」

「そうか、ではそういうことにしておこう」

アイラの言葉に苦笑するのを横目に見ながら、俺は工場の周辺を双眼鏡で調べ始める。そして目当ての物を見つけ、それを紅蘭が作った携帯キネマトロンで画像に写す。

「なにか見つけたみたいだな。工場場所も分かった、一度戻るぞ」

ラミアさんの言葉に頷き、俺達は元来た道を戻り始める。出てくるモンスターを蹴散らしながら帰った俺たちは、さっそく作戦会議を開いた。

「人狩り部隊か……。あれが来る前にここを発つつもりでいたが……。まさかこちらから攻めることになるとはな」

クリームさんが頭を掻きながらさうばやきながら食卓の上に地図を広げ、広げられた地図上にラミアさんが工場のあった場所を書きこむ。

「工場の敷地内に確認できるだけでも八体。場所が工場であり、奴らの本拠地であることを踏まえるともっといっていると考えていいだろうな」

「『人狩り部隊』の製造工場か……。この子らはなんでこんなことするんやろうな」

ぼつりとつぶやかれた紅蘭の言葉。そういえば紅蘭で光武を兵器としてみることも嫌なんだよな。人を襲わせるために造られるロボット、それだけでも許し難いことなんだろうなあ。

「さあな、無人機であることを考えればそうするようにデータをインストールされたからなのだろうが、問題は誰がどのようにインストールしているのかだ。過去の例を見る限り、『人狩り部隊』を破壊するだけでなくその後ろにいる何者かをどうにかしない限り、こいつらはどうにかすることはできまい」

「そうすると、外の連中を片付けた後工場の中の探索ですね」

「そうなるな。だが、人狩り部隊がどれくらいいるのかが分からないとなると、クルマが使えないのはきついな」

「あ、それなら俺に考えがあるんで。たぶん何とかなと思いますよ」

「本当か？」

「はい、これなんですけど……………」

キネマトロンを取り出し先ほど撮った画像を見せる。

「ここのところ見てもらえますか？」

「ふむ、確かにこれは………………。これが繋がっていれば行けるかもしれんな」

「そやけどどこに続いとるのか分からんとちゃうか？」

「大丈夫、それも目星はついてる」

「よし、ならそれで行くぞ。決行は明後日、明日は明後日に備えて
装備の点検と身体を休めること。これでいいか？」

「了解した」

「了解や」

「ん アイラ わかった」

「了解です」

「それでは、飯にするか」

「地図にこの道は載ってない。ここだな」

広げていた地図を閉じながらクリムさんは笑みを浮かべる。

「悠介、よくここが分かったな」

「ハンターオフィスで人狩り部隊が襲撃をかけてくる方角を聞いた
んですよ。そしてら連中はこの十年間ずっと南の方から仕掛けてき

「てたんで多分そうだろうと」

工場攻略作戦の決行日。俺たちは今森の南端から延びる、地図には載っていない道の入り口にいた。

一昨日クリムさん達に見せたのは工場を囲む森の一角から伸びる道の画像だった。携帯キネマトロンのズーム機能を全開まで使用してとった画像には、何かが踏み固めたかのような地面が写っていた。

地図に載っていない工場に、地図に載っていない道。高確率で工場へと続いているはずだ。

「ほな、さっさと工場行ってちゃちゃっと終わらせよか？」

ビッグモスの後部座席から紅蘭が乗りだしながらGO、とばかりに前方を指さす。

今ビッグモスのコクピットには、俺の他にクリムさん、ラミアさん、紅蘭、アイラの全員が乗り込み、ビッグモスのみで工場へと向かっている。これは工場内を探索する際、外に置いておくことになるクルマの留守番役を確保するため、ジープまで持って来てしまうと、人手が足りなくなってしまうからだ。

工場内へ入るのは俺とラミアさん、紅蘭の三人。この人選は技師としての能力を見てのもの。今回の工場攻略作戦の最大の目的は光武の修理に必要な部品の確保であり、人狩り部隊に関しては目的の邪魔程度の認識でしかなく、部品が手に入れ即座に撤退することになっている。そうになると技師としての能力のあるものが中に入り速やかに部品を確保すべきだろうと、こういう編成になったのだ。

ちなみに全員のそこら辺の能力を記してみるとこうなる。

俺、元の世界では車の整備員。

紅蘭、言わずもなが。

アイラ、機械？なにそれおいしいの？

クリムさん、軍用ジープの簡単な整備ならんとか。

ラミアさん、アンジェルグのような人型機動兵器の整備、修理からスパイ、破壊活動まで何でもござれ。

そんなわけで留守番組はクリムさんとアイラの二人になるわけだが、ここにジープを持ってきた場合どちらか片方は無防備な状態になってしまうことになる。片方に乗って片方を守ればいいと思うかも知れないが、そんなことをすると動きに制限ができてしまうことになる。何体いるかも分からない賞金首相手にそれは危険すぎる。ちなみにクリムさんはこの二週間、ちよくちよくとビッグモスの操縦を練習していたため、問題なく操縦することができたりするのだ。

「ユウ 見えた。この前 見た奴」

曲がりくねった道の向こうに見える工場を外部カメラがズームで映した映像をディスプレイに表示する。

「映ってるのは七体だな」

クリムさんの言葉に頷きレーダーを見る。この位置から見えない影になる場所に、さらに六体分の影が写っている。

「とりあえず、先制攻撃は頂くとしましょう」

ビッグモスのミサイルポッドを起動し、カメラで目視することのできる七体の人狩り部隊にレーザー照準をセットする。

「一六連ミサイルポッド、発射！」

放たれたミサイルは、発射前に設定されたターゲット目掛けて宙を駆ける。一体につき二発のミサイルが、突然の奇襲に対応しようとした人狩り部隊に襲いかかる。

それまで静寂に包まれていた森の中にミサイルの着弾により生じた爆音が響き渡る。ミサイル攻撃を食らった人狩り部隊はそれだけで粉碎され、デイスプレイ内から一時一掃される。

「なんや、賞金首の割には呆気ないんちゃうか？」

「いや、過去の情報を見る限りこんな簡単にやられるはずはない」

拍子抜けたような紅蘭の言葉をラミアさんが否定するが、実際に起こった事実として人狩り部隊は簡単に全滅している。いや、陰に隠れていた連中が表に出てきやがった。

100ミリロングレンジキャノンを起動させ、影から出てきた人狩り部隊を狙撃する。轟音とともに撃ち出された放談が人狩り部隊を撃ち抜き、爆炎を巻き上げ四散する。

「またや」

「おそろくだが、街を襲撃して来る奴は特別製なんじゃないか？」

「そのの整備か何かにかかる時間半年ってこと？」

「多分な」

「それが事実なら朗報だな。任務の成功率が格段に上がる」

道を進みながら現れる人狩り部隊を狙撃してゆけば、レーダーから敵影が消え去るのにさして時間はかからなかった。

「後続が出てきやがったな」

画面の端に映る工場のシャッターが開き、そこから人狩り部隊の援軍が列をなして出撃してくるのが見えた。

すぐさまミサイルの再装填の済ましたミサイルポッドのレーザー照準を増援にセットし、今回は一体につき一発ずつお見舞いしてやる。案の定一撃で粉碎される人狩り部隊を見ていると、最初に二発ずつ撃ったのがもつたいなくなってくる。

100ミリロングレンジキャノンで人狩り部隊を狙撃しながら工場敷地内に乗り込み、操縦をクリムさんと交代する。

「二人とも準備はいいな？」

「大丈夫です」

「うちもばっちしやで」

ライダースーツの上から防弾ジャケットを羽織り、アイテムや予備のマガジンを入れたリュックサックを背負う。この二週間ですっかりお世話になったAUGを手にラミアさんの言葉に頷いた。

「よし、いくぞ」

開いたハッチから飛び降り、工場の正面入り口へと向けて走り出す。本当なら入り口の前までビッグモスで進みたいところだったのだが、大型の重機やらが散乱しそういうわけにも行かなくなってしまうのだ。ビッグモスから入り口までの距離を半分まで進んだ頃、入り口の扉が内側から開かれ、中から多数のゾンビ達が姿を現した。「うわぁ、ゾンビってもしかしてクリームはんが言うところの奴か!？」

「わからん。ハンターオフィスで調べた限り、この世界のゾンビに噛まれてその同類になったという情報は無い。どっちにしても噛まれないに越したことはないがな」

そのとき工場の方からプロペラ音が聞こえ、そちらに視線を向けると、工場から無人機らしい小型のヘリが飛び立つのが見えた。さらには工場の中から機銃を備えた小型の多脚戦車が姿を現し、入り口へ向かう俺たちに向けて発砲し始める。

「物影に隠れる!」

ラミアさんの指示に従い屋上から倒れてきたらしいクレーンの影に飛び込み、多脚戦車の攻撃を回避する。

「ほぼ後ろからの銃撃か、やっかいだな」

ラミアさんの呟きに答えるようにビッグモスのガトリングが火を噴き、数体の多脚戦車をスクラップに変える。さらにいつの間降りたのか、アイラが多脚戦車に襲いかかり、一機が多脚戦車を持ち上げ他の機体に叩きつけて破壊してみせる。

「ユウ コウラン ラミア！ ここ アイラ 任せる！ みんな
先進む！」

「おおきにな！アイラはんも気いつけえよ！」

クリムさんとアイラ、二人の援護を受けて俺たちは入り口へと急ぐ。

「ほな、くらいー！」

紅蘭の背負ったリュックサックから飛び出すのは一機のちびロボ。
ちびロボは自身と同等の大きさの手榴弾を抱えてゾンビの群の中へ
と飛び込んでゆき、ど真ん中でそれを手放し離脱してくる。ちびロ
ボが紅蘭のリュックサックに戻った直後、手榴弾が爆発し多数のゾ
ンビを吹き飛ばした。

手榴弾によって空いた空間にラミアさんがいの一発に飛び込み、鞭
を振るってゾンビの足を払う。AUGの5.56 NATO弾をばら
まきながらその後を負う。

後少しで入り口にたどり着くと言うところで新たなゾンビが姿を現
す。しかしラミアさんはスピードを緩めることなく、むしろ加速し
て地面を蹴った。

「悪いが、退いてもらう！」

華麗な跳び蹴りがゾンビの頭部に炸裂し、仰向けに倒れるゾンビの
頭部をそのまま踏み抜き、放置したまま工場内へと駆け込んでゆく。

「ははは、カンナはんを思い出すわ」

紅蘭が笑いながら後に続き、俺が殿となって後に続いた。

工場（後書き）

犬、どうしようかな？

漢の中の漢、紅桜にするか。それとも闘将たるベンか、はたまた奥羽の将リキか……………、迷う。

いっそ霞岳の閻魔大王においでねがうか？

最強

通路の向こうから向かってる四体のゾンビ。広くもない廊下をまとまって歩く敵に銃口を向け、俺は引き金を引いた。

銃声は二度。一度目の銃声で身体をよろめかせ、下半身に向けて間髪入れず放った二発目が脚を破壊しゾンビ達は地面に這い蹲る。

「クリムさんが言ったとおりだな。ゾンビにショットガンは非常に有効だって」

イナーシャーソールシャルシステムという特殊なセミオートマチック機構を備える速射性に優れたベネリ製ショットガン、『ベネリM3スーパール90』に12ゲージ弾を装填し、這いずるゾンビ達に視線を落とす。足を失ってもこちらに向かってくる姿にため息をつき、超振動ナイフを引き抜く。

近づく俺に気づいたゾンビが手を伸ばそうとするが、それよりも早く首にナイフを突き刺し、動きが鈍った隙に首を狩り落とす。ゾンビはそこでようやく動きを止めてただの軀となり、同様の方法で残るゾンビをしとめてゆく。

「ラミアさん、こっち終わりました」

「了解した。こちらもすぐに終わる」

配電室と書かれた看板が下げられたら部屋の中からラミアさんが返事を返す。程なくして通路の照明が光を取り戻した。

「よっしゃ、これで終わりや」

「よし、入り口に戻るぞ」

配電室から出てきたラミアさんと紅蘭とともに入り口へと来た道を戻り始めた。

建物の中から湧き出るゾンビをかき分け、建物内に突入した俺たちは、入ってすぐのところ以案内図を見つけ、それを元にパイプが保管されている倉庫を目指すはずだった。しかし建物内は通路や階段が瓦礫でふさがっている場所が多々あり、最短のルートで目的地にたどり着くのは不可能になっていた。おまけに、そのルートとて閉ざされた防火シャッターを開けることができなくては使うこともできず、シャッターを開くためのモーターは電気が届いておらず死んだ状態。俺たちはモーターを動かすための電気を確保するため配電室に向かうことになったのだ。そして冒頭に戻る。

「開くぞ」

紅蘭が防火シャッターの開閉ボタンを押し、金属のきしむ音ともにシャッターが開かれてゆく。

そして……………

「いかん！隠れる！」

「え？」

ラミアさんと同じものを見た俺は、とっさのことに反応できていない紅蘭を押し倒すように物陰に飛び込み、その直後彼女のいた場所を無数の銃弾が穿った。

「人狩り部隊だ、そっちは大丈夫か？」

「う、うちは大丈夫や」

「俺も無事です」

押し倒される形となり顔を赤くする紅蘭の上から身をどかし、物影からシャッターの開いた通路を覗き込む。通路の真ん中に陣取る人狩り部隊の両手が瞬き、顔を引つ込めた瞬間壁が削られる。

「くそ、あんなところに陣取りやがって」

「悠介」

ラミアさんが人狩り部隊を顎でしゃくり、その視線でその意図に気づく。

AUGの銃身の下に取り付けられたM203グレネードランチャーを取り外した。再び通路を覗き込み、引き金を引く。発射された榴弾はまっすぐに人狩り部隊へと飛翔し、再度火を噴くガトリングに

顔を引つ込める。

爆音。

俺のすぐ横を衝撃が吹き抜ける。

「よし、いくぞ」

通路を確認したラミアさんに頷きながら、リュックサックから40mm擲弾を取り出しM203グレネードランチャーに装填しAUGに再装着する。

それを確認してから走り出すラミアさんを追って紅蘭が続き、殿を俺が勤める。

曲がり角から現れるゾンビをラミアさんのベビィイーグルが撃ち抜き、現れる人狩り部隊を紅蘭のちびロボ………が抱えた手榴弾と俺のM203グレネードランチャーで爆破する。

「ここもだ、天井が崩れて道がふさがっている」

「はあ、ここを抜ければ倉庫はすぐそこなんやけどなあ」

キネマトロンに映し出されたマップデータを書き換えながら紅蘭がぼやく。

「次のルートの選出は出来たか？」

「ん、もうちょい………、出た」

紅蘭の背後からキネマトロンを覗き込むと、赤いラインが引かれたマップが次々と写って入れ替わってゆく。

「ああ、ここから直接行けるルートは全部潰れてもうたみたいやな」

「マジ?」

「ほんまや。こうなると工場から倉庫に向かうルートしかあらへんわ」

「そうか、なら急ぐぞ。ルートは?」

「一度一階まで戻らなあかな」

「一番近いのは先ほどこの階に上がってきたときの階段だな?」

「そやね、電気さえ通つとつたらエレベーターも使えたんやけどな」

「無いもの値だろしてもしようがない。外でクリムさんたちも待ってるんだし、急ぐじ」

しかし……………

「じめんなさい……………」

三階、階段付近。

俺は紅蘭とラミアさんに土下座をしている最中だ。何故なら……………。

「うわぁ、一階まで吹き抜けになってもうたわ……………」

「お前がやらなければ我々の方がやられていたんだ。不可抗力だ」

目の前に空いた大きな穴を覗き込み、紅蘭苦笑しながらそう言い、ラミアさんもどうしようもないとばかりに首を振る。穴を覗いてみれば、階下には爆破されバラバラになった人狩り部隊の姿。顔を上げれば穴の向こう、幅跳びの五輪選手でもない届かないような位置に崩れかけた下り階段がある。

ラミアさんの言葉通り、原因は俺である。階下へと降りる階段へ向かった俺たちは、敵に見つかることなく階段のすぐ傍まで来ることが出来た。そう、すぐ傍までは。

階段まで後少しまでたどり着いたときその階段から人狩り部隊が現れ、俺はとっさにM203グレネードランチャーを放っていた。放たれた榴弾は違うことなく人狩り部隊を爆砕し、ついでに広範囲にわたって床を崩壊までさせてくれたのだ。しかも瓦礫が落ちた衝撃で二階の床まで落ちるといっておまけ付きで。

「しかし、どないする？他の階段もこの穴を越えた向こうの方や。あっちに行くくらいならまだ階段に跳び移る方が距離も近いでっせ？」

それでも五十歩百歩だけどね。正直五輪の幅跳びの選手でもないと思えないんじゃないかな？

「……………紅蘭、ここに戻る途中にエレベーターがあったな？」
「ん、エレベーター？あるにはあるんやけど、さっきも言ったとおり、電気が通っておらんから動きまへんで？」

「わかっている。むしろ止まっていてくれた方が都合がいい」

三度今来た道を戻り始めるラムリアさん。俺と紅蘭は互いに顔を見合わせ、首を傾げながら後に従った。

そしてたどり着いたエレベーター。その重い扉を開いた。エレベーターの扉の向こうにエレベーターの姿はなく、闇から闇へと垂れ下がるエレベーターを吊すワイヤーがあるばかり……………。ああもしかしてそういうことか？

なんとなく彼女がなにを考えているのかが分かった俺は、中に首を突っ込み暗闇に覆われた底の方を見る。

「もしかして、これを伝って降りるんですか？」

エレベーターがどこにあるかも分からない闇の中、一つ下の階のエレベーターの扉が見えるが、そこには身体を支えることのできるような取っ掛かりはなく、穴の真ん中にワイヤーがあるばかりだ。

「そやかてどうやって扉を開けるつもりなんや？エレベーターも地下三階の辺りまで落ちこちとるようやし、ワイヤーにぶら下がったままじゃ難しいんじゃない？」

暗視ゴーグルらしきものをかけた紅蘭が穴の中を覗き込む。

「それについても考えてある。問題は無い。
……………多分な」

最後に小さく何かを言い足しながら、背負っていたリュックの中から何かを取りだし、エレベーターの傍から退いた俺たちの間を通ってワイヤーに掴まり、なれた様子で穴の中を滑り降りてゆく。ワイヤーを伝って滑り降りてゆくラミアさんの姿は直ぐに見えなくなった。

「見える？」

「見えとるで。」

「なんやラミアさん、今リュックから取り出した物を扉に取り付けとるな……………。あ、戻ってきた」

ワイヤーを登って戻ってきたラミアさんに手を貸して引っ張り上げると、扉を閉めるように言われ、言われるままにエレベーターの扉を閉める。

「扉は開いてなかったと思うんやけど？」

「ああ、これから開けるところだからな」

そこでラミアさんが何かを持っていることに気づき、それが何かを聞こうとしたところで彼女はスイッチを押した。

エレベーターから爆音が響いた。

茫然とエレベーターを凝視した俺と紅蘭は、同時にラミアさんに振り返った。彼女は何食わぬ顔でエレベーターの前に進み出ると、無造作にその扉を開いた。

「見てみる」

言われるままに穴の中を覗き込む俺達二人。

「開いたな？」

「扉やのうて大穴やけどな……………」

一階の辺りに漏れる光に、俺と紅蘭は茫然とそう呟いていた。

先に一人一階へと降りていったラミアさんに渡したAUGの純正が穴の下の方から響いてくる。エレベーターの前にゾンビが集まっているのだらう。しばらくして音が止み、下からもう大丈夫だとラミアさんの呼び声が聞こえてくる。

「ほな、お先にな」

紅蘭が降りて行くのを見送り、俺は辺りを見回した。近寄ってくる敵の影はなく、しばらくして降りてこいと合図をもらう。

「改めて見ると、落ちたら一貫の終わりだよな……………」

階下に溜まった闇が蠢いているような錯覚を覚え、俺は身体を震わせど。摩擦熱で火傷をしないようにハンカチを巻いてワイヤーを掴み、深呼吸をしてから穴の中へと身を躍らせた。ワイヤーを使つての降下は思っていた以上にすんなりと終わった。

「大丈夫か？」

「大丈夫です」

さっきとは逆にラミアさんに手伝ってもらってエレベーターの縦穴から脱出し、貸していたAUGを受け取る。マガジンをイジェクトして残弾が少ないことを確認し新しいマガジンと交換すると、合格とばかりに微笑したラミアさんが肩を叩いて先を走り出す。

予備マガジンも渡してたのに交換してなかったのはちょっとしたテストだったのね。

そのことに苦笑しながら後を追って廊下を走り、そこからは先ほどまでと同じ。ただこの建物内の人狩り部隊はほとんどいないのか、工場に着くまでの間一度も遭遇することなく建物と工場を繋ぐ通路に到着した。が、しかし……………

「また嫌なところに陣取ってくれる」

壁に背をつけ廊下の向こうを覗き込むと、一切の障害物のない長い通路の先に、今まで遭遇したことのないロボットが陣取っていた。

人狩り部隊のような人型ではなく、四つの足で身体を支えたその口ポットは背中には二門の小型戦車砲を装備し、人狩り部隊の両手につけられている物よりも大型のガトリング砲を四門装備し、それらは等間隔に並べられていつでも来いとばかりにこちらに向けられているのだ。

「どうします？廊下に身をさらした瞬間蜂の巣ですよ、これ」

「それに下手にグレネードランチャー使っても、また廊下が崩れでもしたらお終いやで？倉庫にはこの建物と工場からしか入ることはできん造りになつとるし、この建物から工場に行くルートは唯一ここだけや」

「後は一度外に出て工場に向かうかだな？ただでさえ時間がかかっている。また外に出てクリム達のを煩わせる訳にはいかないな」

「とはいえここを無事に突破する方法は無いらしく、舌打ちをして壁を叩く。」

これがゲームならどこかにキーアイテムがあつて、それを使用して突破できるんだろうけど、リアルでそんなことあるはず無いしなあ。でもだめで元々とも言つし……………。

「……………倉庫に辿りつくのが目的で今までやりませんでしたけど、一度近くの部屋を探してみませんか？何かこの状況で役立つものがあるかも知れないし」

「何かないか、て……………、都合よくそないな物が見つかるもんなんか？」

そう言いながらもキネマトロンで今行くことのできる部屋をマップ上に写ししだす紅蘭。

「そうだな、この場で考えたところでこの状況が好転するわけでは無いか。紅蘭私のキネマトロンに地図を転送してくれ。手分けして探す。」

私はこのエリアを探索する。悠介と紅蘭は二人でこっちのエリアを探索してくれ」

携帯キネマトロンに転送された地図を見ながら出された指示に頷き、俺はAUGからM203グレネードランチャーを取り外し、数発の予備弾と一緒に彼女に手渡した。

「こっちは紅蘭がいるから大丈夫ですけど、ラミアさん人狩り部隊に有効な武器持ってきてないでしょ？」

「そうだな、遠慮なく貸してもらおう」

そう言って頷くラミアさんと別れ、俺と紅蘭は指定されたエリアに向かう。

「紅蘭、このエリアに警備室は？」

「あるで、ちょい離れてるけど……、そこから手を付けるんか？」

「闇雲に手を出しても時間がかかるだけだし、警備室だったら何かしら荒事に関係する物があるだろうしね」

俺の説明に納得したのか頷きながらキネマトロンを操作する紅蘭に

案内され警備室に飛び込んだ。

「やっぱりここにいるゾンビって、元はこの建物の従業員だったの
かね？」

飛び込んだ警備室で俺達を迎えてくれたのは、生前の物だろう警備
服に身を包んだ三体のゾンビ。

Five-sevenを引き抜き、ばやきながら一番近いゾンビの
頭部に照準を合わせてトリガーを引く。一発目はゾンビの耳を吹き
飛ばし、二発目が顔面に決まってゾンビをのけぞらす。三発目はソ
ンビの白く濁った目に命中し、脆い眼窩を打ち砕いたのか、そのま
ま後頭部を破裂させて動かなくなる。

「一匹目！悠介はん、その感じで頼んまっせ。マシンガンなんか使
うたら警備室が今以上に滅茶苦茶になるさかい」

「難しい注文ですこと。でも美女の頼みは無碍にするわけにはいか
ないよね？」

警備室の真ん中に置かれた机を迂回しようとするゾンビに狙いを定
め、トリガーを引いてゆく。四発撃った内の一発がそれで壁に掛か
っていたヘルメットに命中するが、運良く口内に飛び込んだ最後
の一発がそのまま後頭部を貫通し、一体目と同じように動かなくな
る。二体とは別の方向から机を迂回してくる三体目のゾンビに対し
て、俺と紅蘭は同じように机を迂回して距離を取る。後は他の二体
と同じようにも頭部に狙いを定めて銃弾を打ち込み、三発目で留め
をさした。念には念を入れて残弾をそれぞれの脚に打ち込んでマガ
ジンを交換し、二人で警備室の探索を始める。

「なにかあったか？」

「なにも。こりゃ空振りやな」

机の引き出しの中から取り出した書類の束を、ため息とともに机の上に放り出し、棚に並べられた冊子を流し見する。

「なんや、これ？」

声に振り返ると紅蘭がロッカーを調べているところだった。彼女の後ろからロッカーを覗き込み、そこに吊された警備服の肩部分になにか機械が取り付けられていることに気づく。

「これって？」

ロッカーの中から警備服を取り出し、両肩に取り付けられたその機械を調べ始める。鉤爪のように伸びた部品を角に配置したその機械、内蔵された電池がまだ生きているらしく、表面に付けられたボタンを押すと鈍い音を立てて起動し、薄緑色のシールドのような物を発生させる。

「うわ、これって？」

「ん、おそらくこれはリフレクター発生装置やな」

「リフレクター発生装置？」

「せや、言うてみればバリアやな」

そのリフレクター発生装置のスイッチを切った紅蘭は、今俺が探していた棚を調べると一冊の冊子を取り出し、それを読みながら装置をいじり始めた。

「どうやらこれは、ここの工場で造った物の一つみたいや。内蔵された小型バッテリーを充電すれば何度でも使えるみたいやな。ほお、これはすごい。制限はあるんやけど、これ一つで戦車砲ですら防げる代物らしいで？」

「マジ!? それならこれを使えば……………」

「せや、あそこも突破できる」

冊子・説明書らしきそれを読み終えた紅蘭は整備服からリフレクターを取り外した。

「紅蘭、こつちにもまだあった」

他のロッカーから取り出したリフレクターと合わせて合計五つのリフレクター発生装置を手に入れ、俺達は携帯キネマトロンでラミアさんにそのことを連絡する。ラミアさんの方も何かを手に入れたらしく、先ほどの通路で合流する事にして連絡を切る。

リフレクターとロッカー内から見つけた12ゲージをリュックにしまい、ラミアさんと合流するために警備室を後にする。ゾンビと遭遇することもなく合流した俺達は、見つけたリフレクター発生装置をラミアさんに見せた。

「説明書を見た限り、最大出力でなら十発は戦車砲も受け止められる。せやけどあつちはガトリング砲まであること考えても、戦車砲を受けられるのは三発から五発が限度やろつな」

「それだけあれば通路を渡り切るには十分だ。私の方もこんな物を見つけたことだしな」

ラミアさんが見つつけてきたのは一冊のファイルだった。紅蘭が受け取ってそれを見てみると、通路に陣取るロボットの設計図のようだ。

「はあ、あれ足元にはこれといって武装も無いんやな。これなら通路を突破した後は腹の下は安全圏うちゅうことになるな」

「しかもあいつの腹には構造上もろい場所がある。そここのところを撃ち抜けばあれをしとめるのは簡単だ」

「ちなみに、ラミアさんのベビーイーグルの弾は？」

「.40S&W弾だ」

「.40か、あの装甲を抜くには最低でも.45ACPが必要じゃないか？ 贅沢言うなら.50AE弾だけど……………」

AUGが使えればいいんだけど、いくら安全圏とはいえ相手も動けるんだし、中腰にならないと潜り込めない場所でAUGは大きすぎる。

「.45ACPでも抜けるかどうかは賭だがな。だが心配するな。他の部屋でこんな物を見つけて来た」

そう言うって取り出したのは三丁のハンドガン。それも……………

「『S&W M500』 『トラス・レイジングブル』 に『パイプアーツエリスカ』？」

それを見た瞬間俺は自分の頬がひきつるのを感じた。S&W M500、トラス・レイジングブルはともに最大威力を誇る拳銃弾。・

500S&Wマグナム弾』を使用する大型拳銃で量産型のハンドガンとしては最強の二品である。しかも使用者の安全をこれっぽっちも考慮せずに造られ、それこそ十発も撃てばしばらくはまともに文字も書けなくなるような代物である。

『パイファーツェリスカ』はもつと凶悪で、使用する弾丸が既に拳銃用の物ではなく、『600ニトロ・エクスプレス』または、『458ウィンチエスターマグナム』という象狩り用大口径マグナムライフル弾薬で、正直ハンドガンに使用するような代物ではない。先の二丁が『世界最強の拳銃弾を使用する拳銃』であるのに対し、パイファーツェリスカは文字通り『世界最強の拳銃』なのだ。もちろん先の二つでさえ使用者に害を与える代物なのに、大口径マグナムライフル弾を使用する拳銃がまともなわけがなく、依託射撃でもしなければまともに射撃することすらままならない暴れ馬なのだ。ちなみに依託射撃というのはなにかしらに固定しながら射撃することだ。

「ラミアさん、それ扱えるの？」

「ああ、さすがツェリスカは無理だが他の二丁は大丈夫だ」

そういえば彼女って人造人間なんだよな、一応。普通の人間よりもスペックが高くてもおかしくはないのか。

「？よくわからんけど、あれをどうにかする目処はついたんやな？」

「そうなるな。紅蘭、リフレクターの使い方を教えてくれ。私が奴の無効化に向かう」

「了解、ちと腕を出してくれへんか？」

ラミアさんの細い二の腕にベルトを付け、そこにリフレクター発生装置を取り付けながら使い方を教え始める紅蘭。それを横目にラミアさんが持ってきたトールラス・レイジングブルとS&W M500を点検する。点検といっても俺じゃ簡単なことしかできないが、しないよりはマシだろう。最後に弾丸がフルに装填されていることを確認し、準備が終わったラミアさんに手渡した。

「せやけど、一人で大丈夫なんか？」

「奴の下は狭い。二人で行っただけでも片方は確実に足手まといになる」

「気をつけて下さいよ」

「わかっている」

ラミアさんがリフレクター発生装置のスイッチを押し、彼女の左肩にリフレクターが発生する。

それを確認して通路に飛び出した彼女に、敵のガトリング砲が火を噴いた。対するラミアさんは左肩を前に突き出すようにして銃撃をリフレクターで受け止め、敵めがけて通路を駆け抜ける。秒間で一体どれだけの弾が吐き出されているのか、通路に刻まれる弾痕に俺は息を呑んだ。

そんな中敵はガトリング砲では効果がないと考えたのか、ガトリング砲を撃ちながら背の戦車砲をラミアさんに向け、砲撃した。

「ラミアはん!？」

リフレクター発生装置のスペック上は砲弾も受け止められる代物だが、不測の事態などいつでも起こりえる。紅蘭が悲鳴にも似た声を上げ、それと同時に着弾した。

発射された二発の砲弾は真っ向からリフレクターと衝突した。

そしてリフレクターはその攻撃を受け止め、弾き返すことに成功する。しかし砲撃を弾いたのリフレクターでも受け止めたのはそれを扱うラミアさんだ。ラミアさんは着弾の衝撃で体勢を崩し、その場に膝をついてしまう。

すぐさま立ち上がり敵に向かって走り出すが、敵はすでに次弾の装填を開始している。後少して辿りつくところで装填は完了し、砲口がラミアさんに向けられた。

間に合わなかった？

横で紅蘭が息を呑み、俺は唇を噛んで祈ることしかできない。なんとか、間に合ってくれと。

再び爆音が鳴り響き、直後に着弾を示す轟音が建物を揺るがし、ラミアさんがいた辺りに大きな穴が空いているのが目に入った。再び紅蘭が息を呑む。俺もまたその光景に絶句し……………、大穴の向こうに何かが動くのが見えた。それは……………

「大丈夫だ！紅蘭、あれ！」

俺の言葉に顔を上げて指さす先を見る紅蘭。そこにはスライディングの格好で敵の下に滑り込んだラミアさんの姿があり、彼女はトールス・レイジングブルの銃口を敵に押し付け、トリガーを引く。続け様に五発の銃声が響き、さらにS&W M500が押し付けら

れ五発の銃声が追加される。

合計十発の銃弾が打ち込まれた敵は、各所から煙りを上げながら、まるで痙攣を起こしたかのように震えだし、その場に崩れ落ちた。間一髪敵の下から脱出したラミアさんに安堵し、彼女の元へ駆け寄ってゆく。

「ラミアはんだ丈夫か!？」

「ああ、流石に二度目の砲撃の時には肝を冷やしたが、この通りだ」
肩をすくめながらリフレクター発生装置を外す彼女に、紅蘭もやっ
と安心したらしく安堵のため息を吐く。

「なあ、紅蘭」

「なんや悠介はん？」

動かなくなつた敵を見ていた俺は、ふとあることを思いつきそのこ
とを紅蘭に尋ねると、紅蘭は手を叩いて頷き、俺の思いつきを確か
める作業に移つた……………

最強（後書き）

南雲慶一郎

リアルバウトハイスクールの主人公。あらゆる武器に精通した戦いのスペシャリスト。いろいろ規格外な人間だが、流石に地上から人工衛星を撃ち落とせるほどの実力となると、パワーインフレが激しすぎるので没になった人。

香螢

エンジェル・ハートの主人公。元台湾系マフィアの暗殺者。劇中の彼女と心臓との親和性についての説明により没に

海坊主

エンジェル・ハートに登場するカフェの店主。自称ファルコン。その外見とは裏腹に多くの女性に惚れられている男。作者も同シリーズでもっとも好きなキャラクター。流石にMETLMAXの世界に盲目の彼を放り込むのは無茶なので没に。

万事休す

「紅蘭、どうだ？」

「ん〜、残念やけどこれには使われ取らんようや」

「そうか、言い考えだと思ったんだけどな」

通路を塞いでいた敵を分解していた紅蘭が首を左右に振り、ため息を吐いて頭を搔く。

「いやいや、悠介はんの考えは悪いもんやあらへんで？うまくいけばこのことも、さつさとさよならできたんやしな」

「敵の残骸から必要な部品を手に入れる、か。私達では思いもしなかったからな」

そう言っただけを叩くラミアさんの背中には、今までは無かった代物がドン、自己主張している。今紅蘭が分解した敵のガトリング砲だ。紅蘭が分解した部品を使って即席で組み立てたガトリング砲を背負ったラミアさんは、残りの三門のガトリング砲やまだ使える部品を取り分け通路の脇によけていた。何でも帰りに余裕があれば回収していくつもりらしい。それにしても、あのガトリング砲ってビッグモスに積んでるのと同じかそれ以上のサイズなんだけどなあ、よく人間の武器として扱った気になったよなあ。

「紅蘭、終わったか？」

「はいな、こっちは終わったで。それじゃ、倉庫目指して行きまひよか」

工具をリュックに戻して背負いなおしたのを見て、僕らはようやく工場への扉を潜った。

工場に入った俺達を襲ったのは、むせかえりそうになるような熱気の固まりだった。あの砂漠とは違う、前進に粘り着くような湿気を孕んだ暑さに俺は眉をしかめた。

「どつやらここは製鉄所のような」

ラミアさんの呟きに工場内を見回すと、俺達がいるのは地下に掘り下げられた空間のキャットウォークの上で、眼下を見下ろせば真っ赤に熱され、ドロドロに溶かされ鉄が鉄板へと精製されているのところが見える。何枚物鉄の板がベルトコンベアに乗せられながら徐々に冷やされていくその姿は、確かに小さい頃に社会科見学の際に訪れた製鉄所を思い起こさせた。

「ここは製鉄エリアや。」

倉庫に行くにはあっちの精密機械を作つとるエリアに行かな」

「紅蘭、この工場はいくつのエリアに分けられてるんだ？」

「この製鉄エリアを含めて六つや。それぞれがここと同等の広さを持ったエリアや」

「それだけの空間をよく一個の建物の中に納める気になったもんだよな」

「まったくやね。せやけど今はそれについて考えてる場合や無いやろ？」

「そうだな。今は先に行くことが先決だ」

そう言つてラミアさんがキャットウォークの上を、先ほど紅蘭が指差した方へと歩き始め……………

『侵入者発見 侵入者発見 工場を一時閉鎖します』

突然の警報とアナウンスに啞然としている俺達の目の前で、今入ってきた入り口にシャッターが落ち、工場内にある全ての窓も同様にシャッターで塞がれてしまった。

「急になんで……………」

鳴り続ける警報に紅蘭がうろたえ、なにが起きたのかと周囲を見回した俺は、ラミアさんの足下にある物を見つけた。真っ赤に熱された鉄に照らされ、工場内は赤く染められている。そんな赤い光に照らされた空間では見分けることの困難な赤い光の線……………

「ラミアさん、足下……………」

「ちっ、まさかこんなありきたりな物に引っかかるとはな……………」
レーザーから足を退けるものの、警報が鳴り止むことは無く、うるさい電子音にため息をつく。

「工場を閉鎖、てことは倉庫への道も閉鎖されてるってことが……………」

「だろうな。紅蘭何か手は無いか？」

「工場全体を統括する制御室があるんやけど、そこにいけば警報を止めて工場の制御を奪うこともできるんやけど……………」

「何か問題が？」

解決策を見つげながらも歯切れの悪い紅蘭に首を傾げ、彼女の持つキネマトロンの画像を覗き込む。

「これが制御室か？」

「せや。なんやけどこれ、どこから見ても入り口がないんや」

そう言っで見せられた見取り図は、確かに制御室への入り口が描かれてていない。

「……………よくよく考えたら、よそ者に工場の中核への入り口が分からないように描かれてないんじゃ？」

そうだよなあ、外から来た奴が勝手に重要施設に行けるようになって

るはず無いもんなあ。

「……………とにかく制御室が空る場所に行くぞ。制御室への入り方は後で考えればいい」

ラミアさんの言葉に頷き、彼女を先頭に製鉄所区画から隣の区画へと移動する。

よくよく考えてみれば、侵入者発見とか言っているということは、工場を閉鎖するだけのはずがなかったんだよな。

各区各を繋ぐ扉を開いた瞬間、そこで待ちかまえていたのは見たことのない、いや、どこか見覚えのあるようなロボット達だった。

四つ足に一つ目の頭部を持った緑色のロボット達が一斉にレーザーを放ち、俺達は扉の影に飛び込み、間一髪のところまでそのレーザーを回避する。

「ああ、くそ警備ロボットってやつか!？」

「製鉄所区画にはいなかったからな、油断したな」

「ちよ、ラミアさんその足……………!？」

扉を挟んで、俺達とは逆の方へと飛び込んだラミアさんの足を見て絶句した。あのロングブーツが焼き貫かれていたのだ。

「……………大丈夫だ。膝の辺りを掠めただけだ」

「掠めただけって、それじゃ満足に動けないでしょ!」

ガシャガシャと耳障りな足音を立てて近寄ってくる警備ロボット達

にFive-sevenを向けて発砲する。反撃のレーザーを扉の影に隠れることでかわしつつ、隠れると言うことを知らない警備ロボットに5.7mm弾を打ち込んでゆく。警備ロボットは人狩り部隊ほどの強度を持つ装甲を使用していないらしく、銃弾は弾かれることなく緑色のボディに穴を空けてゆく。マガジン一つ分の弾丸を撃ち終えた頃によやく一体が崩れ落ち、反撃の勢いが弱まる。その好きについて紅蘭がラミアさんの傍へと跳び込み、ブーツを脱がした。

「……………確かにレーザーは掠めただけみたいやけど、これじゃしばらくはまともに動かせへんで」

マガジンを交換して攻撃を再会しながら、紅蘭の言葉に唇を噛む。

「紅蘭、私のことは気にするな。この程度のこと、どうとでもなる……………」

「阿呆なこと言わんといてや！手当もせずになにしようとしとんをやー！」

攻撃に加わろうとするラミアさんを押さえつけ、紅蘭が彼女の手当てを始める。

「ラミアさん、今はとにかく手当をしてください。今無理をして後に響いたらどうするんですか！元の世界に戻るためにも、こんなところで躓いてる暇はないんですよー！」

当たりどころが良かったのか、二つ目のマガジンを使い切る前に二体目の警備ロボットを破壊し、狙いをすぐさま次の敵へと変更する。扉の影に隠れたままという体勢のせいです片手で撃った弾は、反動

を押さえ切れぬ為にどうしても命中率が悪くなる。弾切れになったマガジンを舌打ちしながら交換し、弱点らしい頭部と胴体部のつなぎ目を狙ってトリガーを引く。

「残り二体！」

三体目の警備ロボットが機能を停止し、四体目へとターゲットを変更。三体目に弾を消費しすぎたのかすぐに弾切れを起こし、マガジンを取り替えるために扉の影に身を隠す。だが……………

「嘘だろ……………」

「悠介はん？」

「完全に弾切れだ。もう予備弾がない！」

今回用意したFive-sevenの予備銃弾が底をつき、舌打ちをして敵を見る。こちらの攻撃が途切れたために動き出したか、遅い速度で前進する警備ロボットからレーザーが放たれ、急いで身を隠す。

AUGはどうしたと思うかも知れないが、AUGのようなアサルトライフルを物陰に隠れ、両手で保持して撃てない状況で使えばどうなると思う？何かに固定して撃つならともかく、片手で撃った直後、反動で銃が暴れてとんでもないところに銃弾が飛ぶだろうな。それこそ仲間の方とかに。

「悠介はん、これを使うんや！」

紅蘭がリュックから取り出し投げ渡してきたもの、それは先ほど見つけたリフレクター発生装置だった。

「ナイス紅蘭！」

先ほどラミアさんの左手に着けたように、手早くリフレクター発生装置を自分の左腕に取り付けスイッチを入れる。発生したリフレクターを前に突きだし、全力で敵めがけて走り出した。

このリフレクターの欠点を上げるとしたら、リフレクターの内側から銃で攻撃することができないということだろう。それでもレーザーを防いでくれるリフレクターの存在はとても心強く、警備ロボットとの距離を詰める間にいくつもの熱線を受け止め弾いて見せた。

「ぬうあああああ！」

雄叫びを上げながら警備ロボットの目の前でキャットウォークを蹴り跳躍。頭部を飛び越え背中に着地すると、もう一体の警備ロボットにリフレクターを向けたままAUGの銃口を警備ロボットの背中に押し付けた。アサルトライフルを片手で運用するのが困難なのは先ほども言ったとおり。しかし今のように銃口を押し付け、固定出来たときはその限りではない。トリガーを引きフルオートで吐き出された全弾三十発の5・56 NATO弾が警備ロボットの薄い装甲を突き破り内部滅茶苦茶に引き裂き、粉碎し、蹂躪する。音を立てて崩れ落ちる警備ロボットから飛び降り、弾切れになったAUGを投げ捨て最後の一体へと走る。腰のホルスターから引き抜いた超振動ナイフを逆手に持って振りかぶる。

そのとき急にリフレクターが消失した。元々バッテリーが少なかつたのか故障が原因かはわからないが、リフレクターが消えるのと同じ時に放たれたレーザーを交わしきれず、右側頭部を掠めた。

「……………っ！！」

痛みは感じず、しかし真っ赤に焼けた鉄の棒を押し付けられたかの

よう感覚に悲鳴を上げそうになるのを必死に押さえ込み、逆手に持ったナイフを警備ロボットの頭部、レーザー発射口に突き刺した。レーザーを放つために溜められていたエネルギーが行き場を無くしてショートし、引き抜いたナイフを頭部と胴体部の隙間に突き刺し、一気に切り落とした。頭部を失い剥き出しになった機械の中に、ピンを抜いた手榴弾を突っ込み、床を転がって警備ロボットから離れつつ伏せに伏せる。警備ロボットの内部で手榴弾が爆発し、警備ロボットは内部からバラバラに吹き飛んだ。唯一残った四つの脚が音を立てて金網の通路に倒れ、ようやく戦闘は終了した。

「悠介はん！」

「はあ、はあ、大丈夫、生きてるよ」

ラミアさんに肩を貸した紅蘭が急いで近寄ってくるのを見て、安堵のため息をつく。気が抜けたからか、思い出したかのように襲ってくる激痛にレーザーが掠めた頭の右側を押さえ、それが逆に痛みと なって俺を襲う。

「~~~~~っ!!!!!!」

「なにしてんねん!? 傷口に触ったらあかんやろ!」

紅蘭に叱られて手を離し、傷口を押さえなくなるのを必死に我慢しながらキャットウォークに座り込む。

「ラミアさんの手当ては?」

「何、阿呆なこと言っとんのや。ラミアはんは足! 悠介はんは頭! 先に自分の心配せい!」

「紅蘭の言うとおりだな。私の心配をしてくれるのは嬉しいが、人の心配をする前に自分の心配をしろ」

俺の隣に腰を下ろしたラミアさんが首に手を回した。左腕に触れる柔らかい感触に頬が緩み、何事かとパニックそうになった俺の顔が強制的にラミアさんに振り向かせられる。いきなりの展開に生唾を飲んだ直後彼女の腕に力がこもり、首から上を固定された………！

「ちよ、ラミアさん痛い、痛い………！！」

「すぐにすますから我慢してや」

横から紅蘭の声が聞こえ、傷口に何か冷たいものが塗られた。

「いいいいいいい………！？染みる、染みる！紅蘭何やってんの！？」

「何って手当てしとるだけやろ。男の子なんやし染みるのぐらい我慢しい」

言いながら塗りたくられる何か（たぶん薬品）に悲鳴を上げ、ラミアさんの拘束を解こうとするが流石は軍人、俺程度の腕力ではふりほどくことはとうていできそうにない。

「悠介、あまり暴れるな」

首に回された腕にさらに力がこもり、もはや拘束というよりも寧ろ絞められていると言ってもいい状態。ラミアさんの胸がさらに腕に密着するものその感触を楽しむ余裕などあるはずも無く、紅蘭の

手当てが終わるよりも早く、俺の意識はブラックアウトしていった。

「あ、落ちた……………」

意識が薄れてゆく中、そんな声が聞こえたような気がした。

「……………ん、悠…はん！」

体が揺さぶられ、聞き覚えのある声に意識が浮上してくるのを他人事のように感じていた。

「悠介はん！」

紅蘭の大きな声が耳朶を叩き、俺は目を覚ました。

「つつう……………、俺、なんで寝てたんだ？」

なぜか痛む頭を抑えそこに巻かれた包帯に手が止まる。

「あれ、怪我？」

「お、覚えてないんか？」

ひきつった声に首を傾げながら辺りを見回すと、そこは床が金網でできたキャットウォークの上、その手すりに背を預ける形で意識を失っていたようだ。キャットウォークの下ではベルトコンベアによって運ばれてくる部品を組み上げ、ロボットを作っているところだった。

ロボット？

「……………そうだ、たしか工場に光武を修理するための部品を探しに来てたんだ。それで警備ロボットの奇襲にあって……………？
どうなった？」

「いかん、マジで思い出せない。

奇襲をかわしきれなくて気絶してたのか？」

「……………奇襲にあったところまでは思い出せた。あれで気絶してたのか？」

「……………覚えてらんようやね。

「まあええわ。あのロボットは悠介はんが倒したんや。その時ちよい無茶したからな、気絶してたのはそのせいや」

心なしか視線を逸らす紅蘭。でもまあ、嘘をつく理由もないし、そ

う言っことなんだろう。臃気ながら怒られたような気もするし、無茶して怒られたんだろう。

「話は後でもできる。続きは用が終わってからでも遅くはあるまい？」

ラミアさんの言葉に頷き、傍に置かれていたAUGを手にとってマガジンをリリースする。

「弾切れ……………、警備ロボットに撃ち尽くしたのか？」

リュックから予備マガジンを取り出そうとしてFive-sevenの予備マガジンが無いことに気づく。いや、あるにはあるもの、どれも空になっているのだ。もしやと思ってFive-sevenのマガジンをリリースして確認してみれば、案の定空っぱのマガジンに頬をひきつらせる。

「悠介、こいつを使え」

「え、いいんですか？」

横から差し出されたベビーイーグルを受け取りながら持ち主に問い返せば、苦笑しながら引きずっている脚を軽く叩いた。

「この有様だ、今の私はまともに動けん。頼りにさせてもらっぞ」
そう言っって胸元を叩かれた。

「……………わかりました。じゃあちょっとお借りしますね」

Five - seven をリュックにしまい、借り受けたベビーイーグルを代わりにホルスターへと収め、一緒に受け取った予備マガジンをジャケットの裏へとしまう。気を取り直して AUG のマガジンも交換し、準備ができたことを伝えて、今度はみんなの先頭に立ってキャットウォークを歩き始めた。

俺が気絶している間に紅蘭が工場にハッキングして手に入れたというこの区画の詳細な見取り図を手にキャットウォークの上を歩いて行く。

向かう先、工場の制御室はこの区画の真ん中、天井付近とこのキャットウォークよりも高い場所に設けられている。俺達はこの区画に入ってきた扉から制御室を挟んで向こう、もっとも離れた場所にある梯子へと向かっていた。

幾度か例の警備ロボットに行く手を阻まれることになったが、一度に現れる数は多くて三体とあまり数はおらず、おまけに大きな音を立てて天井からチェーンにぶら下がって降りてくるため、キャットウォークに降りる前に AUG の銃弾を浴びて蜂の巣となっていた。

ようやく辿りついた梯子を上って天井裏へとやってきた俺達。掃除のその字も行われていないらしい埃だらけの空間に眉をしかめ、ハンカチで口元を抑えながら一本道を進んでいく。

しばらくして下の区画の真ん中辺りにたどり着き、そこに空いた穴から下へと降りる梯子を下りやっとなりついでに制御室へと辿りついた。

「紅蘭……………」

「まかしとき、ちやちやっとなりついでに制御室のコンピューターへ繋ぎ作業を開始する。」

「まかしとき、ちやちやっとなりついでに制御室のコンピューターへ繋ぎ作業を開始する。」

「はあ、これで一段落、ですかね……………」

天井裏から敵が来ることがないかももう一度梯子を上り、なにもいないことを確認して制御室へと戻る。狭い制御室内を紅蘭がキネマトロンを操作する音と、制御室内の機械の駆動音が支配する。

「だいいいが……………」

「奥歯に何か詰まったような物言いですね？」

「こつ安心したところで何かが起こるのが常だったからな」

機械に寄りかかりながら全長で1m半はあるガトリング砲を抱えるようにするラミアさんの不吉な言葉。実際にそうであったのだからことが分かっているだけに、その言葉の持つ重さに息を飲んだ。

「よっしゃ、これで完了や！」

ラミアさんの言葉に重くなった空気を霧散させたのは、キネマトロンで制御室のコントロールを奪おうとしていた紅蘭のそんな言葉だった。

嬉々として最後の一手なのだろうボタンを押した直後、ずっと鳴り響いていた警報がぴたりと鳴り止んだ。

「お疲れ様」

「よくやったな、これでは倉庫に行くだけか」

警報が鳴り止むのに次いでシャッターが次々と上がってゆき、ほっ

と安堵のため息をついて梯子を上ろうと上を見上げ、俺の目の前で天井裏へと続く穴が一瞬で閉じられた。

「え、ちょ、紅蘭!？」

慌てた俺の声に何事かどうか二人が振り返り俺が天井を指さそうとした時、制御室が大きな音を立てて揺れた。制御室を覆う壁が音を立てて上へと上がってゆき……、いや、違う。壁が上がっていったんじゃない、制御室の床がエレベーターのごとく降り始めたんだ……。

『非常事態発生、非常事態発生。侵入者に制御室を占拠されました。侵入者に制御室を占拠されました。これより工場のコントロールをGNX-04へ以降。これより侵入者を排除します』

大きな振動とともに制御室の下降が終わった。制御室の高さが先ほどのキャットウォークと同じくらいにかわり、そのキャットウォークが逆に天井へと上がってゆく。眼下のベルトコンベアが床の下へと収納され、製鉄所区画とは反対側の区画の壁、つまり人狩り部隊などの兵器達が格納されている区画の壁が音を立てて左右に開いてゆく。

そこから姿を現すのは巨大なキヤタピラを下半身に持った、巨大なロボットだった。

ビッグモスほどの大きさが無いのは救いだが、それでも高さは10m前後の巨体の前に、俺達が小人も同然なことにはなんら疑いもなく、制御室の機械越しに見上げる巨体引きつった笑みを浮かべた。

「……………なに、これ？」

「冗談やる？」

「警備ロボットか……………、戦車もなしにこのサイズの相手をする事になるとはな……………」

どことなくジブリを思わせる頭部のカメラが唸りを上げて光る。蛇の骨のような腕が持ち上げられ、その先端に光る束ねられたら銃身が目に入り、俺はラミアさん押し倒すように機械の影に転がり込んだ。

直後耳障りな金属音が連続で響き、先ほどまでラミアさんがいたところを無数の銃弾が穿つ。

「すまない！

紅蘭！」

「だ、大丈夫や！」

全員の無事を確認してほっとするのも束の間、ガトリング砲が付けられたら腕が俺達の上へと現れた。とっさにAUGを上へ向けようとするが、その手は空を切る。さっきまで自分が立っていた場所を振り返ると、あのガトリング砲の弾を受けたらしく、真つ二つに粉砕されたAUGの残骸が散らばっていた。

まずい。

そう思った直後、下から力任せに押しつけられ、長大なガトリング砲の銃身が真上へと向けられた。

頭上のガトリング砲の銃身が回転を始めるのと同時に、ラミアさんが振り上げたガトリング砲から連続でまずるフラッシュが瞬いた。

頭上から響く着弾音。大きく音を立てて何かが制御室の床に落下する。

上を見上げると先端のガトリング砲を失った腕がロボットの方へと戻ってゆく。視線を下に戻せば、今まさに俺達へと襲いかかるようにしていたガトリング砲が転がっていた。

「悠介、あれから弾を引つ張り出してくれ。見たところこいつと同規格の物みたいだからな」

超振動ナイフをガトリング砲の隙間に突き刺してこじ開けながらロボットを見て、人と言うならば腕があるべき場所から触手のように伸びる腕が無数に湧き出てくる様に絶句する。

「紅蘭、何か手はないか？」

「ちよい待ってな……………」

ラミアさんの問に答えるように紅蘭はキネマトロンを操作し、すぐに不適な笑みを浮かべて顔を上げた。

「あれがどんなもんか、うちが説明するまでも無いやろうけど、見たまんま、あれはこの工場の最終防衛システムや。あれを何とかするのは一筋縄でできるもんやない。せやけど不幸中の幸い、この制御室のコンピュータとあれは繋がってる。時間さえ貰えればうちがハッキングして停止させることが出来る……………」

「つまり、その時間を稼ぐのが俺の役目ってわけか……………」

取り出したガトリング砲の弾をラミアさんの持つガトリング砲のベルトに繋ぎ、取り外していたために破壊を免れたM203ロケット

ランチャーを手にロボットを睨みつける。

「私はこの足だ。この場で近寄ってくる奴の腕を相手するので手一杯になると思うが、大丈夫か？」

あの腕一体何本あるんだよ……………、あれの相手とか相当きついだろ……………。けどこの状況、やらなきゃやられるんだよな……………。

「大丈夫だ、任せてくれ。」

それに、時間稼ぎと言わずに、倒してしまってもいいんだろ？」

格好付けました。美女二人に頼まれてるんだ、格好くらいつけたって罰は当たらないだろ。

それにしても、一度は言ってみたいセリフランキングでトップだよねこれきつと。

「……………ふ、そうだな。あれを倒してくれると言うならそれにしましたことはないな」

「……………ふふふふ、これはうちと悠介はんどっちが速いか勝負やな」

背中越しにみた二人は俺の台詞に最初こそ啞然としていたものの、すぐに不適な笑みを浮かべてそう返してくれた。

再びロボットに向き直れば、いくつかの腕がこちらに銃口を向けようとしているところだった。もう一度二人に顔を向けて頷き、俺は制御室からロボットの下半身に向けて飛び降りた。

ロボットの下半身、車で言えばボンネット、ゲッター3で言えばジヤガー号の上の部分に着地した俺は、着地の勢いを殺すことなく前へと体を投げ出し、前周り受け身の要領で転がり、そのまま立ち上がった走り出した。俺が着地した場所に銃弾が雨霰と降り注ぐが、俺はすでにそこにはいない。俺を追いかけて動こうとするガトリング砲に向けて榴弾を放つ。榴弾はガトリング砲には命中しなかったが、それを支える腕に命中し爆発を起こす。俺の行く手に落ちてきたガトリング砲を跳んでかわし、M203ロケットランチャーに次の弾を装填する。

俺が向かう先は腕の付け根の下。あの腕が榴弾で破壊できることはわかった。ならばあの腕を根こそぎ奪わせてもらう！

キヤタピラの傍へ差し掛かった時、そのキヤタピラが音を立てて動き始めた。

「ぬぁ！」

揺れる足下に足を掬われ、ロボットの upper を転げてゆく。ロボットがどのように動いたのかはわからないが、左のキヤタピラの方へと転がされた俺は、獣のように四肢を踏ん張らせぎりぎりのところでキヤタピラの中へと転落することを免れた。背負ったリュックから無造作に引っ張り出した手榴弾のピンを引き抜き、数個の手榴弾をキヤタピラへと放り込む。手榴弾が爆発する前に倒れた拍子に取り落としたM203ロケットランチャーへと駆け寄り、拾い上げるのと同時に手榴弾が爆発した。

「おまけだ！」

振り向きざまにトリガーを引き、煙が上がるキヤタピラへ榴弾が吸い込まれ、爆発。これで左のキヤタピラは動きを止め、手早く次弾を装填して再びロボットの腕付け根に向かって走る。

腕の下へと潜り込みなら上へと視線を上げ、血の気が引く音を聞いた。ガトリング砲の銃口と目があった。

回転する銃身。

回避しろ。

そう思いながらも俺はすでに地を蹴り宙に身体を舞わせている最中。今更方向を変えることなどできるはずがない。

迎撃しろ。

何で？ラミアさんから借りたベビーイーグルは懐の中。たとえ手にしていたとしても数発の銃弾であれを止めることは不可能だ。

ならばM203ロケットランチャーは？もつとまずい。今の状況ロケットランチャーを撃つてもほとんど飛ぶ前に撃ち落とされる。そうすれば至近距離の爆発で俺が死ぬ。

万事休す。

くそ……………。

俺の内で悪態をついたのとほぼ同時に、俺に狙いを付けていたガトリング砲が爆発した。

何が起きたのか？着地した俺は腕の付け根へと榴弾を放つ。着弾を確認することなく背後、制御室を見上げると、ガトリング砲を近づいてくる腕へと放つラミアさんと目があった。

あんなこと言っておいて手を煩わせちゃったな。

地を蹴りその場を離れながら腕の付け根へともう一発榴弾を放つ。盛大な爆音を轟かせ、幾つもある触手の如き腕の半数が根元を吹き飛ばされ、力なく重力に従って落ちてゆく。

「ぬお！」

とっさに身体を前に投げ出し、転げた場所を銃弾が穿つ。ロボットの中から姿を現したのは左右に一つずつ機関銃を備えた、対人ホールと呼ばれる機械モンスターだ。それが四体。

「おいおい、モンスター内蔵ロボットかよ……………」

右手で引き抜いたベビーイーグルを最も近い場所にいた対人ホールへと放つ。

装甲を持たず内部がむき出しになったこのモンスターの構造は、銃弾で容易く倒せるように見えてそうでもない。装甲を持つ機械モンスターは、最初こそその装甲を撃ち抜ける威力が必要になるが、装甲を打ち抜き威力が落ちた銃弾は、内部で跳弾を繰り返す重要なパーツに傷を付ける、または破壊する可能性がある。しかしこいつらの様に装甲を持たない連中は内部での跳弾がない分、重要なパーツが傷つく可能性が減っているのである。

放たれた・40S&W弾は、幾つかのコードを引きちぎって背後へと貫通していった。この手の連中に銃弾では効果が薄いことを再認識し、少しでも速く敵に近づくために地を蹴った。片腕で顔を庇いながら強引に突っ込む。防弾ジャケットの上から体を叩く銃弾の痛

みに歯を食いしばって耐え、先に銃弾を食らわせた対人ホールへ殴りかかった。

「パイナップルは好きか？嫌いでも好き嫌いせず味わいやがれ！！」
むき出しのコードが千切れたところから手つき差し、ピンを抜いたパイナップル - Mk2 手榴弾を内部に置き去りにして手を引き抜き、転げるように別の対人ホールの背後に隠れる。

内部で手榴弾が爆発した対人ホールは傍にいた二体の対人ホールを巻き添えに爆散した。

ホルスターからベビーイーグルを引き抜き、二丁の機関銃の死角にいた俺は立ち上がるのと同時にカメラなどの収められたら頭部らしき部位に銃口を押し付けた。幾ら内部で跳弾をしないからといって、こうやって重要な部位に直接突きつけてやれば、一発でも十分に倒しきれぬ。

トリガーを引き、対人ホールの中枢を破壊した弾丸が貫通してゆく。カメラアイから光が消え、対人ホールは機能を停止した。現れた全ての対人ホールを破壊し、息を切らしながら40mm擲榴弾の残りを確認しM203ロケットランチャーに装填する。

「残り三発か……………」

上を見上げれば先端のガトリング砲を失った触手が残り半数と言ったところ。理由はわからないがすべての触手が一斉に動くことがないのが幸いか……………。
先に半数を落とした左の束にロケットランチャーを向けトリガーを引こうとし、ちょうどそれを遮るように新たな対人ホールが現れる。

「また四体……………。先に出た奴と位置が対象ってことは、他にも出る場所を予測するのは簡単だな」

M203ロケットランチャーをベルトのフックに引っ掛け、超振動ナイフを引き抜いて今しがた奴らをほふったパイナップルを取り出した。

「おかわりが欲しいなら、食わせてやるさ……………！」

最初の銃撃を横っ飛びに転がってかわし、弾幕が途切れたところで一気に走り寄る。真ん中の一体に超振動ナイフを突き刺し、コードを切断。後は先と同じようにパイナップルをねじ込み、爆散させる。今度は運良くもその一発でお仲間の破片を食らった四体目も機能を停止した。

フックにかけていたM203ロケットランチャーを引き抜き、対人ホールが出てきていない場所めがけてトリガーを引く。爆風を対人ホールの影でやり過ぎし、ぽっかりと空いた穴の中にたった一つ持ってきていたガスハンドグレネードを放り込む。

対人ホールと対人ホールの間には身体を伏せ、ガスハンドグレネードが爆発。爆発はロボットの身を駆け巡り、内部で連鎖して何かが爆発し出口へと辿りついた爆炎が噴水のように火柱をあげる。その数は実に一二本。俺が倒した八体の対人ホールが出てきた穴と、内部で出番を待っていた四体の対人ホールが格納されていた穴から立ち上った火柱が収まり、荒い息を吐きながらM203ロケットランチャーに40mm擲榴弾を装填する。

残る二発の擲榴弾を左右の束めがけて放ち、左の残りと右の三分の二を吹き飛ばした。

残ったガトリング砲をラミアさんが潰し、ロボットの攻撃手段の全てを奪うことに成功したのだ。

「は、はは………………。本当に、時間を稼ぐどころか無力化しちまったよ」

リュックに手を突っ込み確認すると、手榴弾も底をついている。つまり俺に残る攻撃手段はラミアさんから借りたベビーイーグルのみ。ギリギリの勝利だ。

「だめだ、しばらく動けそうにない……………」

その場に座り込み、荒らげた呼吸を整えようと息を吸い込み、目の前のロボットの上半身が割れた。

正確には胸元の装甲が観音開きの扉のように開いたのだ。そして目の前に広がる光景に、俺は深く吸い込んだ酸素を吐くことも忘れて目を丸くする。

それも仕方ないだろう、開いた胸元の装甲の下には、いったい何門あるのか数えることすら馬鹿らしく思えるほどのミサイルランチャーが敷き詰められていたのだから。

どう考えても屋内で使う装備じゃないだろ……………。

万事休す（後書き）

お爺ちゃんが遺してくれた別荘に車で三時間かけて行ったのに、鍵を自宅に忘れて帰宅。この連休に行くのはもう止めよう

双鬼・無双

目の前に広がるミサイルの壁ともいえる光景に、終わったと思いき中力を切らしてしまっていた俺は完全にパニック状態に陥ってしまった。

これだけのミサイルが発射されたらどうなる？

もちろん俺達は工場ごとお陀仏だ。それをかわす手段は無いか辺りを見回し、先ほど対人ホールを倒すために空けた穴が目に残る。

あれの中に跳び込めば何とかなるだろうか？

いや、いつそのことベビーイーグルでミサイルを撃ち落とせば……、無理どう考えても弾が足りないし撃った瞬間に吹き飛ぶ。穴に隠れても擲榴弾一発で穴の開く装甲だ、あの数のミサイルの爆発で結局お陀仏だ。

万事休す。

ああ、元の世界に帰りたいかったなあ。ていうか童貞のまま生涯を終えることになるとは。こんななら酒場の姉ちゃんに誘われたときやっちまえばよかった。いやいつそ今からでも、ついていたる前にミサイルで死ぬし………！

一分ほど頭を抱えて悶絶している内にあることに気づいた。

「あれ？まだ生きてる？」

ミサイルを発射するには十分すぎるほどの時間が経ったにも限らず生きていることに首を傾げて顔を上げると、そこには依然としてミ

サイルの壁がそびえ立っている。そびえ立っているのだが……………。

「……………止まってる？」

ぴくりとも動かないロボットに首を傾げ、同時に今までしていた駆動音も止まっていることに気づく。

もしやと制御室を見上げてみると、ちょうど手前に置かれたコンピューターの影から紅蘭が現れ笑顔で親指を立てながら言った。

「ギリギリセーフ、やな」

つまり、彼女のハッキングが間に合った。そう言うことか……………。全身の力が一気に抜けてその場に倒れる。背中から倒れたためにちよつと痛かったが、これも生きているから感じる痛みかと笑う。

「助かった……………」

制御室のコントロールを奪取した後、機械モンスターは一体の例外も無く機能を停止し、俺達はようやく倉庫へと辿りつくことができた。途中何度かゾンビの群れと遭遇したりはしたが、機械モンスターばかりであり活躍しなかったが故に弾が残りまくったベネリM3スーパ―90がここぞとばかり威力を発揮し、何ら苦勞することは無かった。

「ほな、開けるで」

紅蘭が壁に取り付けられたコンソールを叩くと、倉庫のシャッターが音を立てて上がってゆく。完全にシャッターが開くと、倉庫内の照明が一斉に明かりを灯し、暗闇に沈んでいた倉庫内が照らし出される。

「わお……」

倉庫内にずらりと並んだ棚の列に思わず声が漏れる。この中から目当てのものを探し出すとしたら、いったいどれくらい時間がかかるのだろうか？

「この中から探すの？」

ちよつとばかりうんざりといった口調になってしまつのも無理はないと思う。俺の言葉に紅蘭が苦笑しながら棚の間を歩いてゆく。

「安心しい、一応品分けはしてあるみたいやからだいたいこの場所はわかるさかい。悠介はん達は他に使える物が無いか大雑把にでええから探してくれへんか？」

「りよ〜かい」

「了解した」

紅蘭の言葉にほっとしながら倉庫の奥へと足を向ける。ラミアさんは足を怪我してるし、俺が奥に行った方がいいだろう。

一番奥の棚から適当に段ボールを引きずり出して中を見てみると、丁寧に梱包された何かのチップがずらり。一体何のチップだよ。とりあえず後で紅蘭に見てもらうことにしてその棚の段ボールを手当

たり次第開けてみることにした。結局この棚にしまわれていたのはなにかしらの電子部品ばかりで、俺には何のためのパーツかは見当もつかなかった。

次の棚は弾丸が納められているらしく、きちんとパッケージされた弾がどつさり。すでにベルトに納められたガトリング砲用の12.7×99mm NATO弾、9mmパラベラム弾、5.56 NATO弾、7.62 NATO弾、45ACP弾、.40S&W弾、これはクリムさんが喜ぶぞ356TSWだ。うわ、こっちは5.7mm弾！.50AE弾、.50S&W弾、俺達の中を使う人はいないけど、44MAGUNAM弾まで……。弾丸の博物館ができるぞ……。ああ、こっから先のダンボールはライフル弾か……。やっぱり。600ニトロ・エクスプレスと。458ウインチエスターマグナム弾もあるよ。たぶんだけど、これってツェリス力用に作ったやつだよな？ここにツェリス力あったし……。あんなものをここに弾を使いきれぬくらい扱える奴なんかいないと思うんだけど？

……、無さそうだな。手榴弾も無いか。

何はともあれ、時間かかりそうだけど弾は全部回収しよう。消耗品だからあるにこしたことはないし。

さあ、気を取り直して次の棚と……。

一つ目の倉庫を探し終えた俺達は次の倉庫へと足を運んでいた。結局光武を修理するための部品は見つからず、少々落ち込んでいる紅蘭を慰めながらそうこの中へと足を踏み入れた。こちらの倉庫はクルマの部品をしまっただけであるらしく、大砲や機銃、タイヤなどが所狭しと置かれていた。

「うわ、このエンジンでルドルフ？ジープに使ってるのよりも性能いいじゃん」

「そうやね、持って帰って取り替えたるか」

ジープのエンジン、こっちに来たときにいかれてジャンゴに取り替えたらいいいな。

うわ、こっちのユニット何？ビッグモスのよりも性能良さそうなんだけど？

棚から棚へと調べてゆき、途中でその流れがプツリと切れる。この倉庫に入った時には気付かなかったが、倉庫の奥の空間が開けているのだ。棚の間からその開けた空間へと出て見れば、入ったときに気付かなかった理由がよく分かった。その開けた空間の大半を占有するシートがかぶせられた巨大な物体。

いったい何なのかとそのシートをはぎ取った俺は啞然として言葉を失ってしまった。

「ん、悠介はん何か見つけた……ん………か？」

後ろからこれを見た紅蘭も言葉を失ってしまうのも無理はない。

そこにあっただのは、未完成なのだろう砲塔が無いが、完全新品の戦

車が鎮座していたのだから。

「なあ、これって動くのかな？」

「さ、さあ………………。取り敢えず調べて見んことに分らんわ……………」

二人で戦車を調べた結果、全くもって問題なしとなったものの、砲塔が無い戦車ではタイヤの替わりにキヤタピラを付けた装甲車だ。

「なあ、紅蘭。これどうする？」

「もちろん持って帰るで。ええこと思いついたんや、後で悠介はんにも手伝ってもらおうで」

なにやら本当に良いことを思い付いたらしく、先ほどの気落ちした雰囲気もどこへやら。嬉々として表情でそう言うのだった。

太陽の光を煌めかせ、銀線が閃く度に銃身のごとき身体を持つ巨大なバツタの脚が切りとばされ、閃光の一閃がその本体を唐竹に両断する。

紅の具足に身を包み、煌めく刃を振るう20代半ばと思わしき紅武者の背後の砂の中から巨大なサソリの尻尾が現れ、刃を振り切った

彼の背めがけて尾先の毒針を振り下ろす。

避けることのできぬタイミングでの完全な不意打ち。しかし紅き武者はそれを何でもないかのように肩越しに一瞥するだけ。今にも毒針が突き立てられようとした瞬間、横から紫色に光る何かが巻きつき、紅の武者に突き刺さらんとする尻尾の動きを止める。

紅武者はそれが当然であるかのように表情を変えず、振り向きざまに刃を一閃。切り裂かれた尻尾が体液を撒き散らしながら宙を舞い、振り向かれた刃は流れる様な動きで紅武者の足下に突き立てられる。堅い物を貫いた手応えとともに紅武者の周囲が地震の様に激しく揺れ、砂の下から巨大なサソリが姿を表した。甲羅に突き立てられる太刀にしがみつくように身体を支える紅武者を振り落とそうと巨大なサソリが暴れまわる。紅武者は振り落とされまいと四肢に力を込めてそれに耐える。

暴れる巨大サソリの眼前に紺色のコートを着た無精髭の男が跳び込んでくる。男が手元から伸びる紫色の光。先に尻尾の動きを止めた紫色の光は男の操るままに宙を舞い、紅武者に切りとばされた尻尾の先を絡め取る。

「さつさとくたばりやがれ!!」

紫光の帯が振り下ろされ、絡め取られていた毒針が本来の持ち主の頭に突き刺さる。コートの男は突き刺さった毒針を踏みつけるように蹴りを放ち、より深く毒針を突き刺した。

巨大サソリが断末魔の叫びを上げる。巨大サソリから飛び降りた紅武者はコートの男と互いの背を預け合うかのように刀を構え、コートの男も手にした紫光の帯を発する柄を手に自分達を囲む異形の存在達を睨みつける。

「またこうやってお前に背を預けて戦う日が来るとはな、左馬介！」

「ああ、このような状況でなければ再会を祝いたいところだったが………」

紅武者・明智左馬介の言葉を聞いたコートの男は嬉しそうに笑いながら彼に視線を送る。

「なに、こいつらを片付けた後に祝えば良しさ」

不適に笑うコートの男に左馬介にも自然と笑みを浮かべる。

「その通りだな。ジャックそちらは頼むぞ………」

「任せな！」

銃身を持つバッタ・キヤノンホッパーから放たれた砲弾を二手に別れて回避すると、コートの男・ジャック・ブランは耳の代わりにパラボラを付けた巨大なネズミ、パラボラットを踏み台にして跳躍し、紫色の光の鞭『鬼無双』を振るってビームハチドリを切り捨てる。着地したところを狙うロードガンナーの銃撃を砂の上を転がることで回避し、彼が着地した場所を駆け抜けてゆく敵に向けて発砲。スプリングフィールドXDから吐き出された・45ACP弾がロードガンナーの細い足に命中し、右足を根本から吹き飛ばした。砂の上に倒れようとするロードガンナーの体に鬼無双が絡みつく。ジャックが振り回すままに宙を舞うロードガンナーは、彼が踏み台にしたパラボラットへと叩きつけられ、共に息絶える。

キヤノンホッパーの砲撃を回避した左馬介は、さらに追撃で放たれた砲撃を手にした刀で切り払い、彼の背後に着弾した砲弾が二つの

砂柱を上げる。

右手から気配を感じた左馬介は、気配の主を確認することなく背後に飛び退き、突撃してきた黒い影とのすれ違いざまに刃を振るった。

「むっ……………！」

しかし振るった刀は甲高い音ともにへし折られ、彼の背後の砂に突き刺さった。

黒い影の正体は何かと振り返れば、砂に突き刺さった刃の向こうには既に方向転換を終えた黒い影の正体、黒豚ファイアがさらに仲間を引き連れ左馬介めがけて走り出していた。

このタイミングでは避けきけることは不可能と判断したか半ばで刀身を失った刀を投げ捨てると、まるで新たな武器を手に行っているかのようにその場に腰を落とし、切っ先を相手の足下に向ける構えを取る。猛然と突撃を仕掛ける黒豚ファイアが目前へと迫ったその瞬間……………。

「ふんっ……………！」

斬光が閃き、黒豚ファイアの巨大が真っ二つに切り開かれる。身体が真っ二つに切り開かれたことに気付かないのか、走り抜ける黒豚ファイアの二つに分かれた身体の間を、その血がふれるよりも速く一足で抜け、一体目の斜め後ろから突撃してきていた黒豚ファイアをすれ違いざまに一閃。さらに左馬介の姿は掻き消えるがごとく砂漠を駆ける。

キヤノンホッパーの懐へと瞬時に現れその横を駆けながらの一閃が、キヤノンホッパーの身体を上下に切り裂きそこでようやく彼の動きが止まる。

連鎖一閃。

数多の幻魔を屠ってきた必殺の斬撃。刀を失ったはずの左馬介に握られた、禍々しい装飾を施された両刃ぼ大剣『毘沙門剣』に付いた僅かな血を刃を振るって払うと、左馬介はその視線を頭上へと向ける。そこにいたのは身体を白い羽毛に覆われた鳥型のモンスターB29アホウドリ。その羽の下から投下された爆弾を視認し、その場から駆け出した。左馬介を追う様に爆炎が上がる。腰につけられたら矢筒から矢を引き抜こうと手を伸ばし、ジャックが自分の方へと走ってくるのに気付く。

「左馬介！」

「分かった！」

視線が交錯し、それだけでジャックの意図を理解した左馬介は毘沙門剣の腹を上に向けて腰を落とす。ジャックの足が毘沙門剣の腹へとかけられる。

「頼んだぞ！」

「任せろ！」

毘沙門剣が振り上げられ、その上に乗ったジャックが空高く投げ出される。

しかしそれだけではB29アホウドリに届かない。

「はっ！」

ジャックの振るう鬼無双が低い位置にいたB29アホウドリに巻き

つき、それを引き寄せるようにして彼の身体はさらに空高く舞い、上空にいるB29アホウドリを射程におさめた。鬼無双が翻り、たったの一振りですべてのB29アホウドリが切り裂かれ、重力に引かれて落ちてゆく。着地したところ彼の背後で左馬介が構え、再び互いの背を預けて敵と退治する。

「切りがないな……………」

左馬介の口から零れた言葉に頷き、そこでジャックはあることに気づいた。

「左馬介、そういえば鬼の籠手はどうした？」

共に戦ったあの日、ジャックと同じように右腕にあった鬼の籠手。それがなくなりに気づきジャックは首を傾げる。

「あの戦いの最後、信長の魂をあの鬼の籠手に封じたんだ。再び奴が解放されることがないよう、今は竜玉と鬼軍珠の力で空る場所に封印してある。」

それにジャックこそ鬼の籠手はどうしたんえだ？」

「俺か……………」

あの後ちよつと問題が起きてな、アンリを助けてそのまま消えてしまったよ。鬼の力には本当に感謝している」

喋りながらも互いの隙を庇い合い、襲いかかるモンスターを倒してゆく二人。

ジャックが敵の動きを止めれば左馬介が敵を切り、左馬介が敵の懐へと潜り込めばジャックがそれを援護する。長年の戦友同士である

かのような抜群のコンビネーションで、少しずつではあるが確実に敵の数を減らしてゆく。

「それにしても、こいつらはいったい何なんだ？
幻魔とは違うみたいだが」

「わからない。だが化け物であることには変わらないがな」

「違うない」

左馬介の言葉に苦笑し、さて如何にしてこの場を切り抜けるか。ジャックの思考がそれに移ろうとしたとき、モンスター達に異変が起きる。樹液に集まる虫達のごとくひっきりなしに現れていたモンスター達が、今度はあたかも散らされる虫達のごとく踵を返して散ってゆくのだ。

「何だったんだ、いったい……………」

脱兎のごとく逃げていったモンスターに首を傾げる。一応切り抜けることはできたかと、どこか釈然としないものを感じつつジャックは左馬介へと振り返ろうとして……………。

「ジャック、逃げるぞ！」

「な、どうした左馬介?!」

急に走り出した左馬介の後を追ってジャックも走り出す。一体何事かと走りながら後ろに視線を送り、そこに現れたありえない物に目を疑った。

「な、砂漠に鮫だと?! しかもなんだあのサイズは!!」

砂を盛り上げその中から姿を現した巨大なサメ、スナザメの存在に自然と声が大きくなる。

「左馬介、何かいい手は無いか?!」

横を走る左馬介へ尋ねつつ手持ちの武器を確認するが、鬼無双にスプリングフィールドXD、後はスタングレネードがいくつかあるだけであるの巨体にはどうにも効果は薄そうである。

「いや、さすがにあの大きさとなると……。幻魔ならばいくつかやりようはあるんだが……」

当然か、と背後を見れば徐々にスナザメが追いついてきている。追いつかれるのも時間の問題だ。一か八かあの口の中にスタングレネードを放り込んでみるか? 最悪時間を稼げるかも知れないと懐に手を伸ばし、スナザメが爆炎に包まれた。

「今度はいつたいなんだ!」

ジャックの叫びに應じるかのように、彼らの目の前にある砂丘の向こうから、一台のジープが飛び出してくる。荷台に機関銃を積んだそのジープはドリフト気味に車体を滑らせながら二人の傍に止まってみせる。

「乗れ、急げ!」

運転席に乗った庸平風の男の言葉に、二人は迷うことなく従った。二人が荷台に飛び乗ったのを確認するや否やジープは砂を巻き上げ

急発進する。背後を見れば突然の攻撃に動きを止めていたスナザメが怒りを露わに襲いかかってきた。

「く、あれに有効な武器は?!」

「戦車砲は品薄でな。積めるよう改造はしてあるが未搭載だ」

ジャックの言葉に男は軽い調子で答えながらハンドルを切る。蛇行するジープのすぐ横にスナザメの鼻先が突き込まれた。

とそこで再び砲撃がスナザメを襲った。その砲撃で失速したスナザメを突き放すかのようにジープが加速する。

「仲間がいるのか？」

「ご名答、あんなデカ物の相手はそいつらの担当でね。俺達はとにかく奴から離れるだけさ」

男の言葉を証明するように砂丘の頂に二つの影が現れる。片やスナザメとためを張る巨大な影と、その半分もないいびつな影。

「あれは……?」

「デカブツの、担当者さ」

『よっしゃ、命中や!』

通信機越しに聞こえる紅蘭の声に苦笑しながら、ディスプレイの端に移る機体を見る。あの工場で見つけた車体の上に存在するドラム缶のような人型。昔やったゲームでは最後までこれを使ってたなあ、と思いながら見るのは、砲塔の代わりに光武を取り付けたその名も『光武戦車（紅蘭命名）』だ。

あの工場からあの車体を持ち帰って教えられたらいいこと、それは修理用のパーツが手に入らなかった光武をあの車体に取り付けることだった。幸いなことに光武は修理が終わっていないとはいえそれは足まわりだけのこと。動けない足の代わりに戦車をつけるという発想は以前にも同じことをしたことがあるからだとか。

半ば呆れるクリムをよそに、俺は彼女を手伝って光武戦車を完成させた。しかもこの光武戦車、エンジンを車体に一機、光武にも一機と合計二機のダブルエンジンという高性能機に仕上がってしまった。というのだから世の中わからない。

右腕を改造して取り付けられた95mmスパルクキャノンが轟音を上げてスナザメに砲撃する。

「例の二人組はグリムが回収した。私達も前にでるぞ」

「Aye aye, ma'am」

後部座席で火器管制を行っているラムリアさん（彼女の方が射撃能力が高いんですもの）の指示に従いビッグモスを前進させる。彼女に操られ放たれる砲弾は、面白いようにスナザメに命中し、確実にそ

の生命力を奪ってゆく。ちなみに、こんな時真っ先に飛び出しているアイラはラミアさんの手で拘束されてすぐ後ろで目を回していたりする。

「クリーム達も安全圏に避難できたな。悠介、スナザメも弱っている。今の内にあれを試しておけ」

「え、あれをやるんですか？」

「あれに何かしら問題があったとしても、今の状態ならどうとでもなる。今の内に試せることは試しておけ」

まあ、たしかにスナザメも弱ってるみたいだしな。

「Aye aye , ma'am」

前進するビッグモスを加速させながら、手元のレバーを押し込んでゆく。

「ビッグモス、アグレッシブ・ビーストモード！」

もうこのところはゲームのノリで叫ぶ。ビッグモスはアグレッシブ・ビーストモードへと変形し、ノーマルモードで加速した勢いをそのままにスナザメへと突進し、二本の牙をその巨体へと突き刺した。

「どっっい、しょーっつっ！」

気合い一発、牙を突き刺したスナザメをそのままに砂の中から力任せに引きずり出し、そのまま勢いに任せて投げ飛ばした。

『お、いい位置に投げてくれたやないか。とどめの一発、食らって
みい!』

空中へと投げ出されたスナザメに、光武戦車の左肩に付けられたミ
サイルランチャーからミサイルが発射される。

発射された九発のミサイルは違うことなくスナザメに命中し、砂漠
の上にたたき落とされたときには完全に絶命していた。

『悪いなあ、美味しいところもろてしもうて』

「いやいや、一応アグレッシブ・ビーストモードの調子も見れたし、
別にいいよ」

ビッグモスをノーマルモードへと戻し、光武戦車とジープの元へと
戻ってゆく。

さて、あの二人組がいったい何者なのか。あの基地に一度戻ること
にして正解だったかも知れないな……………。

「危ないところを助けてもらったな。」

俺はフランス対外安全保障総管理局（DGSE）所属、ジャック・
ブランだ。

こっちは俺の戦友の……………」

「明智左馬介秀満だ。危ないところを助けてもらって感謝している」

場所はビッグモスのコクピット。助けた二人を招き入れて自己紹介

をしているんだけど……、どう見ても現代人などフランス人と戦国の世から抜け出てきたみたいな侍のコンビって、なんかシュールな……。しかも互いのことをなんの違和感もなく戦友って言い切ってるし……。

「さて、自己紹介も終わったところで、お二人さん自分らがどんな状況におかれとるか、どの辺まで把握しとります？」

「いや、さっぱりだ。覚えている限りでは、俺は自宅に帰る途中立っただけなんだが、気付いてみればこの砂漠だ。以前パリから日本の戦国時代にタイムスリップしたことはあるが、その時とは何もかも違うように感じられるな」

「………なんですと？」

「俺も同様だ。以前未来のパリに時間を越えた時は幻魔の仕業だった、あの時は跳ばされる前後ははつきりしていたが、今回は気が付けば全てが終わっていた。だいいち、信長を封印しギルデンスタンも倒した今幻魔にあの『時のねじれ装置』を作ることができると思えん」

「………幻魔？フランス人と侍………、もしかしてこの

二人って、『鬼武者3』の？」

鬼武者シリーズはプレイしてないから詳しくはわからないけど、3はフランスの俳優が出演とか何とかでけっこう話題になってたから多少は知ってるけど……。またゲームの世界からですか。

「『時のねじれ装置』？ちゅうかお二人はどの時代から来なすったんでっか？」

「俺は21世紀、2006年のパリだ」

「天正一三年、ある山寺に身を隠している最中だった」

「天正一三年ちゆうたら、たしか豊臣秀吉が関白になった年やったっけ？」

「いや、俺歴史ってあまり詳しくなくて……………」

歴史の授業は赤点ばかりだったしなあ。

「とりあえず二人がこの世界について全く把握できてないことが分かったんだし、まずはそちの説明からだな。」

「そしたら、出来ればいいんだが、そちらのことも教えてくれないか？とくに『時のねじれ装置』って物のこととかな」

「ああ、それぐらいおやすいご用だ。助けてもらった礼もあるしな」

こうしてこの世界について説明をする事になったんだけど、いや左馬介さん戦国時代から来たにしては理解力高すぎない？なんかいろいろとんでもな体験してきたらしいけどさ。

双鬼・無双（後書き）

明智左馬介秀満

鬼武者及び鬼武者3の主人公。3後、信長を封印した鬼の籠手を竜玉と鬼軍珠の力で封印しているため、右腕に鬼の籠手は着けてません。ただしある程度鬼の力を操れるようにはなっているため、自在に毘沙門剣を呼び出すことが可能。

ジャック・ブラン

鬼武者3の主人公の一人。ゲームの作中ですでに鬼の籠手を失っているため、当然籠手は無し。使用武器の『鬼無双』は鬼の籠手とは無関係な代物っぽいので、籠手を失った後も手元に残っているという設定。

作者はジャックをこの作品に出すために3を一周後、鬼無双の外見を知るためにさらにもう一周してきました。鬼武者3、おもしろいね。

光武戦車

GBカラー専用ソフト、サクラ対戦GB2サンダーボルト作戦で登場した機体に勝手に命名したもの。相当昔のソフトで、プレイしたのも同様に遙か過去。内容はうる覚えだがこのキャタピラ光武を最後まで使い続けたことだけは覚えてる。ある意味紅蘭をこの世界に登場させた理由の機体。

異世界への転移

基地へと向かうビッグモスのコクピット。それぞれがそれぞれのクルマに戻った後、ここには四人の人間が空間を共にしていた。一人はもちろん俺。基地への案内役を申し出た俺がビッグモスで一団の先頭を走っている。で、もう一人がラミアさん。俺らの中で唯一巨大な人型兵器の操縦経験のある彼女が、教官役として一緒に乗っている。ここまで来る道中も、ビッグモスのような兵器の運用方法についていろいろと、そういういろいろとご教授されまして、はい………。ちよつと恐かったのはここだけの秘密で………。

「悠介、どうかしたか？」

「いえなにも………！」

で残る二人は左馬介さんとジャックさん。紅蘭の光武戦車は一人乗り、クリムさんのジープは基本二人乗りで今はアイラが乗っているためだ。アイラがジープの方に乗っているのは、先のスナザメ戦で戦えなかったことに相当ご立腹のようで、次は絶対に戦うとすぐに降りれるジープに張り付いて動かなくなっていたりする。なんて言うか、ゲームのエイラと比べて幼いところがあるよな、彼女って。

「そつだジャック。アンリとミシエルはうまくやっているのか？」

「ああ、今じゃ時々俺の方が除け者にされるくらい仲良くやっている。これもみんな、おまえ達のおかげだ左馬介」

「俺は何もしていない。やったのは俺よりも阿児の方だ」

「そうか、だがお前がいてくれたから、二人はあのパリで生き延びることができた。本当に感謝している」

「それはお互い様だ。鬼軍珠の件にしる海底の遺跡の件にしる、俺一人では切り抜けることは出来なかっただろう」

「お互い様、か。ふ、そうだな。

それじゃ今回もお互い力を合わせようか……………!!」

「おう！」

がっしりと握手を交わす二人の様子をこっそりと観察しつつ、友情に国境はないんだなあとか思ってみたりする。

とりあえず基地についたら格納庫から調べるか……………。たしかあそこには組立前のバイクのパーツがあった気がするし。

バイクに乗って毘沙門剣を振り回す明智左馬介さんの図が脳裏を掠め、そのシニールな絵に渴いた笑みを浮かべたのはどうでもいい話である。

「ところでジャックさん、今話に出てきた二人はご家族で？」

「ああ、ミシエルは先に話した幻魔の事件の後に籍を入れた今の妻でな。アンリは前妻との間にできた息子で、幻魔の事件前はあまりうまくいってなかったんだが……………。左馬介達のおかげで、今では血の繋がった母子のようだよ」

ジャックさんが懐から取り出した何かをじっと見つめる。ミシエルさんとアンリ君の写真かな？

基地へと向かう道中、こんな些細な会話を交わしながら時間は過ぎ

ていった。

「あれか……………」

「ええ、あれが俺が目覚ました時にいた基地です」

ビッグモスが進む先、望遠カメラでとらえられ、ディスプレイに映された基地。それを見たラミアさんの呟くような言葉に頷いた。ビッグモスが基地に近づくと、ディスプレイの中で大きくなっていくその異様に、俺は知らず息を呑んでいた。基地を出立した一月前のあの日は、進む先たる前ばかりを見ていたためこうやって全体を見るのは初めてだったりする。

『さすがに大きいなあ。山をくり抜いて造られるといふより、基地を造るために山を築いたつちゆう感じやな』

ビッグモスから送られた映像を見た紅蘭の言葉に、俺は苦笑しながら頷いた。

なにせ砂漠の中に丸裸の山がポツンと存在するのだ。おまけに所々には金属の光沢が太陽の光を反射し、明らかに人工物にしか見えないう物が生えているのだ。

砂漠の中に山ごと造りましたと言われても頷けてしまおうと言うもの。

「山上に城を造るのならば分かるが……………。山の中にか、凄いものだな」

「鬼の一族なんかは海底に遺跡を造っていたし、幻魔の連中は飛行可能な城まで建造したことを考えるとそこまで凄いことには思えんが……………、実際に見てみれば凄いことに変わりはないか……………」

戦国時代に生きてきた左馬介さんの受けたカルチャーショックはなんとなく理解できる。けどジャックさん、それマジっすか？海底遺跡に空飛ぶお城て……………。

「おお あれか！ あの山か ユウ 言ったた キチ あるのは！」

「アイラ、頼むから耳元で大きな声を出すのは止めてくれ」

「大きい声 出さない 聞こえない。 ユウ達 ビッグモス 中。
声 小さい ダメ 聞こえない。違うか？」

「ああ、だからなアイラ。このマイクがお前や俺の声を拾って、悠介達のところに届けてくれるから大丈夫だって」

「拾う？ 声 拾えるか？ 凄い！ アイラ 声 持ってみたい！」

「いやだからそういう意味じゃなくてだな……………」

「違うのか？ 今 クリム 拾う 言った」

さすがは原始人。ジェネレーションギャップは左馬介さんの比じゃないな。

通信越しに苦勞するクリムさんの様子を楽しみながら、ようやく基地へと辿り着いた。望遠レンズで確認してから辿りつくまでにさら

に一時間もかかったというのだからこの基地の巨大さがよく分かる
と言うもの。わずか一ヶ月の間、訓練（自称）の片手間の探索です
べて調べ終わってると思うのはどう考えても思い上がりだよな。ビ
ッグモスからの遠隔操作で格納庫へのシャッター（核攻撃にも耐え
られそうな分厚い代物）を開き、三台のクルマが格納庫へと入って
ゆき、再びシャッターが閉じられ適当な場所で俺達もクルマを止め
る。

「ふうん、悠介はんはこの格納庫で目を覚ましたんやね？」

キネマトロンを手に光武戦車から降りてきた紅蘭の言葉に頷き、あ
の時自分が倒れていた場所に立って辺りを見回した。

「あの時俺は、この場所で目を覚ました。いつたい自分がどんな状
況に置かれているのかさっぱりわからなかったっけ」

「凄い設備だ……。これだけの物が長年放置され続けてきたとはな

「祐介の話じゃ死体の類は一切無かったそうだな」

「そうなんですけど、一ヶ月間すべてをここの探索に使ったわけじ
やないし、俺一人だったから全部を調べ切れてはいないですね、た
ぶん」

ジープから降りたクリムさんが手にしたベネリM3スーパー90を
腰元のラックに収めるのを見て苦笑しながらそう言った。

「つまりモンスターがいる可能性も0ではないというわけか……。
悠介がここを去ってから進入した可能性もあることだしな」

「だな。とりあえず探索は二手に分かれて行つか。
組み合わせは俺、悠介に左馬介。
ジャック、ラミア、紅蘭にアイラだ」

クリムさんの言葉に頷くがまず先にやるのは基地の探索ではなく、以前俺がここにいたときに見つけたクルマ用のパーツが置かれた倉庫の探索である。ジープ用の戦車砲など、前は持ち出せなかった物などがけっこうな量あるのだ。

その日、夜遅くまで倉庫をひっくり返して回った成果はジープに積んだ100mmキャノン、光武戦車の両肩に装備された六連ミサイルポッド。発見したパーツから組み立てられたら二台のバイク。このバイクは片方をラミアさんが、もう片方はサイドカーを付けてジャックさんと左馬介さんが乗ることになったんだけど、なんで一つの基地、しかもその立つた一つの倉庫から出てきたパーツを組み立てたのに、全く別のバイクが組み上がったのだろうか？ジャックさん達が乗るバイクは3のチョッパーそっくりだが、ラミアさんのバイクは電童でベガさんが乗ってたバイクそっくりだな……………」

「さすがに他にも積んでいこうとすると積載量がな……………」

目の前に並べられた戦車用の装備（戦車砲や機銃、S-E）の数々にため息をつく。

光武戦車やジープの積載量はそこまで多くない。必要最低限に絞らないと装甲が犠牲になってしまう。ビッグモスはどうかといえば、確かに積載量は他の二台とは比べ物にならないが、先の二台の積載量の関係上水や食料、銃火器その弾薬等々のほぼすべてに加え浄水機などの大型装置をビッグモスに積んでいるため、こちらもちからでそんなに積載量に余裕がなかったりする。バイクにしてみても、ここにあるのはビッグモスサイズのクルマに搭載するような物ばかり。たとえ積めるようにバイクに穴を空けたたとえ、搭載できる大

きさではない。

「仕方ないな、弾薬などを置いていくわけにもいかないんだ。ここで見つけた戦車砲は置いていくほか無いか」

クリムさんが残念そうにため息をつきながら砲弾をそれぞれのクルマに載せ始め、男衆はそれに続く。

「では、私たちで他を見てくる。倉庫の状態などを見ても、悠介がここを出てモンスターが進入した形跡もない。格納庫周辺の区画ならば早々危険もあるまい」

「ほな、うちの光武もよろしゅうな」

ラミアさんに連れられては女性陣が倉庫を去ってゆくの見送り、俺は言われたとおり光武戦車に先のスナザメ戦で消費した砲弾の補充を行う。光武戦車の後部にある弾薬庫を開き順番に砲弾を装填していくのだ。ビッグモスの方はこの設備を利用し、上部の補給用ハッチを開いてそこから次々と装填していけばすぐに完了する。ジープの方で左馬介さんがクリムさんに教わりながら俺と同じように砲弾の補充を行っている。クドいようだけど、やっぱり侍と砲弾とかシニールだよなあ。

「悠介、補充は終わったか？」

「今終わりましたよ」

弾薬庫の扉を閉め、キャットウォークから梯子を伝って降りてくるジャックさんの元へと向かった。

どうしたのかと訪ねようとしたそのとき、つい今し方ラミアさん達

が出て行った扉が開かれた。

格納庫にいた全員の視線が扉へと注がれ、その視線を一身に受け止めることとなった紅蘭は、どことなくばつの悪そうな表情で苦笑しながら頬を掻いた。

「ああ、ただいま……」

「紅蘭？戻ってくるのがやたらと早い気がするんだけど、何か問題でもあったの？」

「問題は無かったんやけど、別の物があつたと言つか……」

要領の得ない言葉にジャックさんと顔を見合わせ、再び紅蘭の方を向き、そこで彼女の後ろに誰かがいることに気が付いた。ラミアさんやアイラと格納庫を出て行ったんだからそれは当然なんだけど、問題はその誰かが二人のどちらかにしてはやたらと小さいような……。

「まあ、見てもらった方が早いさかい。ちと入って来とくれんか？」

「了解や」

あれ？

聞き慣れない声で喋られた関西弁に首を傾げる。そしてそろそろとそつぞろそろと格納庫に入ってくる四つの影に俺はポカンと開いた口を閉じることができなかつた。

格納庫に入ってきた四人。最初に入ってきたのは小学生高学年から中学生と思われるどこかの制服を着た少女達だった。髪を二つのお

団子にしたその少女たちは双子らしく見た目は瓜二つ。ほんとした雰囲気を持つ少女に、警戒しているらしくこちらをにらんでいる少女。うん、容姿がかわいいからいくら睨まれても微笑ましくしか見えない。

そんな少女の後ろから格納庫に入ってきたのは……………メイド？耳に何かの機械らしき物をつけた青髪の、二十歳手前ぐらいのメイド服に身を包んだ女性だ。

そして最後に入ってきたのは、こりやまた……………。黄色と黒のストライプの服、と言うよりも水着？にマントと袖が一体化したような物を上に羽織り……………、あれてつて羽織つてるといつてもいいのか？そんな格好に短パンの上に幅の広い锚付きベルトを身体の前で交差させて巻き、両腰に工具を入れたポシェットを下げた十代後半らしい少女だった。

「彼女らは？」

「転移者だ。ここ一月の間に転移してきたらしい」

「うち姫百合珊瑚いうねん。こっちが妹の瑠璃ちゃんや、よろしくな〜。

ほら瑠璃ちゃんもあいさつしよな〜」

「……………姫百合瑠璃。」

「つ言うとくねんけどなあ、うちのさんちゃんに手え出したらただじゃおかへんねんかな！」

なんつうか敵意丸出したな。心配しなくとも中学生に手なんか出さないうって……………。

「瑠璃ちゃん、これからお世話になる人に向かってそんな口聞いたらめえやろ」

「ふう、さんちゃんそやかて……………」

子供特有の独占欲かね。なんというか微笑ましい限りで……………。

「なはは、瑠璃ちゃんもそう言わんと。誰も手え出したりせえへん
つて」

まあまあ、と二人の間に入るのは水着同然の格好をした少女だった。
ていつか関西弁多いな……………。紅蘭を含めればもう四人目だぞ……
……………。

「あ、うちは李曼成や。よろしゅうな」

李？

「紅蘭の親戚？姓が李で関西弁つて……………」

「なんでやねん。関西弁は関係あらへんやろ。それに中国にはどれ
だけ人がいると思うてんねん、ウチと同じ姓の人なら五万とおるわ」

ですよね？しかし彼女、どこかで見たことがあるような……………。

「ん？李曼成？」

「左馬介、どうした？」

聞き覚えがあるのか、左馬介さんが顎に手を当て首を傾げる。いや
でも左馬介さんが覚えあるって……………、彼女どう考えても最近の
女性って格好なんだけど？

「いや……………」。
間違っていたらすまない、曼成というのは字で名は典と言うのでは？」

「お、よくわかりはったな。お察しのとおり、姓を李、名を典、字を曼成や」

「……………」やはりか」

「知っているのか雷で……………」、左馬介。

……………俺は今なんと言おうとしたんだ？」

訪ねつつも自身が言いかけた言葉に首を傾げるジャックさんをよそに、左馬介さんは小さく頷き言葉を続けた。

「にわかには信じられん話ではあるが……………」、おそらく彼女は俺がいた時代よりも遙かに過去のそれこそ漢王朝の末期、三国志の物語で知られる三国の一つ、魏の武将の一人だ」

なんですと？

「いやいや、俺も詳しいわけじゃないけど、三国志に女性の武将なんていました？」

西遊記とか水滸伝なら読んだんだけど、三国志は読んでないんだよなあ。それでも水滸伝にしたって女性の英傑なんて二、三人しかいなかったし……………。あ、でも呉に弓腰姫なんて呼ばれる人がいたっけ？あれ？でもやっぱり武将だっけ？駄目だ、全然思い出せん。「少なくとも三国志において曹魏に仕えた人は男勝りやったはずやで？」

俺に同意するように紅蘭が言葉を続ける。ジャックさんやクリムさん達は三国志を知らぬ・または知っていても名前だけらしく俺達の言葉に黙って耳を傾けている。

「そうなのだがな……………。以前未来にとばされたおりにアンリ・ジャックの息子なのだが、彼に俺のいた時代について調べて貰ったんだが、どうやら事実とは違って伝えられていることが多々あったんだ。それを考えればその可能性も大いにあり得るかと思っただが……………?」

「うん、左馬介はんの言うとおり。ウチは曹魏は曹猛徳様に仕えとる。

それにしてもこちらの歴史じゃウチは男か……………。北郷隊長の言つつた通りやな」

左馬介さんの言葉を肯定し、一人うんうんと頷く李典だけど……………、
『ほんごう』って誰?仮面のバイク乗り一号?

「ああ、北郷隊長言うんわな……………」

李典の話では彼女の国、魏には天の国から舞い降りた天の御遣いというのがあるらしく、その御遣いのいた天の国に伝わる歴史において同姓同名で性別だけが違う武将がいたとか……………。

ここまで聞いておれも一つ思い出したことがある。アイラやクリムさん達は俺の世界にあるゲームにおいてその姿等を見ることが出来る。そして彼女の言う世界についても心当たりがあったのだ。『恋姫+夢想』頭に真とかついた続編もあるらしいが、俺は初代版しかやっていないため彼女がその登場人物かはわからないが、御遣いに性別が違う武将達と聞けばその可能性もおおいにあり得るのではないだろうか。

「……………本当に多くの世界からこの世界へと転移してきているらしいな。今の時点でもすでに八つの世界から転移してきているようだしな」

どことなくラムミアさんの言葉に力が感じられないのは、やはりシャドウミラーのことだろうか？今彼女が何を思っているのかはわからないが、此度の現象について何かしら考えさせられることもあるのだろう。

「それでは遅くなつてしまいましたが……………、私はイルファと申します。正式名称 H M X - 17 a、瑠璃様付きのメイドロボです」

1、2、3、……………ええええええええええ！

「え、ロボット？」

「マジかいな、どこからどう見ても普通の人間にしか見えへんて？！」

俺と紅蘭が驚愕の声を上げ、クリムさんとジャックさんも驚きに目を見開いてイルファさんを見つめ、対するイルファさんはどことなく気恥ずかしげに苦笑している。いやそれだけ表情豊でロボットつて、え、なに？もしかして彼女たち二二世紀から来たの？

この場で全く違う反応を示すのはアイラ、ラムミアさん、左馬介さんと、元から一緒だった三人のみ。思い返してみればラムミアさんも人造人間だからそう驚くことじゃないのかもしれない。アイラや左馬介さんについてはロボットという物についてよく分かっているのだろう。

「はい。私は珊瑚様に造っていただいた正真正銘、ロボットなんです」

ほらこれを見てくださいと指差す耳元のカバー。あれって飾りじゃないんだ……………。

色々と驚きに満ちた自己紹介を終え、彼女達がいつ頃からここにいたのか？など諸々の話を終えたころ、太陽はすでに地平の果てに沈んだ後だった。

彼女達がこの世界に跳ばされてきたのは、李典が半月ほど前で、瑠璃ちゃん達がそれからさらに半月前。俺がこの世界に来たのが二ヶ月から三ヶ月ほど前であり、他のみんなの転移時期と一緒に考えると最低でも半月に一度のペースで転移が行われていることになる。

左馬介さん達だつてつい先ほど転移してきたんだし、この現象は続いているものと考えていい。こうなると元の世界に帰る方法だけでなく、根本の原因を探す方が先決かもしれないな。

結局話が終わった後、既に安全が確認されている瑠璃ちゃん達が生活スペースとしていた区画で男女に分かれて夜を明かし、翌日から基地の探索を行うことになった。

「閣下、偵察隊より報告です。現地点より進路方向上10kmの地点にオアシスを発見とのこと。いかがなさいますか？」

野バスを改造して造られた司令部さながらの空間、数台のパソコンが並べられたら席に座る青年に左頬に傷を持つ少年が直立不動の構えで報告すると、男は人差し指で眼鏡の位置を直しながら静かに頷いた。

「ふむ、では本日はそこにキャンプを張るとしよう。皆にもそう伝えてくれ。」

偵察隊にはそのままオアシスの警護を。それと水質調査班に護衛をつけてオアシスに先行するよう通達を」

「了解しました」

少年は直立不動のまま敬礼をすると、カーテンで仕切られた野バスの前部分へと消えていった。

カーテンの向こうで少年が無線機を使って各車両に連絡を入れるのを聞きながら、青年はパソコンのディスプレイに映し出されたマップ上に印をつける。ディスプレイ上には今付けられたもの以外にも印が付けられており、それらの印は二種類に分けられている。青い旗印と×印、今付けられたのは赤い旗印。マップ上の×印の数は圧倒的に多く青い旗印は極少数、赤い旗印に至っては今付けられた物

のみ。

「街からは離れているな。だが交易路上に存在するオアシスだ、汚染されていないければこの交易路は活性化するだろうな。同時にそれを狙う賞金首も現れそうではあるが……………」

青年はそう小さく呟いた……………。

「だいぶ深くまで来たわね」

薄暗い闇の中、足元まで伸ばされた黒髪の少女は手にした機械に表示された情報に静かに呟いた。
彼女がいるその場所は壁や床、さらには天井に至る全てを石で造られた広い空間だった。

「ああ、けど天香学園のピラミッドほどじゃない。そうだろ？」

少女の言葉に頷いたのは彼女と同年代と思われる少年だった。

「ええ、でもこの遺跡の深くまで潜っていることには変わらない。
気を付けて……………」

「了解」

手にしていた機械を少年に渡し、彼女は奥へと進むための扉を見つめ、気を引き締めるように着ていたコートを整える。少女のおとなし気な印象を際立たせつつ、お洒落ともとれる紺色のコートを着た少女とは対照的に、少年は額に上げてあった暗視ゴーグルを下ろし、実用一点張りな自身の服装を見下ろす。以前潜入した学園のバーのマスターから貰ったケプラー素材のベスト。その脇に吊されたホルスターに収められたレッタMAY Aの弾数を確認し、マガジンが空になったMP5ロゼッタアソシエーションスペシャルのマガジンを交換する。準備は万全。少女から受け取った機械H・A・N・Tと暗視ゴーグルをケーブルで繋ぎ、暗視ゴーグルのレンズに投影される情報を確認する。

「九龍、私の準備はできているわ」

「O・K、ハントの再開だ！」

異世界への転移（後書き）

姫百合珊瑚

ToHeart2のヒロインの一人。関西弁を話す天才システムエンジニア。
ンジニア。

紅蘭ではハード面ができてソフト面で苦労をすることになるのでは？という理由で登場となった子。ちなみに今現在、作者はPS3のToHeart2デラックスプラスで彼女たちと十波由真のみくりア。

姫百合瑠璃

珊瑚の双子の妹で重度のシスコンで好きな人に対しても重度のツンデレな妹キャラ。可愛いのだが所持属性がいろいろとねらいすぎな気がしないでもない。当然珊瑚と同じ関西弁キャラ。

イルファ

正式名称HMX-17a。

瑠璃付きのメイドロボで瑠璃に恋する百合ロボット。珊瑚の手により従来のロボットとは別方式でプログラミングされた結果、人と同じような心を持つ。

李典（真桜）

真・恋姫+夢想魏ルートのヒロインの一人。本作四人目の関西弁キャラにして原作では屈指のメカニック。その腕は主人公である北郷一刀の話を聞いただけでカメラを造ってしまうほど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0829x/>

METALMAX 《クロスストーリーズ》

2011年10月24日02時03分発行